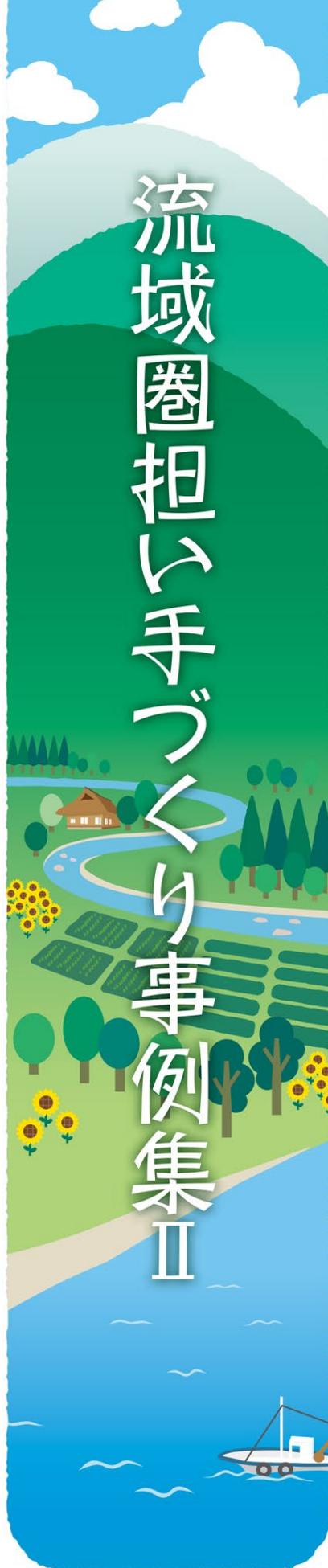
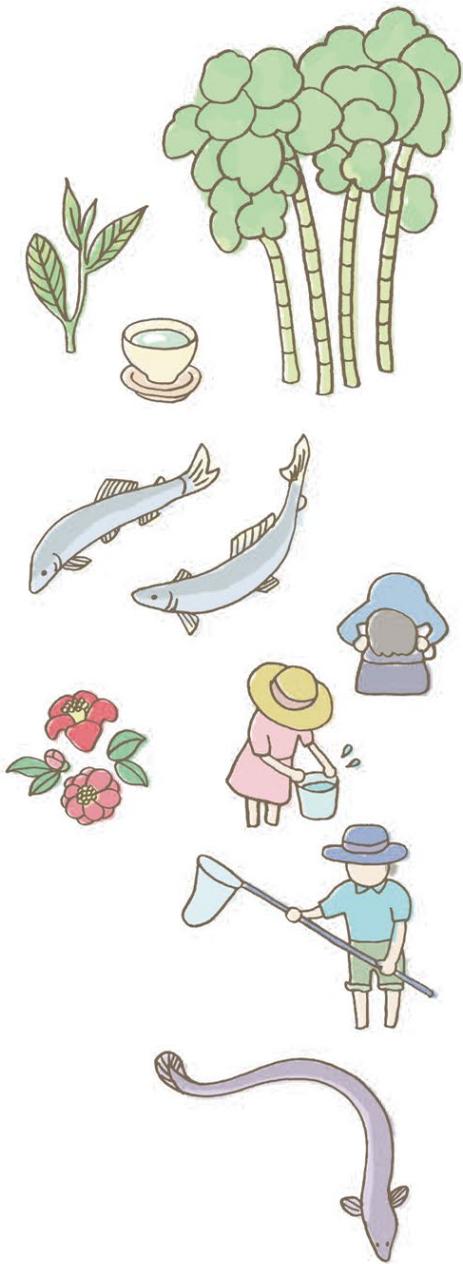


流域圏担い手づくり事例集Ⅱ



矢作川流域圏懇談会

2019年3月

矢作川流域圏懇談会 とは…

長野、岐阜、愛知の3県を流れる矢作川には、矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもとでさまざまな課題に取り組んできた歴史があります。

2009(平成21)年7月に河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取組が必要であることが明記されました。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010(平成22)年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取り組みを行うことで、流域圏全体の発展につなげることをめざす「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げました。

矢作川流域圏懇談会は山部会、川部会、海部会で構成され、各部会で学識者・行政・関係団体・市民団体などのメンバーが連携して地域の課題を抽出し、その解決方法を探っています。また部会間の連携によって、持続可能な流域圏のあり方を模索しています。

流域圏担い手づくり事例集 とは…

矢作川流域圏懇談会山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理しました。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」です。解決の糸口として、2013(平成25)年度から4年間かけ、矢作川流域で主として中山間地振興に携わる団体(一部川や海の活動団体も含む)の取材記録をまとめ、流域内の多様な主体によるネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」を4冊発行しました。この事例集づくりを通じて取材先、取材者、流域圏懇談会の間に新たな交流や企画が生まれました。

2017年からは、取材先として川や海の環境保全や水辺空間の再生・利活用に携わる団体を増やし、タイトルを「流域圏担い手づくり事例集」と改めて発行しており、本冊子はその2冊目となります。この事例集の発行により流域内のネットワーク更に広がり、流域内でお金、人材、物がまわる流域内フェアトレードと、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が進むことをめざします。



目 次

長野県

飯田市

- 1 天竜川鷺流峡復活プロジェクト 1

根羽村

- 2 根羽川漁業協同組合 5

愛知県

- 3 愛知・川の会 8

豊田市

- 4 つくらッセル 14

- 5 正晴会 17

- 6 伊熊営農クラブ 21

- 7 NPO法人マルベリークラブ中部 27

- 8 すぎん工房 30

- 9 畦道 33

- 10 岩本川創遊会 36

- 11 豊田土地改良区資料室 41

- 12 故原田裕保さんを偲んで 45

岡崎市

- 13 一般社団法人奏林舎 47

- 14 間伐こもれび会 53

- 15 ウッドデザインパーク株式会社 56

- 16 有限会社オフィス・マッチング・モウル 59

- 17 ぬかたブランド協議会 63

安城市

- 18 内藤連三氏の人となり 66

- 19 矢作川くだり実行委員会 71

天竜川鷺流峡復活プロジェクト

調査団体名	: 天竜川鷺流峡復活プロジェクト	団体代表者名	: 曾根原宗夫
設立年	: 2015年6月	対応してくれた人	: 曾根原宗夫 (同PJ代表&信南交通㈱) 地域観光事業部 企画課長・船頭
団体URL	: https://ja-jp.facebook.com/fukkatugaryuukyou/	調査員	: 近藤 朗、曾我部行子、浜口美穂
活動拠点	: 長野県飯田市 天竜川鷺流峡	レポート作成者	: 浜口美穂
取材日	: 2019年 2月20日～21日		

活動内容

1 きっかけは「ゴミの不法投棄」

信南交通(株)(当時は天竜舟下り(株))が運航する天竜舟下りは、天竜川の弁天港から時又港まで約30分の行程。そのメインとなるのが渓谷「鷺流峡(がりゅうきょう)」。しかし、兩岸は不法投棄のゴミだらけ。竹林は密生して荒れ放題。そこで立ち上がったのが舟下りの船頭たち！ 2013年、有志数人で竹を伐り始めた。



密生して川まで垂れ下がる竹林

2 伐った竹をどうしよう…舟下りのルーツは筏！2013年6月「天竜イカダ祭り」を実施「竹を伐る」と書いて筏(いかだ)。もともと天竜川には伐り出した材木を筏にして流して運んだ物流の歴史がある。それに倣い、伐り出した竹を筏にし、川を下ることによって竹林整備をPRした。「竹を使っていろいろ楽しいことができる。そのためにも竹を伐ろう」と発信。竹筏は現在も夏のイベントとして定着。



3 古くなって割れた筏の竹をどうしよう…エネルギー活用！

2013年、「阿智村山づくりの会」と連携し、筏に使った竹をボイラーの燃料にする取り組みを実施。翌年には天竜舟下り(株)が(株)モキ製作所の竹ボイラーを導入。湯船(まさに舟の形)に湯を沸かし、足湯として利用。冬の竹林伐採作業の後や竹筏下りの後に足湯で温まっている。

現在、竹も燃やせる薪ストーブ(モキ製作所)の代理店にもなっている。竹は燃烧カロリーが高く(灯油18リットル=竹3本)、繁殖力も強いので、いわば「枯渇することのない油田！」。



4 竹の伐採にはマンパワーが必要…2015年6月に地域住民と一緒に「天竜川鷺流峡復活プロジェクト」設立！

市役所の地域センターである「竜丘(たつおか)自治振興センター」に話をもちかけ、竜丘地域自治会と一緒に活動することに。事務局は同センターが担っている。



Before

5 まずはガードレール磨き

ゴミの不法投棄を防ぐために竹を伐るけれど、ガードレールが汚ければ意味がない。亀の子たわしとバケツを持って人海戦術でガードレールはピカピカに。



After

6 竹林伐採バスターズ始動！

毎年11月から2月頃まで伐採活動を実施。2015年度は、林野庁の森林・山村多面的機能発揮対策交付金を活用。現在は地域外からの参加もあり、登録者は60人くらい。

7 竹で遊ぶ

竹筏下り、終わった後は足湯で温まる。

8 伐採後明るくなった竹林には長い間眠っていたゴミや倒木が…NPO法人

「greenbird」と連携して、ゴミ・倒木の運び出し&薪割り体験

倒木も薪としてエネルギーに。50年前の空き缶などお宝ゴミも発見。

9 美味しく食べて竹林整備

竹網バーベキュー、**バンブークーヘン**(竹を芯にして作るバームクーヘン)、竹筒ご飯 etc.。すべてエネルギーは竹炭！ 竹炭作りにはモキ製作所の無煙炭化器が活躍。



まるで竹の檻の中！急斜面での伐採作業！



10 伐採する幼竹でメンマ作りに挑戦！・・・「天竜いなちく」の誕生！

せっかく竹を伐っても春先にはニョキニョキ出てくるタケノコ。何とかしたい！と、2016年に福岡県の糸島コミュニティビジネス研究会を主宰する日高栄治さんを講師に招き、まずはメンマ作りの学習会を開催。その年、阿智村の企業「あちの里」が同プロジェクトの幼竹を使ったメンマを製品化。2017年には、地元・長野原の加工グループ「笑ったり寄ったり(にったりよったり)」(耕作放棄地で野菜を作って加工している女性グループ)と共にメンマを商品化。地域の人々が作って販売することで、地域にお金が落ち、活動資金となって継続が可能になる。



11 全国に広めよう！・・・2017年12月「純国産メンマプロジェクト」キックオフ

竹林整備の一環としてメンマ作りを普及させようと、曾根原さんが呼びかけて京都で開催。22都府県から57名が参加した。



長野原 竹宵の会Facebookより。
2018年5月「100万人のキャンドルナイトin南信州」で展示

12 竹灯籠作り・・・長野原 竹宵の会が誕生！

地域食材を使う店などに赤提灯代わりに竹灯籠を置いて、地域づくりの一環に。時又灯籠流しなど、様々なお祭りやイベントでも展示。横浜の商店街からも招かれて展示を行い、好評だった。今では注文が殺到し、竹が足りない状況に。

13 どんどん広がる竹の可能性！「スーパーアチチ君」

竹の空洞がもったいないと、中にも竹を詰めて燃焼カロリーをさらにアップ！薪ストーブに使うと温かく、1本で50分持つ。



14 次世代につなげよう！・・・地元・竜丘小学校、飯田OIDE長姫高校と一緒に活動

竜丘小学校との連携のきっかけは、5年前、曾根原さんが出演したテレビ番組を見た先生が「地元こんな活動があるならぜひ子どもたちに体験させたい」と思い小学校側からオファーがあった。5年生から6年生にかけて1年を通して、竹の伐採、竹灯籠作り、竹筏遊び、竹炭作りなどを行っている。2018年10月には子どもたちが収穫した幼竹で作ったメンマを子どもたち自身が農協の直売店で対面販売。チラシやPRグッズも子どもたちが作成した。(続きの感動秘話は、次頁の別枠で紹介)

高校生とは、天竜いなちくを使った商品開発も行い、「いなちくまん」が完成！ 机と椅子を天竜舟下りの港や舟に持ち出し、青空教室も開催した。



竜丘小学校6年生。左から時計回りに「幼竹の伐採」「竹灯籠作り」「学校のプールで竹筏を作り、筏レースを開催」「メンマを対面販売」「メンマ販売のPRも工夫を凝らして」「無煙炭化器で竹炭作り。炭は親子レクリエーションのバーベキューに使用した」

飯田OIDE長姫高校。上から「竹林の伐採活動」「いなちくまん」「青空教室」



昭和36年に大水で流された温泉宿の石垣・基礎が見えるようになった



地元の古老も存在を知らなかった樹齢150年のエドヒガンザクラが現れた！
根元から幹が4つに分かれているので、四つ葉のクローバーにちなんで「しあわせ桜」と呼ばれるように



- 長野県公式Instagramで鶯流峡が「とっておき絶景スポット6選」(2018・秋の信州)に選ばれた。
- 「サザエさん」のオープニングに鶯流峡が登場！

地域コミュニティづくり・・・地域と竜丘小の子どもたちとの連携・感動秘話

●子どもたちが自主企画「つけ麺感謝の会」でサプライズ！

自ら収穫した幼竹を原料にしたメンマを子どもたちが対面販売し、30万円を売り上げた。その売上金を何に使うかを子どもたちが検討し、天竜川鶯流峡復活プロジェクトメンバー・地域の人を招き、総勢80人で「つけ麺感謝の会」を開催。経費を差し引いた残りを同プロジェクトに寄付した。売上金の小銭を入れた大きな袋を贈呈された曾根原さんをはじめ、メンバーは感涙で言葉が出なかったという。



●竜丘自治振興センターが身近に

同プロジェクトの事務局を担う竜丘自治振興センターは竜丘小学校の向かいにある。プロジェクトの活動を通じてセンター長ともふれあうようになり、子どもたちがセンターに遊びに行くようになった。



学校のプールで竹筏を作って筏レース。竜丘自治振興センターのセンター長(行政職員)も参加。楽しく筏に乗っていたものの、お決まりの展開でプール内にどぼ～ん！
体を張った行政マンの仕事っぷり?!により、子どもたちとの距離はさらに縮まった

●地域で育つ子どもたち。卒業式の背景は・・・

卒業式といえば壇上の背景は校旗と日の丸が定番。しかし、5～6年生の1年間、天竜川鶯流峡復活プロジェクトで活動した竜丘小の6年生は、校長に直談判して、自分たちで制作した作品を背景に。竹林から舟で天竜川を漕ぎ出し、向かう先に中学校が描かれている。卒業式に招かれた曾根原さんはこの絵を見てまた感涙。

同プロジェクトからは卒業祝いに子どもたちを舟下りに招待。子どもたちが舟の中から自分たちが竹を伐った現場を見上げたら・・・メンバーが手を振って「卒業おめでとう！」のサプライズ。



会のモットー(何を大切にしているか)

楽しくなければ続かない。

設立から現在に至るまで変化したこと

常に変化し続けている。毎年、想像もしていなかった新しいことが始まる。

連携している団体・専門家・自治体など

飯田市、長野県、(株)モキ製作所、NPO法人greenbird、長野原加工グループ「笑ったり寄ったり」、長野原竹宵の会、あちの里、丸正稲垣、純国産メンマプロジェクト、竹の会 夢里人(むりと)、竜丘小学校、飯田OIDE長姫高校、長野県教育委員会、他多数

チームオリジナルの質問

<質問内容> 地元の自治会と一緒に活動することは、最初からうまくいったのか？

<答え>

最初は企業の人間が来たということで警戒されたが、来る日も来る日も現場でゴミ拾いや竹伐りをする中で、地元で活動が認知され、すんなりと話が進んでいった。当事者である地元も巻き込まないと継続性がない。「ゴミの不法投棄」と「放置竹林」は地域と天竜舟下りの共通の課題。連携することで、地域にとっても天竜舟下りにとっても下記のような効果が見込まれる。

活動現場の地主さんとは、事務局である役所が間に入って、協定書を交わしてから活動している。

【地域(竜丘地域自治会)における効果】

- 不法投棄ゼロの実現
- 景観及び道路環境の維持
- 新たな担い手の創出・育成
- 次世代のための環境教育

【事業者(天竜舟下り)における効果】

- 景観維持による観光客増加
- 観光資源・サービスの創出による新たなファン層の拡大
- 事業者の魅力アップ

チームオリジナルの質問

<質問内容> メンマ作りの工夫は？

<答え>

1~2日ずれただけで硬くなってしまいますので、収穫適期は短い。タケノコが2メートルほどに伸びた時、わざと切れない鎌(砥石に刃を当てて切れなくする)を使ってさくっと切れるものを収穫する。切ってすぐに味見。場所によって味が違うという。「甘くて美味しいですよ」と曾根原さん。

ゆがいて塩漬けし、1か月間乳酸発酵、塩抜きまでは他の所と一緒にだが、味付けにはこだわりが。薄味にして竹そのものの味を味わってほしいと思っている。もともと漬物のノウハウがあった地域の女性たちだからこそできた味。冬の漬物の時期が終わり、空いた樽がメンマに活用できる。

2018年6月15日に開催された長野県「おいしい部局長会議」(*)で天竜いなちくが紹介されるなど、長野県の推奨商品に。

* おいしい部局長会議・・・知事、副知事、各部局長が信州の農産物などの特産品の情報を共有し、PRや販売促進につなげるため、試食を行い、信州のおいしさを自ら体感し、発信していく場として開催されている。

その他、伝えたいこと

千客万来。興味を持った人は飛び込んでほしい。



←舟から見たプロジェクトの現場。急斜面であることがよく分かる。竹を伐って横に寝かせた「たな」を作っているのは、作業の足場確保と、土の流出を防ぐため



曾根原さん(右)と天竜舟下り。冬はこたつが用意されている



若い船頭さん(左)、曾根原さん(右)と一緒に足湯舟の前で記念撮影

根羽川漁業協同組合

調査団体名	根羽川漁業協同組合	団体代表者名	大久保憲一
設立年	昭和9年	対応してくれた人の名前	副組合長 西尾竹司
団体URL	http://www.mis.janis.or.jp/~nebagawa_iwana/index.htm		(西尾竹司さんは山村再生担い手づくり事例集Ⅰ「根羽村猟友会」の対応者です)
活動拠点	長野県内根羽川(矢作川源流)	調査員	高橋伸夫 今村豊
取材日	2018年12月12日(9:15~12:15)	レポート作成者	高橋伸夫

活動内容

根羽川(矢作川支流)長野・愛知県境より上流部分の漁業資源管理。

1. アユ稚魚(600kg)、アマゴ稚魚10万尾(200kg)+春連休前5/3に成魚(100kg)合計300kgの放流。
2. 組合員(400軒)および一般遊漁者(年間延べ800名程度)の、漁法別アユ漁やアマゴなどの雑魚漁に対する入漁許可証の販売と監視。
3. 冷水病菌の侵入防止のため、放流魚や釣り人およびその漁具(長靴、竿、網から釣り針等にいたるまで)の監視と管理。野生生物等による病原菌の侵入防止対策。
4. カワウ・サギ類などによる食害防止対策。
5. 長野県及び矢作川流域の漁協との連携。
6. 全国で80以上の、アユ漁が主体の漁業組合(高知県だけで9ブロック21漁協が参加)が集まって実施している「清流めぐり利き鮎会」等への参加。
7. 特に山村体験における子供たちへの水の大切さ・溪流魚のお話や、魚の手づかみ指導のパイオニアである。

キャッチフレーズ

「下流域の方に清らかに澄んだきれいな源流の水を送り、その源流の水で育まれた溪流魚を皆さんに届けよう」

会のモットー(何を大切にしているか)

溪流魚という水資源を活用する立場から、源流のきれいな水を守る環境保全に留意している。

設立から現在に至るまで変化したこと

生息する全ての魚類が大きく減少している。その経緯として、かつては①大量に使用されていた農薬による影響が大きく、加えて②下流に建設された数多くの堰やダム^{の建設}により、回遊魚は海との往復が完全に遮断された。2000年9月11~12日の③恵南豪雨による多量の土砂流出が、生息していた魚類の呼吸障害と、河床に堆積した土砂による生息環境の悪化によって魚類が減少したのである。また、回遊が不可能になった代替として放流しているアユに対しては、1996~7年頃から発生した④冷水病により、現在もその生息が脅かされ続けている。2000年代半ばから、以前は当地に生息していなかった⑤カワウやアオサギの飛来が始まり、放流魚や生息している魚への食害が多くなっている。

連携している団体・専門家・自治体など

矢作川流域では長野県の①根羽川漁協をはじめ近隣の②平谷漁協、岐阜県の③上矢作漁協、愛知県の④名倉漁協、⑤矢作漁協の5漁協と連携して定期的な情報交換や遊漁日等の設定を行っており、他に愛知県の⑥岡崎、⑦巴川、⑧乙川の3漁協とも連絡は取っている。放流魚の選定や購入手配は長野県と連携しており、遊漁料の設定も連携している。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

漁協の活動に一致。その他、刈谷市・安城市に所在地のあるアイシングループや安城市との山村体験イベントにおいて、根羽川に生息する魚の生態や魚つかみのコツ、魚のさばき方や串刺しの方法、焼き方などをファミリーに指導している。

現在直面している課題

冷水病対策は、現時点では病原菌の侵入防止対策だけを行っており、決め手となる予防法は見つかっていない。矢作川水系ではあるが、愛知県外ということで根羽川にはダム建設等による補償金は皆無である。事業収支の不足分を現在はふるさと納税などで補填しているが、今後はこの不足分を補う事業を行いたい。

今後やってみたいこと

今のところ漠然とした案であるが、環境や景観に影響を及ぼさず、来客に自然な形で楽しんでもらえる釣り堀ができれば、収支の不足分が補填できる。根羽村ではアマゴの養殖を行っており、これは貴重な地域資源で絶対に存続させるべきだと思っている。こうした意味からも、アマゴを筆頭に溪流魚の釣り堀は面白いと考えている。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

根羽村森林組合職員であり、根羽村の渉外担当および情報収集担当でもある今村豊さんに全て一任。また現在根羽村では、地域資源を活かした村民一人ひとりの思想・技術・技能を次世代に伝えていく「田舎の先生」の構想があり、こうした「田舎の先生」が構成員となる「森と水源の里NEBA協議会」を平成30年3月に設立した。ここで、村民同士がそれぞれの得意技を活かした「体験プログラム」を創造し、これを多様に組み合わせることで、村民が主体となって外貨獲得を進めていく見込みである。水源の村として、水や魚という地域資源を最大限に活用し、村民同士・様々な立場の方々のご意見を参考にしてオリジナルの魅力的な体験プログラムを作ろうと活動を開始した。

チームオリジナルの質問

- <質問内容> 里山で生きるには、地域資源を活用する技術・技能が必要ですが、その点で西尾竹司さんは、スーパーマン並みに様々な素晴らしい技術・技能をお持ちです。そして、時間を自由に使って生きている「自遊人」の趣があります。どうしたら、そんな素敵な「生き方」ができるのでしょうか？
- <答え> それは、子供時代から身近な自然と触れ合い、親しんできた必然的な結果です。身の回りを取り巻く素晴らしい自然環境によって、自然に対する感性や身のこなしが養われ、そして自然を見つめ、観察する姿勢が身に付きました。こうしたことが身に染みてわかるので、安城市などから訪れる子供たちには、手を取って自然の魅力を伝え、自然と共に生きる素晴らしさをしっかりと伝えていきたいと願っています。

その他、伝えたいこと

西尾竹司さんのプロフィールと性格：

西尾竹司さんは、今では、息子さんに経営の主導権を渡されていますが、本業は(有)松尾自動車という自動車整備工場のオーナーです。村内に住まわれている方が所有されている自動車の車検や整備を手掛けて40年以上のキャリアがあり、その整備技術が優秀なことから、関係団体による表彰状をいくつも受賞されています。

また、若い頃には村内の野球チームに所属し、近隣の市町村対抗戦ではエースとして活躍し、何回も最優秀投手賞を受賞されています。

つまり、竹司さんはとても器用で腕が抜群の車の整備士であり、かつ、運動神経も抜群な人ということです。こんな竹司さんですが、さらに素晴らしいのは、人から頼まれたら断れないという性格です。人のために尽くすこと、人のことを思いやること、人に温かい視線を注ぐこと、地域の未来を考えること、そして、そのために行動を惜しまない人であるということです。結果的にとても多くの方の信頼を集め、人望がとても厚い方です。

地域を元気にするためには、根羽村で生まれ育った人の考え方と、根羽村で何かをしたい、根羽村で何かを実現したいと思う他所から来た人との融合が必要です。そんな時、お隣の村で生まれ、根羽村に移り住んで起業して、人望も厚く成功された竹司さんの生き方には、地域を元気にする多くのヒントに溢れています。

お問い合わせ先

住所・電話番号 〒395-0701長野県下伊那郡根羽村上町1713 0265-49-2039

安城市の小学生に川や魚の魅力を伝えています



川に生息する魚のお話をしています



川に生息する魚を仕掛けて採取しています



川に生息する魚を見せています



手づかみされたアマゴを「串刺し」にしています



西尾竹司さんに活動内容を聞き取りしています

愛知・川の会

調査団体名	愛知・川の会	団体代表者名	向井克之 会長(2017～現在 4代目代表)
設立年	2003年	対応してくれた人の名前	近藤朗 事務局長(2017～現在)
団体URL	特になし		(2013～2017 3代目共同代表)
活動拠点	愛知県内を中心に中部、全国へ	調査員	手塚透吾、太田修、吉橋久美子
取材日	2018年12月28日	レポート作成者	近藤朗、吉橋久美子

活動内容

よりよい河川と流域を目指して、行政(河川管理者)と市民、学識者など、様々なセクター間をつなぐ活動を展開中。現在の会員数は約100名で、多様なセクター、若者達を含めたあらゆる世代の参画を期待している。2003年の設立以降、河川を通じて「学ぶ」、「繋ぐ」場づくりを実施、そして今「行動する」会を目指し活動。

目指すのは、より良い河川と流域、そのための育て。

- 学ぶ場づくり 講演会やシンポジウム、川のエクスカージョン、多自然川づくり研修会など多数実施。
- 繋ぐ場づくり ○ 愛知県内での「行政懇談会」、「活動発表交流会」、市民団体も交えた「現地交流会」実施
○ 全国「川の日ワークショップ(1998～)」、「いい川・いい川づくりワークショップ(2008～)」への参加(全国、韓国などとの川仲間交流の促進)。
- 行動する会として ○ 個々の会員(組織)活動で活かす / 名古屋市水辺研究会(國村副会長)の他、(一社)Clear Water Project、地盤工学会、土木学会、木曾川研修会、758ミズべる会など
○ 愛知県事業「ブラアイチ」(2017～)の協力団体として、河川文化を伝える役割を担う。



総会・記念講演会「川筋の変遷」



矢田川エクスカージョン



ブラアイチin 碧南

キャッチフレーズ

人と川の新時代へ ～ 歴史・文化・営み・環境を知り、流域を未来へと繋ぐ役割を担う。

会のモットー(何を大切にしているか)

河川や流域に関するさまざまな関係をつなぐ「センター機能」を目指す。

連携している団体・専門家・自治体など

日本河川協会、愛知県(ブラアイチ事務局含む)、中部地方整備局、その他河川関連部局。2017年のブラアイチ開始以降は、開催自治体(岡崎市、蟹江町、碧南市、犬山市、豊川市)との連携を強める市民団体としては、川づくり会議みえ、当会会員でもある(一社)Clear Water Project、名古屋市水辺研究会など多数。全国組織であるNPO全国水環境交流会とは、「いい川・いい川づくりワークショップ」、「いい川(多自然)研修会」などを通じて発足以来連携を進めている。



河川文化を語る会
「銚子川など」内山りゆう
日本河川協会との共催
(2017)

いい川・いい川づくりワークショップ
in 北海道・帯広(2018)



設立から現在に至るまで変化したこと

- 2003年、公益社団法人日本河川協会愛知県支部(個人会員の会)の位置づけで発足。このような組織は全国で15団体ほどあるが、愛知・川の会は行政、そのOB関係者だけでなく、発足時より多くの市民団体を交えてスタート、これは他に類を見ない構成だった。
- 最初の10年間(2003年～2012年度)は、学びの場、交流の場を主に展開した。
／ 河川文化を語る会 2回(2003、2009)、その他講演会 16回、活動発表交流会 5回、行政懇談会 7回、川の日WS2005、水シンポジウム2007、多自然川づくりWS2009、外来種シンポジウム2010、現地交流会 15回、流域エクスカッション 矢作川(2006)始め7回(これらは2013以降も継続中)。

- 2013年度より、私と國村、井上による共同代表制に移行。近藤は、初の現役県職員による代表を担うこととなる。その少し前、10周年記念講演会「川と水と国土の未来を考える」東京大学・沖大幹教授の言葉が胸を打つ。「出来ることではなく、しなければならないことをすべきだ」～ここから自分なりの試行錯誤を始めた。個々が「学ぶ」から「行動する」へと舵を切ろう。まずやるべきこととして
 - 愛知県内、会員間だけでなく、もっと多様で広域的な連携を進め、会としての行動力を高めよう。
 - もっと若い世代と関わり、次世代育成・継承を進めよう。



2013 沖大幹氏 講演会

- 広域連携については、2013年度の現地交流会・行政懇談会を岐阜県、杭瀬川(大垣市)で実施。川づくりに関する愛知・岐阜両県職員の情報交換の場も設定した。あわせて実施(共催)した「愛知・いい川づくり研修会」においても岐阜県で始められた多自然川づくり推進制度を学ぶ。また2014年から「川づくり会議みえ」が始めた流域を巡るエクスカッションにも参加し、現在に至る。また2017年度に事務局長となった近藤は、中部圏としての広域連携を模索し始め、2018年11月に長野県で開催された「第4回川ごみサミット in 下諏訪」、2019年2月に静岡市での「第18回しずおか川自慢大賞」に参加、交流を図り、今後の中部としての連携を提唱した。
- 次世代～については、2015年2月に新たな取組みとして「流域カフェ」開催が、大きな出発点となる。当会会員になっていただいた(一般社団法人)Clear Water Project 企画で、「流域をめぐる若者達の取組み」紹介をお洒落なレストランで開催。若者達が展開する、「[小さな自然再生\(→ 当事例集「岩本川創遊会」\)](#)」やクラウドファンディングなど斬新な取組みが披露される。以降、2017年に発足した758ミズべる会、木曽川研修会などとの連携へ繋がっていく。



中部の若者達 2015 流域カフェ



2017 堀川 船上での「758ミズべる会」



2017 堀川ウォーク(川の会+ミズべる会)

- 2017年度より向井克之会長が就任。この頃から従来の河川法の目的である 治水、利水、環境のみならず、地震なども含めた防災、歴史・文化、まちづくりと観光、食などの生活や「営み」など幅広いテーマ・切り口で河川の多様性を探り、これを広く外部(一般市民)にも発信する活動を始めた。特に同年、愛知県が始めた 歴史と地形から地域を知る「[ブラアイチ](#)」事業の協力団体となり、案内役を担っている。これは、まちづくりに携わる県・自治体の土木系職員らが自ら企画・実施している点の特徴。まちづくりには「今ある姿」だけでなく、歴史・地形の変遷を知ることも重要であることから、「[ブラアイチ](#)」推進は、人材育成面も含めた大きな可能性が感じられる。

愛知・川の会と「矢作川」の関わりについて

会設立前の時代背景を述べたい。私(含む河川管理者)は、実に多くのことを矢作川から学んできた。河川管理における戦後いくつかの転換期において、矢作川では常に先駆的な取り組みが展開されたのである。

まず、1970年頃の公害・乱開発時代の矢作川沿岸水質保全協議会・内藤連三氏の戦い。(→本事例集参照)「流域は一つ、運命共同体」を合言葉に、画期的な水質汚濁管理システムが構築された。

そして1990年～河川行政に河川環境が目的化され、多自然型川づくりと市民協働が提唱された時代。豊田市・矢作川では、古岸水辺公園・水制工(1991年～)を始めとする近自然河川工事が推進され、次々に河川愛護会も誕生(→流域圏担い手事例集(2018.3月)参照「古岸水辺公園愛護会」など)し、1994年には「豊田市矢作川研究所」、1996年には「矢作川天然アユ調査会」(→流域圏担い手事例集(2018.3月)参照)が設立された。これらは全国でも類を見ない取り組みである。

2000年9月に愛知県を東海豪雨が襲い、矢作川でも甚大な災害が発生したものの、それにも負けず翌年2001年には、豊田市において「矢作川宣言」が採択され、行政と市民による矢作川「川会議」が設立された。同年、「川会議」は、東京で開催された「第4回 川の日ワークショップ(WS)」に参加し、全国数多の中で見事グランプリを受賞した。これを契機に、「川の日WS」を豊田市・矢作川で開催することを提唱し、2005年(第8回WS)に実現した。この時の現地実行委員会を構成したのが、2003年に発足した「愛知・川の会」と、矢作川「川会議」であり、関わりは深い。さらに、「川会議」構成員である矢作川漁協は、2003年に「環境漁協宣言」を採択し、新時代の漁協のあり方を目指していた。

近藤個人としては、仕事上も矢作川研究所創設時のアドバイザーを務め、WSグランプリ受賞時のメンバーであった事も含め、極めて関わりが深い。「愛知・川の会」創設時には、河川管理者として、矢作川での先進的な取り組みを県下に広げたいという思いも強かった。矢作川から多くを学んだ者として、国交省豊橋河川事務所が事務局となって現在展開中の「矢作川流域圏懇談会(2010～)」、及び「担い手事例集調査(2013～)」に関わらせていただくのは当然のことであり、「矢作川に恩返ししたい」思いでもある。



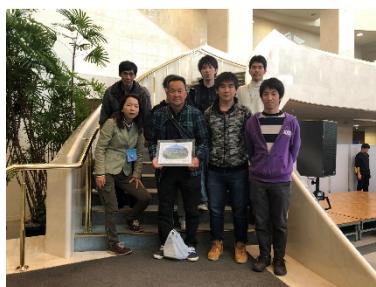
矢作川古岸水辺公園 2007年土木学会デザイン賞受賞



2001年 矢作川「川会議」

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動

特に「ブラアイチ」がそのツールとなっている。さらに会員が個々の活動で何でも実践していけば、広がっていく。例えば、近藤が「愛知・川の会」活動を踏まえ、外で展開しているのが、「22世紀 奈佐の浜プロジェクト」である。伊勢湾流域を発生源とする海岸漂着ゴミのかなりの部分が鳥羽市答志島に漂着する。そこで、愛知・岐阜・三重の広域連携プロジェクトを立ち上げ、「豊かだった伊勢湾」の再生を目指し、流域エクスカージョン、ゴミ清掃などを通して広くその実態を知らせ、学びながら課題解決の道を探っている。100年後の健全な流域圏を目指しているため、当初から3県の学生など、多くの若者達の参加を得てスタート(2013年)。その中で学生交流会も運営している。



2018いい川・いい川づくりワークショップ(北海道)での奈佐の浜プロジェクトチーム



鳥羽市内での若者達

現在直面している課題

一般的に高齢化と後継者(若手・担い手)不足が課題と言われているが、果たしてそうだろうか？
会の外に出て交流してみると、あるいはこの事例集調査を通して、随分と若者達が活躍していることに驚かされる。彼らに話を聞くと、環境保全や地域再生などへ高い意志を持っているのと同時に、既存の団体や活動にとらわれない自由で柔軟な発想を持っていることに気付く。そうか、意思の高い若者達は手垢にまみれた昔ながらのシステムを引き継ぎたいわけじゃないんだ。私たちは、そのことに気付くべきである。

ならば、私たちのようなベテランは、さらに謙虚さが必要で、今まで以上に常に学び続ける姿勢を維持すると共に、古い価値観を若い人たちに押し付けず、手助けする立ち位置がよいと感じる。私個人が、その手本としているのが根羽村の芸能集団「天下杉」(平均年齢70歳)である。(→山村再生担い手事例集Ⅲ(2016.3月)参照)
「愛知・川の会」も設立後16年、世代継承をテーマとするならば、弛まぬ向上心、謙虚さ、次世代支援の気持ちを持ち続けたい～楽しみながら。この1年程それを踏まえ、若い人たちに声をかけてきた。おかげで学生たち含め、25名の方に新規入会いただいたが、直接河川管理や計画に携わる現役世代にもっと関わっていただきたいと願う。そして、本分の領域でやりたいことを自由に活動してほしい。



今後やってみたいこと

長期的な夢はいくつかあるが、具体的に思っていることが二つある。

○ 矢作川筏下り大会の復活

以前は、古巣水辺公園～御立公園までの間で開催されていたが、12年間ほど開催されていない。川と水辺を再び身近なものとする経験を皆で共有するため、復活させたい。実は、豊田市での筏下り大会を見習って、今は下流の安城市で継承されている。

(→本事例集「矢作川くだり実行委員会」参照)

○ 「いい川・いい川づくりワークショップ」を中部で開催

～ 広域連携と多世代協働をテーマに

2005年に開催された第8回「川の日」ワークショップon 矢作川は、当時東京以外で展開された唯一の大会であった。あの熱気を再び中部地域として共有したい。中部とは、愛知、岐阜、三重、静岡、長野までを考えている。場所は、これらのどこでも良い。2020年の開催を目指したい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

どちらも10年以上前に開催したイベントである。次世代を中心として展開されるべきだろう。私たちは、それを支えたい。その人脈やネットワークは、既に熟成されつつある。

矢作川で言えば、「橋の下世界音楽祭」の世代、豊田や岡崎では「ミズベリング」、「かわまちづくり」が展開され、「りた」を始めとする新しい取組みが動き出している。(以上→流域圏担い手事例集(2018.3月)参照)

三重県でも鈴鹿川「魚と子どものネットワーク」、3県連携する「22世紀 奈佐の浜プロジェクト」の若者達、岐阜、長野や静岡県でも山や川で次世代が育っており、連携を模索している。

チームオリジナルの質問 <質問内容> ネットワークのつなぎ方、広げ方について教えてください。

私自身の経験から、組織のなかに閉じこもっていないで、「現場に出かける」ことが大切。いつも相手の懐に飛び込んで取材をし、思いを理解することでつながっていくという手法を続けてきた。実は、ネットワーク組織を標榜する団体が、いつの間にか(会員や活動が)固定化され、徐々に閉鎖的となっていくという経緯をいくつか見てきた。むしろ一個人、一会員という立場のほうがネットワークのつなぎ役になれるのではないかな。

その他、伝えたいこと

この日対応してくださった近藤朗さんは1980年に愛知県の職員となり、治水・利水から環境へと大きく舵を切った河川行政の移り変わりのただ中を生きてこられた。長年にわたり河川行政に携わっておられた立場と、市民ネットワークをつなぐ二つの立場から、活動の中核を担っておられる。

「愛知・川の会」などの活動をするようになったのは、豊田市を流れる矢作川の多自然川づくりに関わったことが大きいという。当時豊田市は川づくりの先進地であり、川を熱く語る人々がいた。その人々とは「けんか」もしたが、同時に「(川を良くしたいという)同志」であり、その人々との付き合いが今につながっているという。

だが四半世紀も経つと、人も組織も「老化」して行く。豊田市、矢作川ですら、「次世代への継承ができていない」と近藤さんは感じられたそう。ある意味「反面教師」としても学んだ事もある。常に向上・変革し、血を入れ替えなければ前に進まない。

課題となっている「活動の次世代への継承」については、若い人を活かす組織のあり方が語られた。「今までやってきたことを繰り返す必要はないし、定めた目的に向かうものであれば、手法はどのようであってもいい。個人個人が会を“ツール”だと思って、“使って”ほしい。会そのものが、直接川づくりができる訳ではない。川に関わるそれぞれの会員の(会員以外であってもいいんだけど)、仕事の本分でいかしてもらいたい。そのための応援は惜しまない」そう。例えば「学び」や「仕事」のために、参考となるような川に連れて行ってほしいというリクエストがあれば、今まで何度も連れて行ったし、これからもいくらかでも連れて行く。

「川」をテーマとするということは、流域で考えれば全ての人と地域が含まれることになる。そう考えると「川」に限らず、山であれ、海であれ、都市であれ、いい地域づくり、人と人、人と流域とのいい関係づくりにつながるならば、どんなアプローチや関わり方をしてもよいと、近藤さんは思っているそう。



古賀河川図書館を訪問した近藤さん(右)

写真



取材風景。「岡崎市図書館交流プラザリぶら」にて。



「リぶら」横には伊賀川が流れている。「人と近い川がいいね」(近藤さん)。



近藤さんはかつて伊賀川に関わる仕事もされていた。伊賀川は平成20年8月の豪雨で河道内にあった家が流されるなどの被害があった。その後、多自然川づくりが行われた。川の流れがいかされ、水辺に多様性がある、とても気持ちのよい空間だった。

近藤朗さん作成資料「愛知・川の会 2003～2018」より、2014年度以降の活動

「愛知・川の会」関連講演会、シンポジウム、セミナー		「愛知・川の会」で訪れた河川	
2014年 5月【総会】	吉村伸一 「多自然川づくりの実践と課題」	2014年 ・吉村伸一氏と多自然川づくりを巡る ①長久手市と共に香流川を考える ②稗田川、伊賀川、逢妻男川、天白川の自然 ・(矢作川)巴川、矢作川、籠川エクスカーシオン ・三重鈴鹿川水系エクスカーシオン／「川づくり会議みえ」との共催事業	
2015年 5月【総会】	向井貴彦(岐阜大学) 「里山の魚たちは今？」		
2016年 3月【第188回 河川文化を語る会】	遠山光嗣(半田市新美南吉記念館)「新美南吉童話に描かれた里山」～知多半島の森・川・溜池を中心に～		
2016年 5月【総会】	古賀邦雄(古賀河川図書館館長)「文献に見る河川・湖沼・そしてダム」	2015年 (庄内川)内津川・地蔵川エクスカーシオン	
2017年 3月【第192回 河川文化を語る会】	内山りゆう(ネイチャーフォトグラファー) 「恵みの水 めぐる川 躍動する命を写す」	2016年 ・堀川ウォーク 堀川全川／「758ミズべる会」との交流事業 ・静岡県佐鳴湖流域エクスカーシオン	
2017年 5月【総会】	福和伸夫 「震災に備え見たくないものも直視し 転ばぬ先の杖」南海トラフ地震を見据えて	2017年 ・天白川エクスカーシオン&交流会(名古屋市)：～2000(H12)東海豪雨、激特事業後、現在 ・巴川エクスカーシオン(岡崎市／新城市)：豊川巴川、矢作川巴川の分水点から流域を見る ・第一回【ブラアイチ in 岡崎】への協力(岡崎市)：乙川「久後崎切れ」現地解説担当	
2018年 3月【第196回 河川文化を語る会】	植松久芳(NPOウエザーフロンティア東海) みずから守るための気象・防災情報の活用		

【参考】 2018～2019年の活動 アルバム

- ・2018.5月 総会 講演会「川筋の変遷とその痕跡」・2018.6月 「ブラアイチ in 蟹江」
愛知県河川課職員 今井誓也氏
「ブラアイチ」を語る愛知県職員



- ・2018.11月 「ブラアイチin碧南」
- ・2019.3月 「ブラアイチin犬山」「ブラアイチin豊川」でも案内役



- ・2018.11月 交流会「碧南水族館への誘い」
- ・2018.11月 「矢田川エクスカーシオン」



- ・2018.10月 「あいち 朝まで川談義」(岡崎市内)への参加

- ・2019.3月 【第200回 河川文化を語る会】
「江戸時代の環伊勢湾経済圏と特産物流通」
日本福祉大学 曲田浩和 教授

つくラッセル

調査団体名	つくラッセル	団体代表者名	戸田友介
設立年	2018年	対応してくれた人の名前	戸田友介
団体URL	http://tukurassell.life/	調査員	神本 崇、宇野利幸
活動拠点	愛知県豊田市旭八幡町堂山432-3 (旧築羽小学校)	レポート作成者	神本 崇、宇野利幸
取材日	2018年12月6日		

名前『つくラッセル』の由来と活動内容

『つくラッセル』は、「あのじいちゃんは、ようつくらっせるなあ」という旭の方言、「つくる」に尊敬の気持ちをこめた言葉にちなんで名づけられました。その名のとおり「あんなことできるかな?」「やりたい!」と色んな想いをカタチにしながら、さまざまなモノやコトがおこりはじめています。

・ 2012年に廃校となった旧築羽小学校を再活用し、地域を担う人材創造拠点として2018年OPENしました。運営は「つくラッセル推進コンソーシアム」が担っています。このコンソーシアムは、民間企業、大学、一般社団法人、自治体の協議会であり、代表機関である株式会社M-easyが運営を担っています。戸田友介氏は、株式会社M-easyの代表であり、8年前にこの地に家族で移住してきました。出身は、北名古屋市です。

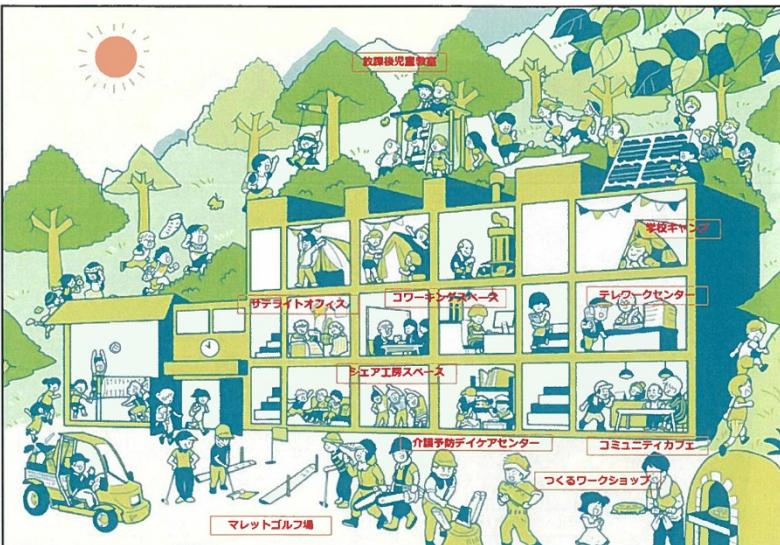
※参考(株式会社M-easyは「山村再生担い手づくり事例集2014年3月」「その後いかがお過ごしですか?プロジェクト2017年3月」で紹介)

・ 発足のきっかけは、2009年9月～2011年3月末にかけて旧旭町で実施された「日本再発進!若者よ田舎をめざそうプロジェクト」(若者PJ)。豊田市、東京大学、株式会社M-easyが連携して行った事業です。10名の若者が旧旭町に移り住み、安心安全な農業を中心に山里の暮らしを体験。さまざまな価値観の相違などの困難を経て、山里の豊かな自然環境、豊かな人間関係、豊かな暮らしなど「ここには価値あるものがあって、それを表現することが、自分たちの暮らしにつながる」ことに気づきました(その後いかがお過ごしですか?プロジェクトより)」と話しています。田んぼや畑、薪の宅配、農山村体験などさまざまな事業をおこなうだけでなく、高齢化で続けられなくなった新聞販売店を引き継ぐなど、地域に根ざした仕事づくりを行っています。

・ 地域に暮らす子どもたちからお年寄りまでみんなが集まったり、田舎暮らしに興味がある人が仲間を求めて集まったりする拠点となっています。いろいろな人たちがかわりあいを持ち、はたらく場、くらしつどう場所とし、さまざまな活動拠点となっています。何かアイデアをもっている人がいれば、その人の個性を生かし、まず実践。きっとうまくいく、そう思わせる何かがあります。

・ その他、『つくラッセル』には、レンタルオフィスやオープン会議室があり、電気室、図工室、休憩室、カフェ、マレットゴルフ場、などさまざまな機能を有しています。生活様式の変化から使われなくなった放置竹林解消の一助にならないかとメンマづくりに挑戦する事業がはじまったり、多種多様な仕事がうまれています。開館時間は平日の9時半～17時です。

・ 『つくラッセル』の運営を担っている株式会社M-easyは、何が本業なのかは、わかりません。しかし、その根底にあるのは、この地域で暮らす人たちがつながりあい、楽しく暮らしていけること。だから続けられます。



つくラッセル イメージイラスト



つくラッセル施設全景



オープン会議室



みんなの休憩室



レンタルオフィス



カフェ校長室

キャッチフレーズ

起点をつくりだす みんなのやりたいを叶える つどう、はたらく、つくる拠点

会のモットー(何を大切にしているか)

先ず始められることが大切。集まって来た人の得意なところを引き出し、やっていく。皆が心地よくなるようにまとめていく。勝手に広がっていく(広げていくではない)ことが大切。他力が大切。

設立から現在に至るまで変化したこと

つくラッセルは2018年4月15日に設立。8年前に移住し、さまざまな活動をする中で、地域の新しい拠り所として「つくラッセル」という拠点と位置付けた。スタッフが3人増えた。しごとは常にたくさんあり、常に忙しいが楽しい。

連携している団体・専門家・自治体など

活動が多岐にわたっているが、地域(流域)に腰を据えた取り組みが多い。そのため、広く見れば連携団体は数知れない。例えば矢作川水系森林ボランティア協議会・旭木の駅プロジェクト・名古屋大学COI・おいでん・さんそんセンター等があげられる。取り組みが増える度に連携団体も日々増えている。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

2017年の第45回山部会WGで一度講師をおこなった。
内容・農村の廃校の利活用をめざす「つくラッセル」の活動紹介
http://www.cbr.mlit.go.jp/toyohashi/kaigi/yahagigawa/ryuiki-kondan/yama_20171215.html

現在直面している課題

山(田舎)で生きていくためには人が大切。この地域をより住みやすい環境にしていくために活動をしている。若者世代が増え、平成26年を境に小学生の人数が増えるようになってきた。
しかし、次の地域の担い手となる40、50代は、今の60、70代の人口の半分しかいない。
若者世代のUターン、Iターンが増えていくような取り組みをするとともに、地域のさまざまな担い手を確保していくことが必要と考えている。

今後やってみたいこと

来年、家族的で暮らしの延長にあるような介護事業所を近隣の民家を活用して立ち上げたい。
つくラッセルとも関連しながら、産まれるから死ぬまでをサポートしあう事業として、地域づくりをしていきたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

地域の困っていることを手助けしていく便利屋のような事業をおこない、現場で生のニーズをキャッチする仕組みをつくりたい。人と人がお互いにつながっていくような環境づくり、つくラッセルはその人脈づくりの拠点でもある。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 将来どうしたいですか。
<答え> コミュニティーを大切にしたい。困っている人を見捨てない環境を作っていきたい。
新しいことをみつけ、どんどんやっていきたい。

その他、伝えたいこと

ぜひ一度遊びに来てください。

住所：豊田市旭八幡町堂山432番地3(旧築羽小学校)

旭地域バス：つくラッセル前バス停 下車

写真



取材風景

お忙しいスケジュールに組み入れていただき、取材させていただきました。取材前も1件打合せ中でした。

取材中も電話での打合せがありました。

超多忙の戸田さんです。



旭地域バス「つくラッセル前」バス停です。平日12時から20時まで旭内は地域バスで移動できます。

豊田市街からは乗り継ぎとなります。

おいでんバス(豊田市～小渡)、旭地域バス(小渡中央広場～つくラッセル前):毎週火・木運行



活動拠点の旧築羽小学校です。

正晴会

調査団体名 : 正晴会
 設立年 : 2017年
 団体URL :

団体代表者名 : 鈴木正晴
 対応してくれた人の名前 : 鈴木正晴、江崎研司(一社モビリティ・ビレッジ代表)、原田康弘(豊田市社会福祉協議会旭支所)、榊原礼美(あやみ)(住民代表サブリーダー)

活動拠点 : 豊田市旭地区
 取材日 : 2018年12月10日

調査員 : 洲崎燈子
 レポート作成者 : 洲崎燈子

活動内容



豊田市旭地区で採れた野菜や山菜を4~12月の毎週土曜、豊田の町中で直売している。リーダーを務めるのは、敷島自治区で区長を務め、地域の自治的な運営に積極的に取り組んできた鈴木正晴さん(71歳、流域圏担い手づくり事例集「敷島自治区」参照)。

設立のきっかけ

2017年のはじめ、社会福祉協議会旭支所の地域福祉活動計画づくりの際に、皆で今の旭の困りごとや課題を考えた。そのときに「お年寄りにとって、農業は欠かせない生きがいになっている。しかし農作物は一度にたくさんできるので、高齢者の少人数世帯が多いこの地域では、ただで人にあげたり、腐らせることになってしまう。それを出荷し、小遣い稼ぎにできる方法がないだろうか？」という話が出た。そこで、これまでも旭地区の農作物の販売は行われてきたが、売れる量には限界があり、もっと多くの量を販売することができないだろうか？と鈴木さんは考えた。

農作物の出荷先が決まる

出荷先については、green mamanの宇角佳笑さん(山村再生担い手づくり事例集・山村再生担い手づくり事例集その後いかがお過ごしですか?「green maman」参照)が仲立ちになってくれて、豊田市の町中を中心に7店舗を展開し、安心・安全な食材の品揃えに定評がある「スーパーやまのぶ」が引き受けてくれることになった。残された大きな課題が、運搬の手段だった。

モビリティ・ビレッジとの出会い

そんな時、おいでん・さんそんセンター(山村再生担い手づくり事例集Ⅲ「おいでん・さんそんセンター」参照)が紹介してくれたのがモビリティ・ビレッジだった。代表の江崎研司さん(62歳)はトヨタ自動車に勤務していた頃、名大と地域の移動を支援する社会実験「あすけあいプロジェクト」に携わっていた。しかし、持続性のある仕組みを作るためには、中山間地に入って課題を見極めながら「移動」に関する支援を行い、住民と一緒に考え行動する担い手も必要と考え、定年退職後の2016年に足助地区でモビリティ・ビレッジを立ち上げた(2017年に一般社団法人化)。おいでん・さんそんセンターが「野菜を運んでみませんか」と働きかけたことで、このモビリティ・ビレッジのボランティア会員が農作物を運搬してくれることになった。

「旭元気野菜プロジェクト」始動

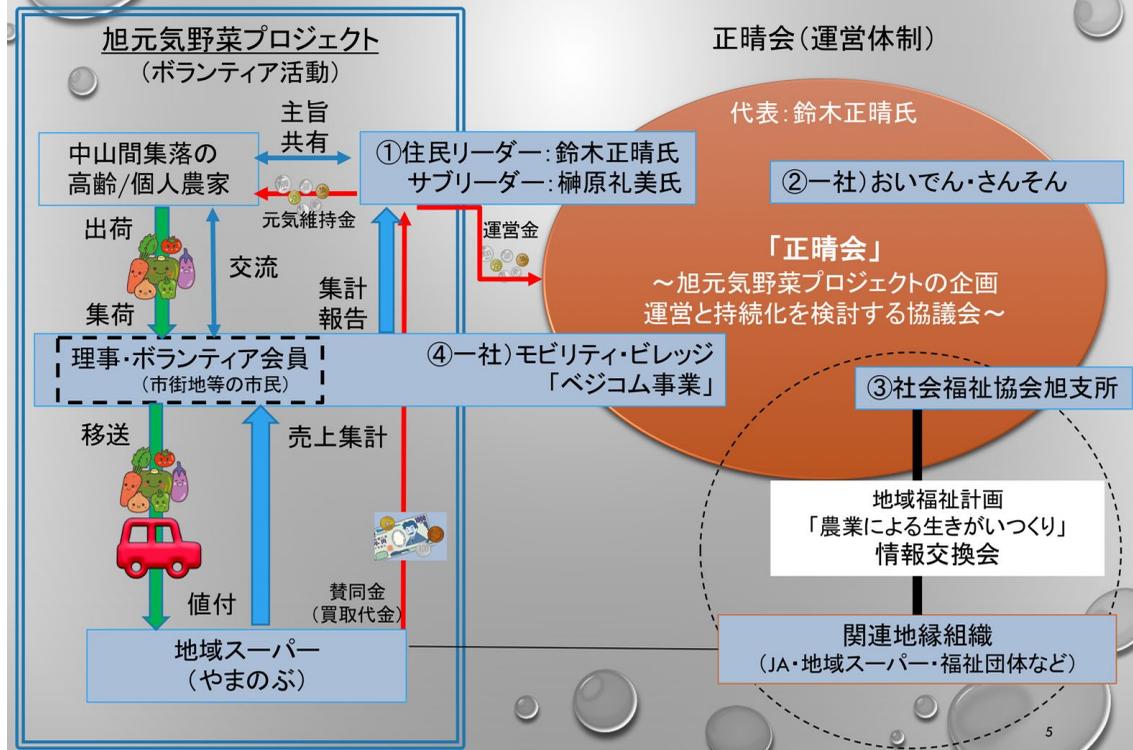
2017年4月、正晴会のスーパーやまのぶへの出荷が始まった(当初は梅坪店、現在は四郷店で販売)。出荷者は毎週土曜の朝、4つある出荷場所のいずれかに収穫物を持ち込む。供給量の指定はなく、出荷者が出せる分だけ出すスタイルである。モビリティ・ビレッジの会員が出した車が順番に出荷場所を回って回収し、スーパーやまのぶまで運ぶ。当初は山菜やタケノコが中心だったが、その後ナスやキュウリなどの夏野菜、スイカ、カボチャ、大根、葉物野菜、根菜類、ショウガ、原木シイタケその他が加わり、これまでに100品目以上が出荷された。出荷期間も3ヶ月の予定だったのが、4~12月の9ヶ月になった。



取材風景。左から原田さん、榊原さん、鈴木さん、江崎さん

「旭元気野菜プロジェクトと運営体制」

持続性のある共働の仕組み構築に向けて2017年より「正晴会」スタート！



キャッチフレーズ

農の持つ福祉力

会のモットー(何を大切にしているか)

地域のお年寄りがお金を得られ、農との関わり、社会との関わりを続けられることが、お年寄りの健康づくりにつながる。出荷者は、農作物を「もっと上手に作りたい」「もっとたいへん(たくさん)作りたい」と意欲を持つようになった。お金だけだとギスギスして事業が続かないが、お金がなくても続かない。「きずな経済」をめざしている。

設立から現在に至るまで変化したこと

- ・以前は採ったものをそのまま出していたが、商品にするには袋詰めをする必要がある。袋詰めをやまのぶに頼むと人工(にんく)賃がかかり、収益が目減りする。自分たちで袋詰めをするようにしたら、単価が少し上がった。出荷者は袋詰めがうまくなった。
- ・商品をどのように売れば喜ばれるか考えるようになった。出荷者の皆さんはサービス製品が旺盛なのでキュウリを10本も20本も袋に入れたりしていたが、それでは売れない。消費者目線になれるようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

運営組織として(一社)モビリティ・ビレッジ、豊田市社会福祉協議会旭支所(老人福祉センターぬくもりの里)、(一社)おいでん・さんそん。出荷先がスーパーやまのぶ。正晴会の鈴木正晴さんと榎原さんが地域をまとめている。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

旭地区で生産される山菜や農作物の販路を確保して、お年寄りの生きがいを支援している。

現在直面している課題

・後継者問題。若い人に入って欲しい。旭地区では榊原さんや啓佑君(山村再生担い手づくり事例集Ⅱ「あさひ若者会」、流域圏担い手づくり事例集「ちんちゃん亭」参照)、浅野君など農業に関わる若者が増えていて心強い。組織的に成立しないかと思い、他地域の事例等も研究している。持続可能な活動になる制度を作っていきたい。

今後やってみたいこと

- ・野菜は取れるときは一度に大量に取れるため、売れ残るともったいないので、加工品を作っていきたい。ペーストやドライフルーツなど。また、取れた野菜を新鮮な状態で保存できる真空パックの機械を購入できればと思っている。
- ・出荷品をストックしておける倉庫のような場所が欲しい。管理人を置けるとよい。地域にはやまのぶ以外にメグリアなど他の店に出荷している人もいるので、1ヶ所に集めておいてこの日はやまのぶ、この日はメグリアに出荷、というようにできるといい。みんながこの地域でうまくやってくれるようにしたい。
- ・現在はモビリティ・ビレッジのボランティア(登録している8~10人のメンバーがネットでスケジュール調整して、毎回2人が参加)が出荷にあたって、売り上げからガソリン代とお茶代程度の金額をバックしてもらっている。出荷者を増やし、ドライバーにパート代程度を支払えるようにして、1ターン者の小仕事になるようにしたい。



正晴会の皆さん

チームオリジナルの質問

<質問内容>

この事業には福祉という位置づけで始まりましたが、今後はどのように展開される予定ですか？

<答え>

福祉の観点で出荷してもらっているのですが、出荷物の量や形の制約が少ない。ビジネスにすると規格が厳しくなるので、出荷者が減るかもしれない。関わる人を増やしたい。ただ今後は、ビジネスの視点も参考にしながら体制を改善していけるといい。福祉とビジネス、どちらにシフトしていくにしろ、続けていくことが重要。

...山菜を採る林を見せて頂きました...

鈴木さんはご自宅の裏山でたくさんの山菜を収穫しています。よく間伐された明るいヒノキ林の中には、若葉・若芽が山菜として人気のあるコシアブラやタラノキがたくさん生えていました。人工林でも間伐すれば育つのだそうです(そしてコシアブラは、山の手入れをしないと細くなってしまふのだそうです)。ツクシは草原だけでなく林内でも採れます。はかまを取らないものでもよく売れて驚いたそうです。シダの仲間、クセがなく食べやすいゴゴミは植えたら増えたといいます。竹林で採れるモウソウチクやハチクのタケノコは人気が高く、スーパーの店頭で直売したら店舗の開店前に売り切れたこともあるそうです。林縁から畑までの草刈り場だった場所ではワラビやゼンマイ、ウドも採れます。明るい林内から林外に続く空間はまさに山菜の宝庫となっていました。一から栽培する必要のある作物と違って、生育環境を整えれば収穫できる山菜は、イベントなどで売ると利益率が高いのだそうです。

放置人工林は豊田市のみならず全国で問題になっていますが、人工林でも間伐すれば、これだけ豊かな山の恵みをもたらしてくれるのだということを初めて知り、驚きました。このことが多くの山主さんに知られることで、間伐への関心や意欲の向上につながっていけばと思います。(洲崎)

写真



林内での山菜採り



パック詰めされたコシアブラ



店頭販売のようす

* 取材風景以外の写真は(一社)
モビリティ・ビレッジHPより転載

伊熊営農クラブ

調査団体名：伊熊営農クラブ	団体代表者名：後藤京一氏
設立年：2015年(平成27年)	対応してくれた人の名前：後藤京一氏
団体URL：	
活動拠点：豊田市伊熊町	調査員：野田 賢司
取材日：2019年1月12日	レポート作成者：同上

活動内容

(1) 活動目的

本団体の活動は、集落営農の組織化による営農活動の推進と、移住者を受け入れ新規就農者を育成することによって山里の村づくりを持続・発展させることを目的としている。

(2) 設立経緯

矢作川上流域の山間地人口は、下流域で工業出荷額が伸びて都市人口が増加する平野部と対照的に、減少が著しい。豊田市の北部に位置し西三河の水ガメとして建設された矢作ダムが築かれた旧旭町(現旭地区)もそのような人口希薄化する過疎地域である。中でも特に旭地区の南東部は、標高400mを超える三河高原小起伏面にあり、高齢者率が高い地域の一つである。その中に豊田市伊熊町(以下、伊熊地区と呼ぶ)の集落(山里)がある。ここでも農作業の高齢化、後継者不足で従来からの農業が続けられないという深刻な問題に陥った。地域の人工林の手入れ不足と共に、放棄水田、農地・用排水路の修繕不足、農地の獣害による荒廃が増加し、復旧手入れ・対策など管理手間も増加するなど、農業生産量・収益の減退、農地保全不足がスパイラル化し、山里の農地・集落の美しい景観、伝統文化の継承も失われていった。

伊熊地区は、今後、地域の営農、集落活動が困難になるとの危機感が芽生え、2000(平成12)年に、中山間地域等直接支払制度の交付金を利用して、当地内の営農活動を維持・推進する取り組みを開始している。

(3) 主な活動経過

2011(平成23)年度

旭町が豊田市に合併して5年が経過し、危機感が増した伊熊地区は、今後の村づくりを検討することにした。集落で話し合って伊熊地区を分析し、地域の強みと弱みをまとめた「伊熊カルテ」を作成した。そして今後の取り組み目標を定めた「伊熊組集落ビジョン」を策定し、伊熊地区ならではの集落営農組織の設立を目指した。

2012(平成24)年度

4月 集落営農組織「伊熊営農クラブ」を設立。高齢化により耕作できない水田の作業を請け負い、集落全体で営農に取り組む体制を整えた。その後、共同コンバインを導入。

営農困難な農家に対して当クラブが中心となり、農地の草刈り、獣害対策の作業、水稻の基幹作業の支援を進め、近隣集落にも活動を広げた。

経営所得安定対策に加入し、集落単位で生産調整を実施。WCS稲(稲発酵粗飼料)、野菜等の転作作物の共同栽培にも取り組んでいる。また、中山間地域直接支払交付金を活用して共同利用機械(苗箱洗浄機、動力噴霧器、草刈りハンマーモア、バックホー等)を充実し、参加者全員で利用している。

2015(平成27)年度

収穫した粳の乾燥・調整、粳摺りプラント施設を設置した。当施設は最大1,500俵の收容能力があり、20～23haの水田収穫ができる。

農地を活かすため、若手社員の積極性等を育てる人材育成の場を求める企業を対象に、豊田市のおいでん・さんそんセンターが間に入り、企業研修(農業体験・学び)の受入れを開始した(3年契約、平成30年度更新)。

2017(平成29)年度

12月 集落全体で営農し、地元への定住希望者を雇用できる環境を整えるため、法人化した。

2018(平成30)年度

11月「平成30年度 東海農政局長賞」を 農事法人 伊熊営農クラブが受賞した。(名古屋で授与式)

キャッチフレーズ

- 地域全体で営農し、耕作放棄地の解消と移住者の受入れで、地域の活性化。
- いろいろな人が山里の農地に集い、農業体験や学び、自然・人とのふれ合いを通して、みんなで地域農業を応援し山里を元気にしよう。



写真1 伊熊公会堂前



左：旭地区林育推進ポスター、右：バス停

写真2 公会堂で農業体験受入れを語る後藤会長



写真3 伊熊地区の農地：水田（冬季）



写真4 伊熊地区の農地：畑・水田（冬季）

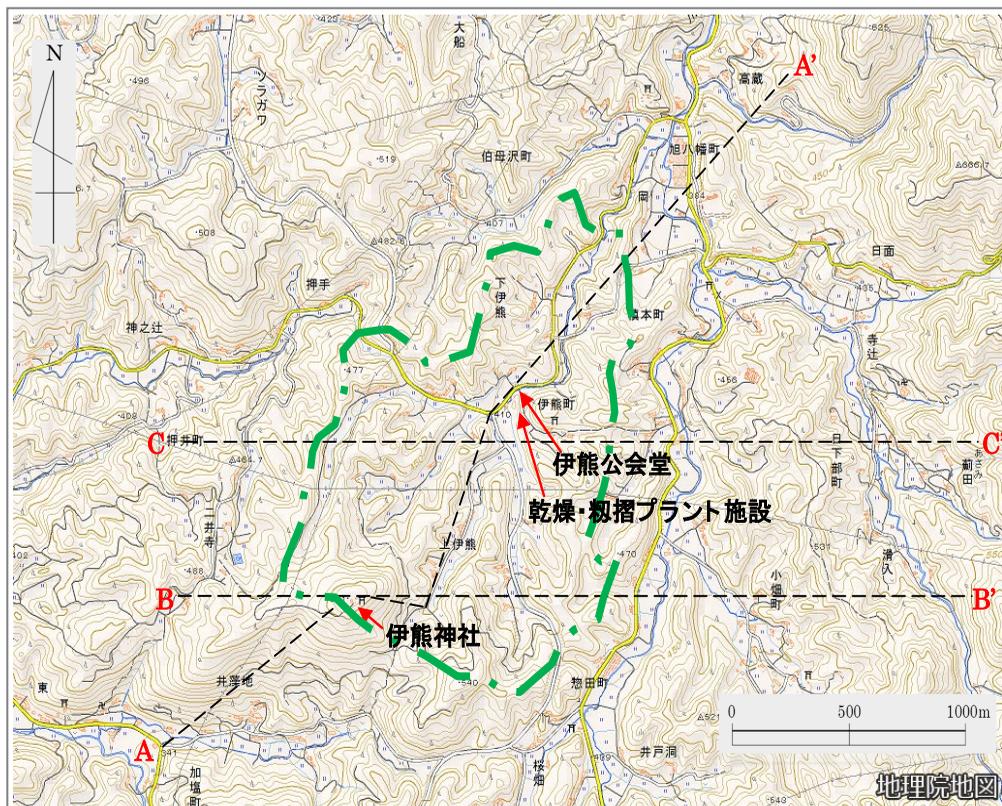


図1 伊熊地区

会のモットー(何を大切にしているか)

(1) 農業生産の取り組み

水稻の作業委託、農薬や肥料の共同購入などにより、収益の増加に努めている。また、収穫した米を地元スーパーなどに直接販売し、農業収入の確保につなげている。大豆・黒豆の選別に、隣接の営農組合と共同利用している機械を使用し、経費の低減に努めている。

(2) 耕作放棄地解消等の取り組み

企業等と協力、また、女性組織と協力して野菜を作付けすることで、耕作放棄地の解消に取り組んでいる。本クラブ設立後、地区内に新たな耕作放棄地の発生は無い。さらに、「あいち森と緑づくり事業」を活用して地域の森林整備に取り組んでいる。

(3) 新規就業者の育成

豊田市が設置した農業研修施設「農ライフ創生研修センター旭研修所」の管理・研修指導の業務を受託し、毎年10名程度の研修生を受け入れ、技術指導を行っている。このうち、毎年1名を水田稲作のオペレーターとして養成している。研修生は、研修終了後、近隣地域で水田稲作のオペレーターとして就農し、周辺地域を含めた新規就業者の育成に大きな役割を果たしている。

(4) 企業の農業研修体験の受入れの取り組み

現在、県内の企業2社を受け入れている。1社は社員研修の一環として、月1回の野菜栽培に加え、田植、稲刈り体験を行っている。別の1社も月1回の農業体験に加え、収穫物を原料とした日本酒を商品化している。このことにより、地区内の作業放棄の解消に努めている。

(5) 移住者を受け入れる取組み

伊熊地区は、企業の農業研修体験の受入れなど、都市住民との交流に積極的に取り組んできた。都市住民を受け入れる土壌があるため、Iターン者で2名と1家族、Uターン者(移住者)で1家族を受け入れ、平成22年に中学生以下の子供がいなくなったが、現在7名の子供が生活するようになり、地域全体の活性化に大きく寄与している。

伊熊神社も自然・文化ふれ合いの場になっている。地区の賑わいは祭礼維持にも貢献している。

設立から現在に至るまで変化したこと

・有志者を募ってクラブを立ち上げ、初期活動を推進した。その後、農地直接支払制度を活用し、活動の理と収入の利が地区に理解されて、加入が増え、今では地域全体で営農を推進する。山里の美しい農業景観が維持されている。農業体験の受入れにも取り組み、地域活性化に繋がっている。

連携している団体・専門家・自治体など

・豊田市旭地区
・おいでん・さんそんセンター
・二つの企業(現在、農業研修体験受入れ中)

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動

・未開発。

現在直面している課題

・まだまだ若い世代の人口が希少状態。移住者を受け入れていきたい。

今後やってみたいこと

・今までの水田耕作中心の経営に加え、今後は、ハウスによる“ほうれん草”栽培にも取り組むこと。



写真5 乾燥・糶摺り・袋詰め一貫プラント棟



写真6 農業機具庫：共同コンバイン



写真7 人工林：当地区は間伐が進行している



写真8 獣害対策：イノシシ捕獲用檻

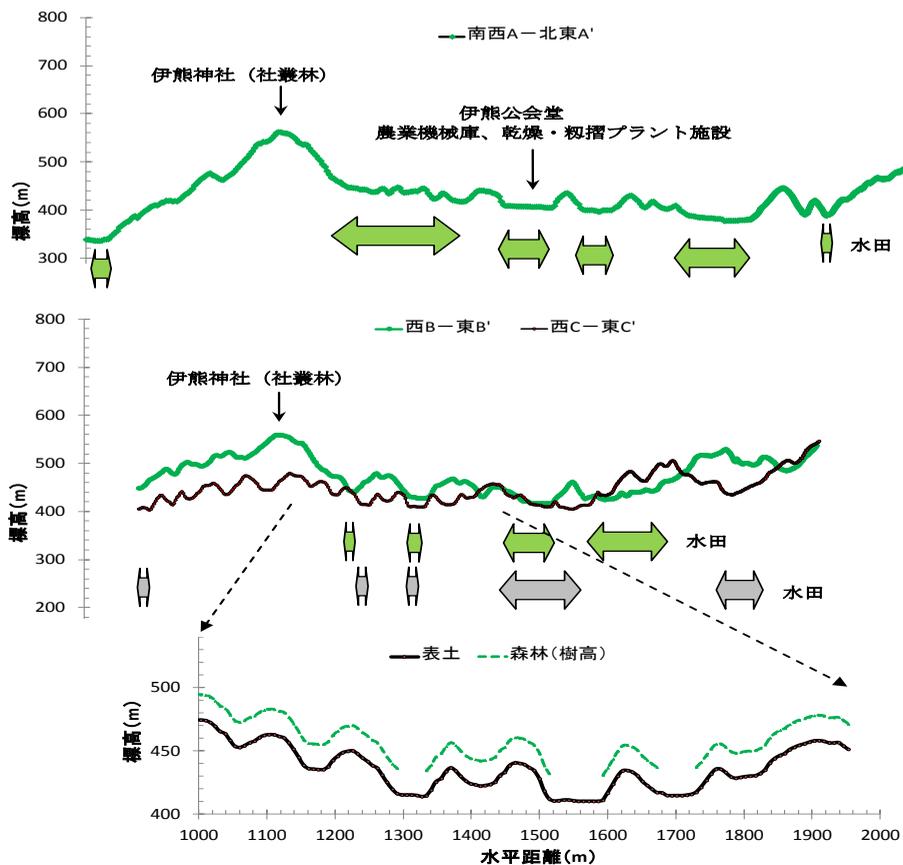


図2 伊熊地区周辺の地形断面

(樹枝状の浅い谷底が農地整備され、山林縁に集落・家屋が分散する。)

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・連携の仕組み、ネットワーク

チームオリジナルの質問

<質問>

- ・どのような人が活動メンバーですか？その年齢層は？

<回答>

- ・伊熊地区内外・近隣の農業者です。年齢層は50～60代、更に80代まで。高齢者は年金の副収入になります。
- ・当地区の農地(水田)は、約35年前、昭和50年代後半(58年頃まで)にほ場整備を行っています。地域の営農や集落活動が困難になり始め、当地区だけでなく他地域でも同様に、行政から地域農業の組織化が提案され指導を受けました。しかし、地主である農家は、「行政の転作奨励でえらい目に遭った」という苦い経験から行政の勧めに懐疑的で、農家の参加意識を阻みました。それで10年くらい時間をかけて集団化により組んでみるつもりで始めました。
- ・最初は、地区全員一致でなく、80代後半の方、リタイヤした方を集めました。直接、現金で払ったら、加入者が急に増えました。現在の参加者数は、地元(伊熊地区)が23人、他は45人、合わせて68人です。営農対象の水田面積は16町歩、転作農地は6町歩です。転作は保守管理、ブルーベリー、野菜栽培・ハウス施設です。依頼がありますと作業を手伝う人を回します。地元の人には頼んであります。地区内外、近隣の若い人に、ターンで余裕ある方にも、「小遣い収入になる」などと声を掛けています。
- ・「つくば元気クラブ」の会員は、つくば自治区(旧築羽小学校学区)の9地区(惣田・小畑・日下部・榎本・伊熊・伯母沢・八幡・余平・坪崎)に居ます。「元気クラブ」での農作業は、火曜日と木曜日、2時間毎、ネギ、自然薯、白菜、ナス・キュウリ、ハウレン草等の野菜栽培ほ場で仕事されています。時給は1,000円(手取り700円)で、月2～3万円の小遣い収入になります。貯めて旅行を楽しんだりされています。この会員間で「あそこの水田は云々・・・」と情報が飛び交い、依頼が容易なので、水利管理をご婦人らに視てもらっています。この手当は1反歩あたり年1万円です。

<質問>

- ・活動はどの範囲を対象にされていますか？

<回答>

- ・伊熊地区を中心に近隣地区(つくば自治区、更に依頼された旧足助町の一部)の農家で、各戸の所有水田の耕作(稲作)が、担い手の高齢化や減少などによって手が回らなくなった農地を対象としています。引き受けは、一律ではなく、手が回らない耕作・管理の程度、農家の依頼に応談し、柔軟に対応しています。引き受けた農作業はメンバーが分担して行います。営農活動を通して「村づくり」をしています。

<質問>

- ・水田(稲作)作業について

<回答>

- ・水利(かんがい用水・排水系統)の管理は地主が基本です。当クラブに任される場合もありますが、極力「自分」で行うことです。当クラブは、田起こし・田植、稲刈り、乾燥・糶摺り等を担っています。部分的な作業の依頼も引き受けています。草刈り、カメムシ防除の消毒、獣害対策、イノシシを防ぐ柵を農地の周囲に設置する作業。しかし、イノシシには学習能力があります。やがて下端の軟弱土で水田に侵入する穴を空けたりします。イタチごっこです。

<質問>

- ・イノシシの捕獲は？野菜は？サルが来たりすると荒らされますが。

<回答>

- ・捕獲は年40～50頭に上ったことがあります。それで一旦、生息頭数が減りますが、その後に再び同じ獣害状況になります。シカも増えています。被害予防ネットも高いのが必要です。野菜は、ハウレン草、ナス、キュウリ、大豆、黒豆などの生産を取組み中です。お互い協力し合っています。サルは居ません。

チームオリジナルの質問

<質問>

・水稻の作付品種は？

<回答>

・「ミネアサヒ」です。標高300～500mの中山間地域での栽培に適した品種で、当地区は標高約400mで丁度その中間です。稈(イネの茎)の腰丈が低く倒れ難い、イモチ病が少ない、米は小粒で透明感がある、炊きあがりにはツヤと光沢がある、粘りと旨味がありコシヒカリに似た味、冷めても美味しいなどの特徴があります。当地方で生産されるミネアサヒは旅館や料亭などに提供されることが多く、高級米として有名です。

<質問>

・今の山里の定住世帯数と人口について、伊熊地区は如何ですか。

<回答>

・1～2人暮らしの世帯(農家)が多くなっています。3人暮らしの家は少ないです。孫まで住んでいる家は稀です。旧旭町の地域で高齢化率が高い地区は、当地区が3番目でした(平成24年11月頃)。さらに、一人暮らしの家が17世帯(平成23年度)で、かなり多い状態です。当地区は、かつて高校生が卒業して以来18年、学校に通学する子供が居なかったのです。23～24年程誰も生まれてこなかったのですが、今、ようやく孫が住む世帯ができました。7才の子が居る。(公会堂の外を眺めて)今、Uターンの方が、畑地を宅地に変更して家を建てようとしています。

・(南方の作業車両を指さして)今日はあの山にヒノキの伐採に入っています。一帯の山は、昔草刈り山でした。昭和30～40年代に植林が行われました。それが生長して今では農地の日当たりが悪くなりました。そしてイノシシのみ元気です。

・地元を出て都会で育った方が、最近Uターンで郷里に戻られました。その方から聞いた話ですが、「孫が良い子になった」と、当地区に住みやすさを感じていらっしゃるようです。その子供さんは都会に住んでいたとき情緒不安定の病にかかったのです。当地区に移り住んで保育園にも通うようになったら、その病が解消されたとのことでした。

<質問>

・農地を使ってもらえばどのような人でもよいのですか。

<回答>

・農地が荒れないようにしてもらえればよいです。農地を使ってもらうのが主です。農地を維持して生きる。手伝いにボランティア参加では続くわけがありません。

・人災派遣会社の研修生は、名古屋市、四日市、浜松市、大阪から、ブラジル人も企業従業員の子供も来ます。研修を活かしていく、会社のためになると。収穫感謝祭など、盛り上げるイベントは勝手に行っていただいて。内容によって一部は有料ですが。農業体験研修は続けさせて欲しいと好評です。

<質問>

・「伊熊神社」について、また「駒山」との関係とは？

<答え>

・標高563mの小高い山の頂にあります。昔の山城で、周辺との関係があります。伊熊神社の昔の社殿は焼失してしまいましたが、西隣の白鳳年間創建の二井寺に遡るといわれています。信仰の対象である社寺林は昔から聖域として人手を加えることがなかったので、自然状態がよく保たれ、うっそうと茂って自然林の様相が見られます。社叢林は、「愛知県環境保全地域」に指定されています。高木層にシラカシ、アラカシなどカシ類の常緑広葉樹の大木に混じって、モミの巨木も見られ、針広混交林になっています。落葉広葉樹の大木も混生しています。私たちは祭礼・伝統行事を継承しています。

・神社の山は周囲の山より高い孤立の高所で、この頂から駆け上がった天馬が東方に鎮座する孤立の高所「駒山」(奥三河湖の南、昔は馬の放牧地)に着いたとか。その蹄の痕が頂にあるとか。そのように伝え聞いております。

<謝辞>

・清流の源は美味しい米の産地なのですね。訪れたいような興味深い山里です。長時間ありがとうございました。

NPO法人マルベリークラブ中部

調査団体名 : NPO法人マルベリークラブ
 設立年 : 2006年3月15日
 団体URL : <http://mulberryc.exblog.jp>
 活動拠点 : 愛知県豊田市足助地域、猿投地域、旭地域
 名古屋市天白区植田東2丁目1606(事務所)
 取材日 : 2018年12月11日

団体代表者名 : 代表理事 藤澤秀樹
 対応してくれた人の名前 : 藤澤秀樹
 調査員 : 高橋伸夫 沖 章枝
 レポート作成者 : 沖 章枝

活動内容

【会の名称】

マルベリーは桑の英語名

【活動内容】

- 休耕田畑に桑の木を植え、育てる
- 地産地消として桑の葉茶を商品化して、オアシス21の「オーガニックファーマーズ朝市村」やヘルシーメイト等で販売。(2015年農林水産省地産地消法の6次産業事業化事業として認定を受ける)
- 蚕を育てる
- 桑・蚕・繭の有効利用を探る
- 桑・蚕・繭の魅力を伝えるため大学や専門学校と関わりを持ったり、小学校で教室を開いている

【活動日】

毎週金曜日と隔週の火曜日

【設立の動機】

近年、日本の里山は手入れする人も減り耕作放棄地が増え、その対策が地域の課題になっている。

当会は休耕田畑対策に桑を植えるという想いを核にしてNPOを立ち上げ、活動を始めた。かつては全国いたるところに桑畑は広がっていた。養蚕は日本の主要産業であったが、社会構造の変化の中で衰退した。このことが良いとか悪いとかいうのではなく、蚕がジャパンスルクと呼ばれた良質な絹を作ったのは、唯一餌にしている桑が良かったからではないかと気づいた。桑というと誰もが「蚕の餌」を連想し、養蚕という産業に埋没して思考しなかったが、命をつなぐ野菜と同じように良質の食品として人間にも活用できるのではないかと考えた。桑と同様に蚕も繭も活用できるのではないか。

歴史的な文化を伝えながら、桑、蚕、繭の新しい可能性を探究し里山の保全をしたいと思った。

キャッチフレーズ

地産地消

子どもたちに桑・蚕・繭の文化を伝えよう

会のモットー(何を大切にしているか)

都市と農山村の交流

農村で作られたものを通して都市で暮らす人達に土や植物のエネルギーを体感してもらうこと

写真(取材時撮影)



オーガニックファーマーズ朝市村にて

設立から現在に至るまで変化したこと

トヨタ財団やトヨタ環境活動助成プログラム、あいちモリコロ基金をベースにして桑・蚕・繭をテーマに活動をさせていただいた。幸い結構な支援をいただいたのでさまざまな取り組みができた。例えば桑葉乾燥粉末の成分分析(日本食品分析センター)。桑の葉茶と粉末の製造。桑紙(コウゾはクワ科)、桑の枝活用のランプシェード制作。桑の草彩染紙工芸、繭の草木染め真綿、無菌養蚕システムの実践。繭、蛹、糞等の活用の検証等々。

10余年経過して、これまで培ったものをどのような形で次世代につなげていくかを考えるようになった。現在は活動資金捻出のために桑の葉茶生産が主な活動になっており、会員が毎週豊田市の作業地へ通っているが、今後は桑の葉の生産と販売を分離したほうが良いと思うようになっている。

ボランティアを募り桑の葉を摘み(年3回)、それを足助のお茶屋さんでお茶にしてもらって名古屋で袋詰めしているが、会員の高齢化等も考慮して、これからは事務所のある名古屋市で啓蒙・販売活動と子どもたちへの文化の伝承を主にしたいと考え始めている。こうした中で、新たに農業と福祉の連携という方向性が見えてきた。豊田市の無門福祉会が休耕田を手に入れたと聞いたので、当会がサポートして桑の木を植えていただくとう話し合いを進めている。桑を育て葉を摘んでもらって、買い上げる。桑の葉茶だけでなく、粉末にしてパンやケーキの材料などに運用していけるのではないかと。ただし、この基本は地産地消と考える。地域資源の活用は大規模経営ではできないと思う。季節による変化にも対応できる小規模多品種が望ましいだろう。

耕作放棄地を抱える農家にも桑の木を育ててもらって農家の収益に結びつくようにしたいと思っている。

連携している団体・専門家・自治体など

おいでん・さんそんセンター(山村再生担い手づくり事例集Ⅲ9頁) 無門福祉会 わっぱの会 ヘルシーメイト
岡谷蚕糸博物館 (株)宮坂製糸所 日本シルク学会 今村無菌システム研究所

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

耕作放棄田畑に桑の木を植える

発足してから実践してきたことが山村再生をめざしてきている

現在直面している課題

会員の高齢化問題。後継者を探しているけれど、なかなか興味を持ってくれる人が見つからないでいる。

これまで培ってきたスキルを農業と福祉の連携というかたちの事業所に伝えることで、継承していける可能性が最近でてきている。

今後やってみたいこと

- ◆都市生活の人に(家族を含めて)いなかの自然に触れてもらうこと。みんなが自然界の中で生かされていると感じられる機会を作りたい。自然界は一人一人に対して平等だからそれぞれのやり方で接すればよいと思う。農村は都市の本家であると言えるが、どこも勝手に立ち入ることはできないので桑畑が触れ合えるきっかけになればと考えている。
- ◆農業と福祉の連携の充実
- ◆一次産業は近くの人が携わることが望ましいと思うので、農家の人が桑を生産出来るようなシステムづくり

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

これまでにつながった人脈はあるけれど、更に、ある程度まとまって動けるような団体の参加が欲しい。

チームオリジナルの質問:桑畑には獣害などの被害はないのですか

<答え>猪は木を根こそぎ倒して、鹿は葉も幹もかじる。ネットを張って対応しているけれどどこから入るのかわからない。目が離せない。絶えずチェックしないと大変なことになる。

その他、伝えたいこと(取材者の感じたこと)

子どもの頃、親に隠れて桑の実を食べたことがあった。口の周りを赤黒く染めて直ぐに親にばれて叱られたけれど、甘い味が今でも忘れられない。童謡の「赤とんぼ」にも登場する桑の実。けれども今、どちらかと言えば田舎に属する

すぎん工房（すぎんこチーム）

調査団体名 : すぎん工房（すぎんこチーム）
 設立年 : 2015年
 団体URL : <https://ja-jp.facebook.com/suginkoubou/>
 活動拠点 : 愛知県豊田市杉本町三斗成1-3
 取材日 : 2018年12月6日

団体代表者名 : 渡邊さとみ
 対応してくれた人の名前 : 渡邊さとみ、鈴木明日香
 調査員 : 神本 崇、宇野利幸
 レポート作成者 : 神本 崇、宇野利幸

活動内容

豊田市旭地区にあるお菓子工房です。メンバーは8人、全員女性です。毎週1回（木曜日）に集まりお菓子を作って、販売しています。地元産食材を使いクッキー、クラッカー、マフィン、ケーキなど「心と体にやさしいお菓子」を作っています。もともと保育園跡地で、敷島小学校の隣・杉本こども園の上という立地状況であり、お母さんが子供を迎えに来るついでにお菓子を買いながら交流の場となっています。

併設の交流スペースにて、毎月の第1木曜日はみんなでカレーを持ち寄る「カレー研究会」が開催され、コミュニケーションを楽しんでいます。

- ・毎週木曜日11:00～16:00「すぎんこ」のお菓子販売
- ・毎月第1・3水曜日11:00～14:00「めぐちゃんパン」の販売
- ・毎月第4月曜日11:00～14:00「たまちゃんパン」の販売
- ・毎月第2金曜日11:00～14:00「ジオジオパン」の販売

※スケジュールは変更になる場合があるので、Facebookページでご確認ください。

キャッチフレーズ

地元の農産物とこだわりの材料を使った「心と体にやさしいお菓子」を作っています。

会のモットー（何を大切にしているか）

無理をせず、楽しく続けていきたい。お菓子を作りながら、会話を楽しんでいます。

設立から現在に至るまで変化したこと

・1ターンの女性たちが人とのつながり、情報交流の場として、おやつを持ち寄り会話を楽しんでいたのが始まりです。その後、安全な材料を使った手作りのお菓子を求めている方々がいることが分かり、仲間をやってみようということになりました。

- ・地元で材料を生産してくれる団体とつながることができました。
- ・立ち上げメンバーは6人、転居などで入れ替わりを経て現在は8人です。
- ・パン作りの得意な知人に声をかけ、パンを販売してもらえるようになりました。

連携している団体・専門家・自治体など

いこまハウス（材料のくみみを収穫・加工してもらっています）、敷島自治区産業部（材料の野菜を栽培してもらっています）、つくラッセル、おいでん・さんそんセンター、ぬくもりの里など様々な地域の活動団体のイベントなどでお菓子の販売を行っています。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

- ・私たちの活動(お菓子を作りながら交流できる場)で、「豊田市旭地区に行ってみたい!移住したい!」となってもらえたら良いな。
- ・地元食材を利用してお菓子を作ることで地域の連携が生まれています。

現在直面している課題

- ・農家や小さい子どものいるメンバーもおり、繁忙期には人手がたりない。メンバーをもっと増やせたら良い。お菓子の注文も大口になると今の人数では対応ができないこともあります。
- ・メンバー募集中(男性OKです。)
- ・工房の稼働率が上がると良い。(いろいろな年代の方々に参加してもらいたい。)

今後やってみたいこと

- ・昨年までは、市の補助金もあり遠方から講師を呼んでパン教室をやってきた。今年は自立してやったが、忙しかったこともあり、昨年の回数までできなかった。パン教室、お菓子づくり・等いろいろな講座を設けたい。(やって欲しいという声もあります。)
- ・周辺には高齢者も多く、和菓子の要望もあるが、日持ちの問題もあり課題となっています。その他、米を使ったメニューも増やしていきたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・コミュニティの場であり、いろいろな人が集う場であるため、人脈を広げていきたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 将来どう発展させていきたいですか。

<答え> お菓子の種類は現在約30種類ありますが、米を使ったお菓子などバリエーションを増やしていきたい。

- ・メンバーが増えれば、週1回の集まりを週2~3回にできるようにしたい。
- ・今後メンバーを増やし、ギフトの宣伝をし需要を増やしたい。
- ・若い人のメンバーを増やし、将来的に継続してやっていきたい。

その他、伝えたいこと

- ・自分たちが子どもに安心して食べさせられるお菓子を作っています。乳製品、卵、小麦不使用のお菓子もあります。
- ・ターンを考えている方々、豊田市旭地区には仲間がたくさんいますよ。まずは、「すぎん工房」を訪れ、私たちとお茶を飲みながら、楽しくお話することから始めましょう。

写真



貴重な体験を語っていただきました。
笑顔がステキです。



取材中にも園児の皆さんが大好物のクッキーを「お買いもの」です。



おいしい手作りクッキー。種類も豊富です。



旧保育園の一室を改装し、2016年4月にオープンしました。工房となりの部屋は、コミュニティスペースとして開放中。ただいま会員を募集中です。

畦道

調査団体名	特定非営利活動法人「みち」 デイサービス型地域活動支援センター「畦道」	団体代表者名	代表理事 今枝美恵子 対応してくれた人の名前	今枝美恵子
団体URL				
設立年	2018年			
活動拠点	豊田市	調査員	丹羽健司	
取材日	2018年12月27日	レポート作成者	丹羽健司	

活動内容

2018年、山間部に住む精神障がい者の居場所づくりと就労支援を目指す、デイサービス型地域活動支援センター「畦道(あぜみち)」を足助地区新盛町に開所。登録者は豊田市に住む20代から60代までの26名で、常時8人ほどが利用している。

活動は月～金曜日の9:30～15:30で、利用者の8割を3人のスタッフが車で送迎している。利用者の給料となる事業は、薪割り、木工商品づくり、ガラ紡の糸づくり、祝日(不定期)の五平餅の販売、農作業、野菜作りなど山村ならではのものである。

このような施設は山間部では少なく、山間部の精神障がい者は都市部まで通わなければ障がい福祉サービスを受けることができないのが現状である。障がい者も健常者も、誰でも住み慣れた地域で自分に合った仕事ができることを目指している。

キャッチフレーズ

誰もが住み慣れた地域で輝けるように

会のモットー(何を大切にしているか)

病気や障がいがあっても、個人が尊重される活躍の場があり、一人でも苦しむことなく安心して暮らし続けられる地域づくりを目指す。

設立から現在に至るまで変化したこと

副代表の鈴木悠太さんは足助出身で、山間部に住む精神障がい者の方が都市部の事業所に通っている現状を知り、住み慣れた地域で活躍の場があることが必要だと思い、大学の同期だった代表の今枝美恵子さんと山間部に事業所を作ること計画した。しかし山間部での開設は利用対象人数が少なく経営的にも成り立たない、自殺行為だと仲間から忠告を受けた。それほど山間部での精神障がい者福祉施設の開設は稀なことであり、困難な事業とされている。

代表的な精神障がいの統合失調症の発症率は100人に1人、うつ病は4人に1人と言われ、誰もが発症する可能性がある身近な病気だけれど、適切な治療をすれば症状をコントロールしながら、その人らしく働き暮らすことが可能な病気でもある。郡部5地区で精神障害者保健福祉手帳の数は120人余り、開設3年前から事業所の必要性があるのかニーズ調査をおこない、1年前には交流館で障がい当事者・家族からヒアリングなどをして、需要の存在と必要とされていることを確信した。

当初から耕作放棄地などを活用した農林業を主とした事業展開を構想したが、まずは持続性を重視して、障がい者福祉の仕事内容として農林業などをする事とした。おいでん・さんそんセンター(山村再生担い手づくり事例集Ⅲ「おいでん・さんそんセンター」参照)の仲介で五平餅店の旧店舗を借りることができた。懸念の地元受け入れは、自治会でキーパーソンに集ってもらい説明会を開いた。会長には「あんたらのやろうとしていることは良いことだからやればいい。それよりあんたらの生活は大丈夫か?」と、背中を押されただけでなく心配もしていただいた。反対はなく快く受け入れてもらえた。今では新盛小学校の行事に出席するなど交流もおこなっている。

連携している団体・専門家・自治体など

おいでん・さんそんセンター、豊田市障がい福祉課、あさひ薪研(山村再生担い手づくり事例集Ⅲ「あさひ薪づくり研究会」参照)、きらり(豊田市の福祉アンテナショップ)

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

そもそもこの地域で障がい者福祉サービス事業所というよりも、一つの人材派遣会社になれるとよいと思っている。

山間地域の仕事は季節ごとの需要が異なり、それに応じた人手の供給が求められる。仕事により人により向き不向きがある。農作業など季節ごとに合う仕事を選べるのがいいと考えている。

旭木の駅プロジェクト(山村再生担い手づくり事例集「旭木の駅プロジェクト」参照)の地元間伐材を使った、あさひ薪研へ納入する薪づくりは、機械で割るタイプの人と、斧で割るのに夢中になる人がいて面白い。地元で綿を栽培し、綿花を収穫して(綿摘み)、繰り機で実と綿を分離してから布団屋さんでシート状の綿に打ってもらう。次にそれを糸車で糸に紡ぐ仕事もある。根気のある仕事だが楽しそうに続けている。間伐材をあさひ製材で加工して、ここで刻んで小さな額を組み立てて製品出荷している。農山村にはそれぞれに合った仕事があつていい。他にも地域産物を最大限に活かした仕事作りを目指している。



木工機械を使って額づくり



「畦道」の隣での薪作りのようす

現在直面している課題

5年以内に、障がい者福祉サービスの一つである就労継続支援B型事業所に移行しなければならない。山間部は広いので通所に不便なため拠点の課題もある。例えば稲武ではブルーベリー、下山だったら五平餅やキクの栽培、原木しいたけなど地域の特性に合った仕事とつながりたい。

就労希望の方でも、一般企業でバリバリ働くより、自分に合ったのんびりマイペースでやれる仕事を望んでいる方が多い。バリバリ働くことを希望される方は、畦道ではなく企業での研修や面接練習を中心におこなっている事業所を紹介している。

山間部の小規模事業所でどのような就労支援ができるか、大きい金額にならなくても地元とつながってその方に合った働き方を支援したい。そのためにはこの地域での働き場所の開拓とメニューの充実が欠かせない。それを支えるのは地域での信頼関係とネットワークで、たくさんの多様な人々の応援がどうしても必要だ。

今後やってみたいこと

障がい者の人材派遣業は、安心して転職できる(派遣先を変える)ことが重要。現在の障がい者就労支援は企業へ就職し、合わなくて退職すると、「ああダメだった」と「失敗」につながってしまう。その「失敗」だと感じる事が障がい当事者も家族も、自信を無くすことにつながる。人材派遣会社であれば、「この仕事が合わなかったらこっちの仕事がありますよ」と他の仕事を紹介できる。「失敗」がないと思う。それぞれに適った仕事が見つかるまで安心して転職(派遣先の変更)を繰り返せることが魅力だと感じる。就労支援は派遣先やその仕事に障がい者たちを当てはめるのではなく、当事者に合った仕事を見つけること、つくることだと思う。それが、休みたい時には休める「安心してさぼれる会社」、誰もが「安心してさぼれる社会」づくりにつながると思う。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

山間部で人手を必要としている方々との出会いが拡がるといいなと思う。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 未来の「畦道」は？

<答え>

病気や障がいのある人とない人が一緒に働く農山村での人材派遣会社。地域で求められる働き手と、農山村で働きたい障がい者や高齢者や健常者とをマッチングする仕事を軌道に乗せ、耕作放棄地での農業や農山村の手仕事などを活用して新しい仕事を創り出したい。そこではスタッフも健常者も障がい者も混然としているのが理想。

取材者感想

インタビューの中で不思議な感覚に襲われた。精神障がい者福祉の話がそのまま、農山村を目指すアイターン者、いや都市と農村の根源的な課題と重なっていった。

かつて柳田園男が「都市が病んだ時は農山村に救いを求めよ」と予言したというが、まさにこのことだと思った。彼らは「福祉が障がい者を障がい者にしてしまう」危険も本能的に知っている。だからあくまで「田舎の人材派遣会社」にこだわるのだと思った。スタッフも健常者も障がい者も混然となって区別もつかない田舎の人材派遣会社で素敵だ。こうして農山村が都市を救うのだと思った。

写真



今枝美恵子理事長



みんなで農作業

岩本川創遊会

調査団体名	岩本川創遊会	団体代表者名	会長 小野内康伊
設立年	2017年	対応してくれた人の名前	小野内康伊
団体URL	無し		
活動拠点	豊田市岩本川周辺(扶桑、百々)	調査員	近藤朗、瀬川貴之
取材日	2018年12月14日	レポート作成者	瀬川貴之

活動内容

豊田市管轄の岩本川の下流域、矢作川と合流する地点までの間で、河川を挟んだ扶桑、百々地域の人々により河川の維持管理(草刈り)、及び豊田市と共に川づくりを行っている。市民の手づくりによる「小さな自然再生」という手法を取り入れながら、地域固有の「ふるさとの川づくり」を目指す。

キャッチフレーズ

川は僕らの楽しい遊び場

会のモットー(何を大切にしているか)

楽しい場として、考えて遊べる場として関わってもらおうよう心掛けている。
「～しなければいけない」と義務になると楽しくなく続かない。
「いい加減に、良い加減に」やっていけるようにしている。
創遊会は「そうゆうんかい」。それぐらいの脱力感でやっていけるとよい。



岩本川創遊会の小野内さん

設立から現在に至るまで変化したこと

始まりは豊田市矢作川研究所主導による、河川浚渫後の地域住民向けのワークショップ(2015年)。そこで市民が描いた岩本川の「未来希望図」を基に、2016年から実際に市民が川づくりを行う「川づくり体験会」などを経て、始まりから3年目の2017年3月に岩本川両岸の扶桑地区・百々地区合わせた地域住民で岩本川創遊会設立。
その後、ワークショップを受けて豊田市による川に下りる階段の設置、地元小学校の課外授業の対応などから、普段から岩本川で遊ぶ子供が見られるようになった。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田市矢作川研究所、一般社団法人ClearWaterProject

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

地域の人の活動への巻き込み(岩本川探検隊、川づくり体験会など)
豊田市との意見・要望調整
岩本川の草刈、小さな自然再生手法を使った川づくり(手づくり魚道プール、手づくりバープで淵づくりなど)
平井小学校課外授業でのフィールド利用の支援

現在直面している課題

最初の立ち上がり期間の3年を経て、最初は勢いで進んだが、この後の3年をどのような方向性で進めるのか。

今後やってみたいこと

- ・百々地区にある新興団地「百々の杜」に住む人に岩本川創遊会に入ってもらふこと
- ・矢作川の水辺愛護会の次期メンバーを育て輩出する
- ・川、生き物の専門家の意見を受けて河川改善を行い、もっと生き物を増やせるような取り組みを進める

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

公の場をいじる活動のため、河川整備/生活面(ハード)役割としての市の窓口とは別に、それ以外のものづくり/レクリエーション/精神的(ソフト面)の相談窓口が行政に必要。(現在は矢作川研究所がその役目を担っている)。今後その体制が続くよう何かしらの担保(書面、組織・係等)が必要だと考えている。

すでに現状は満たされているが、市に「自由な発想で一緒に考えていこう」と言ってもらえているから、川づくりも自由に出来ている。そういう行政からの持続的な担保が必要。

チームオリジナルの質問

<質問内容>なぜ会長を引き受けたのか?

<答え>(小野内さんは)当時、自治区の役員(環境美化)をやっていて、また目の前の岩本川を何とかしたいとは思っていた。一方で豊田市矢作川研究所から、古巣水辺公園愛護会の村山さん(区長)に、ふるさとの川づくり企画の主体となる地域の人で誰か良い人がいないかと打診していて、小野内さんが紹介されていた。扶桑と百々地区の境目でもあり、色々しがらみになる部分とは別に、自由に出来る場であればということで引き受けた。

小野内さん曰く、このプロジェクトが始まったタイミングは奇跡的だった。たまたま呼びかけた矢作川研究所の所長が扶桑町自治区の早川匡さんであったことの意義は大きい。そこから少しだけ世代交代が進むことになったと思う。

その他、伝えたいこと

・世代交代に関し。

長いことやっていると、そこでやってきた人が、凝り固まってくる。

外の人が入って、考え/思考を広げてあげるのは非常に役立つ。地域の人で同じメンバーでやっていると色々なしがらみ、考えの固定化により「やらなければいけない」義務感ばかりになる。そうすると皆疲れ、新しい人も入ってこず、縮小していく。

外部の人に入ってもらって、言葉を代弁してもらふ、普段話さないことを話す場を作ってもらふ、川や生き物等本当に好きなことを持っている人に教えてもらふ、といった場を用意すれば、引っ張られて呼ばれたからその場に来ている、といった人も新しい考えを持ち、楽しさを感じて新しいこともやっていってもらえる。(行政がこれをやってほしい、という話になると「なんだそれ」「めんどくさいな」となる。)

世代交代時に、先輩たちのわくわくは引き継げない。次の世代の交代には、次のわくわくを見つけろ、とその場だけ渡し、潔く引く。自然にたずさわりたいとは思っている人は他にもいるが、手あかにまみれた義務は若い世代は欲しくないのでは。



浚渫前(左)と取材時(右)の岩本川。浚渫前は土砂が堆積し川底も上がり、植物も繁茂していた。

取材後、岩本川を訪れて ～ (取材者)近藤の感動！

小野内さんは、小さい頃よりこの地で育ち、最も身近な川が岩本川であったという。47災(1972年 昭和47年7月豪雨。現在の豊田市域で激甚な被害)での被災・復旧後は、ほぼほつたらかしの状態だったとのことで、この河川が豊田市内でも扶桑地区と百々地区の境界を流れる小河川ということもあり、地域としてもそれほど目を向けられなかったらしい。

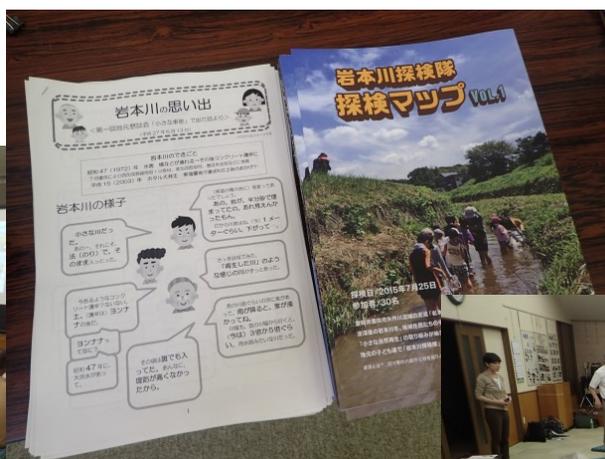
平成に入ってから「多自然型川づくり」の概念が導入され、愛知県が扶桑地区で自然石による水制工群を整備し(1991年)「古巣水辺公園」として親しまれ、愛護会も発足、その下流の貯木場公園がある百々地区でも水辺愛護会が立ち上がった。その間にあるのが岩本川であり、古巣水制工から約四半世紀を経た後、市民自らによる「小さな自然再生」、そしてふるさとの川づくりが施されたことは、とても感慨深い。その主体となっている創遊会代表の小野内さんは、先輩格である二つの愛護会より当然ながら少し若い現役世代となる。

小野内さんが岩本川の良さとしてあげていたのが、その小ささ。自分たちで何とかなる(遊び場にできる)のではないかというスケール感と身近な存在であるということ。さらにほつたらかしにされていたから、誰の手垢もついでいないことを挙げられた。取材後その現場に赴くと、まさにわくわくするような小川の水辺空間が目に入ってきた。素敵！

まだまだ未完成だと思われるし、護岸も(恐らく)以前からのコンクリートブロックの立護岸が立ちはだかっているのだが、川の中と水際、水辺空間が何とも自然で美しい。どうやって人の手を施したのだろう？という感じ。よく見ると石が配置されていて水制っぽく、あるいは堰みたいになっていたり、それがあまり目立たないのは、人力で川づくりができる範囲のスケールだからか、また作ってから壊れたり流されているかもしれないね。水辺の洲のつきかたも自然な感じで、まだ変化していくのかもしれない。水辺までは数メートルの護岸が阻んでいるが、時々階段が設置されており、子どもたちが知らないうちに川に堰をつくってしまうと聞いていたので、ここを好きなときに降りていくのでしょうか。ワクワク。

小野内さんが、ここを遊び場に、と言われていたことがよくわかる。水辺は変化していくし、草も生えるでしょう。ここでは維持管理が重要な水辺空間整備になるのですが、メンテナンスと思わず、探検しながらの自分たちの遊び場づくりと思えば、わくわくするはず。四半世紀の間、様々な工法を用いて「多自然川づくり」を試行錯誤してきたのであるが、これには負けたな。同時に川づくりにおいては水辺整備が最も重要であることを再認識させてくれた現場でもある。

写真



最初は住民懇談会にて、岩本川での過去の想いをお聞きしたり、浚渫後の岩本川をどうしていきたいか、「未来希望図」(次ページ参照)を作っていました。岩本川創遊会発足の元にもなっています。

岩本川探検隊2017夏

探せ！ 岩本川ドジョウ3兄弟

岩本川にはめずらしいドジョウが3種類もすんでいるんだ。よく見ると見た目がずいぶん違うぞ！見つけられるかな？その他にも、岩本川にすんでいる生き物3兄弟を探してみよう！



【ドジョウ】 一長つけたら

- ✓ ドロのたまっている場所がすき
- ✓ あまり流れのない場所がすき
- ✓ ヒゲは10本で長い。丸顔
- ✓ 体長15センチくらい

【ニシシマドジョウ】



- ✓ 砂や小石の多い場所がすき
- ✓ サラサラの流れる場所がすき
- ✓ ヒゲは6本。たて長顔
- ✓ 体のもようがきれい
- ✓ 体長12センチくらい



【ホトケドジョウ】

- ✓ 落葉のたまる少し深い場所がすき
- ✓ あまり流れのない場所がすき
- ✓ ヒゲは8本
- ✓ 上下に落しつぶされたような顔
- ✓ 体長6センチくらい



岩本川には2016年の岩本川探検隊で珍しいホトケドジョウが生息していることがわかったため、岩本川探検隊2017では「ドジョウ3兄弟を探せ」というテーマで、地元の親子に岩本川の魅力を感じてもらえるイベントを実施



岩本川創遊会メンバーにて川づくり中。「小さな自然再生」の概念・手法を取り入れ、日曜大工的に川をいじってしまいます。川の草刈も創遊会を中心にやっています。



左の方に見える階段も、住民懇談会要望でついたものです。



イベント時だと泳ぐ子たちまで出てきちゃいました。

豊田土地改良区資料室

調査団体名	豊田土地改良区資料室	団体代表者名	古川 彰
設立年	2015年(2008年)	対応してくれた人の名前	達 志保 室長、近藤文男(応援団)
団体URL	https://blog.goo.ne.jp/shidareyousui	調査員	清水雅子、安井雅彦
活動拠点	豊田土地改良区	レポート作成者	清水雅子
取材日	2018年12月18日		

活動内容

2008年、豊田土地改良区に“枝下用水130年史編集委員会”を設置し、7年をかけた編集作業により、2015年3月に『枝下用水史』(風媒社)を上梓した。しかし補助用水のことを書かなくては枝下用水の本当の水の苦勞を書いたことにはならないという理事長の思いを受け、続編執筆にむけて新たに豊田土地改良区資料室を立ち上げた。

『枝下用水史』を編集するにあたり、文字資料だけでなく、用水に関わってきた人々の声をふんだんに取り入れた。その方向性を失うことなく、地域内外の人々に枝下用水への興味を抱いてもらえるよう、ニュースレター『枝下用水日記』の発行やイベントをおこない、枝下用水への声を集めている。

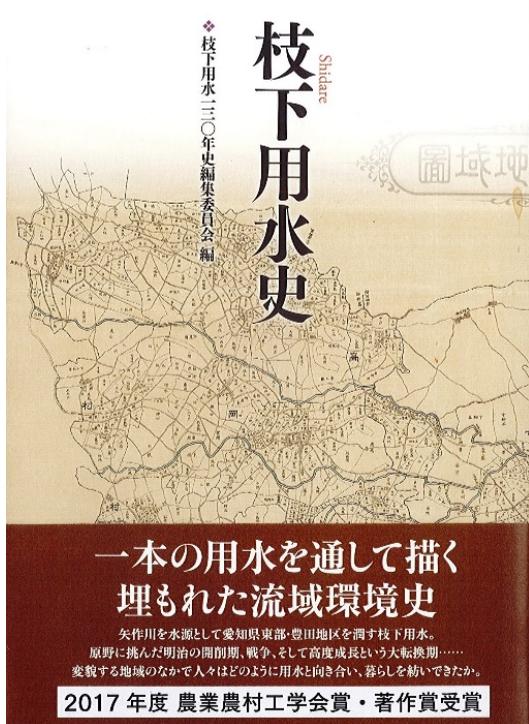
※枝下用水については、3ページ目の「(背景)枝下用水とは」を参照のこと

キャッチフレーズ

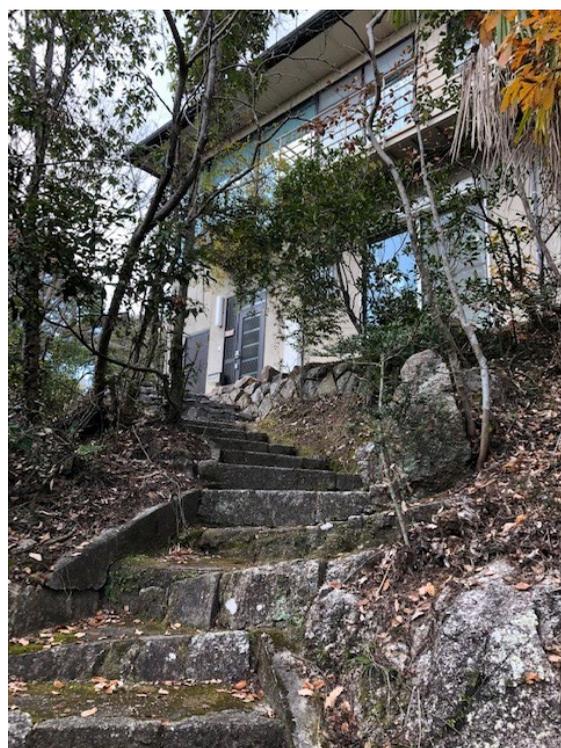
枝下用水を通して描く矢作川流域環境史をめざして

会のモットー(何を大切にしているか)

通常の用水史は、建設事業、中心者、行政の歴史に偏りがちであるが、『枝下用水史』は地域の人々が維持管理や水管理に関わってきた苦勞、用水を生活や遊びの場として利活用してきた風景などについても言及し、水源とする矢作川の流域環境史を編むことを目指している。そのため、できるだけ多くの人たちと関わり、私たちの枝下用水史にすることをモットーとしている。



『枝下用水史』



風情ある階段を上ると
豊田土地改良区資料室が現れる

設立から現在に至るまで変化したこと

“枝下用水130年史編集委員会”が2008年にスタートした時から数えると10年間、『枝下用水史』を上梓した以降も、地域へ飛び込んで取材をおこなっている。豊田土地改良区資料室への理解が広がり、地域内外から情報・資料提供が増えている。

連携している団体・専門家・自治体など

豊田土地改良区、愛知県豊田加茂農林水産事務所、豊田市役所産業部農林振興室農地整備課、猿投台区長会、枝下町自治会、勘八峡山水会など

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、地域資源の活用など)

- ①資料室の前身となる“枝下用水130年史編集委員会”で枝下用水史編集に携わったメンバーは、農業や用水の専門家ではなかったが、編集作業を進めるうちに枝下用水の歴史、遺構、そして地域の方々の人柄に魅力を感じ、この仕事に生きがいを感じるようになった。その魅力を多くの人に伝えていきたいと思い、できるだけ枝下用水を歩く機会を作っている。
- ②『枝下用水日記』を季刊発行し、枝下用水のこと、地域の歴史のこと、資料室の活動のことなどを発信している。
- ③土地改良区職員や関連行政職員は日々の生活や業務に追われて、これまでなかなか旧水路を見る機会がないことに気づいた。「職員が現場に行く機会をつくろう」「より多くの方々に旧水路を知って欲しい」との思いから、旧水路までの整備と清掃を実施し、枝下用水の見どころ整備を少しずつ進めている。

現在直面している課題

豊田土地改良区のように資料室を設けて活動をおこなっているところは、全国的にも他にあまり例がない。また、『枝下用水日記』の発行が1,500部あることからわかるように、枝下用水に関わる人々だけでなく、枝下用水に興味を持ち応援して下さる方も地域内外に多くいる。ぜひ豊田土地改良区資料室を存続させたい。

今後やってみたいこと

現在、世界かんがい施設遺産登録申請の準備を進めている。そのためにも旧水路について調査をおこないたいが、越戸ダムに水没している部分は見えないため、現状では全容を解明できない。どうにかして水没部分の調査をおこない、その姿を明らかにしていきたい。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

矢作川漁協のご厚意で幾度か実現しているものの、舟がないために調査をしたい水没部分に近づくことができないので、協力して下さるところがほしい。



清掃活動の様子



地域住民への聞き取りの様子

その他、伝えたいこと

かつて矢作川には『月刊矢作川』という雑誌があった。創刊号に「私たちは①流域の生活と文化の歴史を発掘し紹介する、②流域の自然を守る、③矢作川水系の諸河川にかつての清流を取り戻す、④川を汚さず自然を破壊しない生活のあり方を考えるの四点を目標に、このたび、「月刊矢作川」を創刊しました。」とある。

1977年4月から毎夜集まり月刊で発行し続けたこの雑誌は、1985年7月に100号を数えて休刊した。発行責任者は当時枝下用水土地改良区事務局長・三浦孝司さんで、そのため資料室には幾分か『月刊矢作川』に関わる資料が残る。資料室ではこれまで貴重なデータベースとしてこの雑誌を活用してきたが、この雑誌をつくり続けた方々が元気づきにこの月刊誌にかけた思いの聞き取りをおこない、『月刊矢作川』101号を発行したいと考えている。いまこれからの矢作川の背景にこうした人々の不断の努力があったことを資料室として発信していきたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容>

達室長は豊田市の住民でないが、どうして枝下用水史の編集をしているのか。

<答え>

きっかけは縁あって矢作川研究所員になったとき、研究所を支える矢作川漁協の百年史『環境漁協宣言』はあるのに、豊田土地改良区の本がないということで、矢作川研究所研究顧問・古川彰さんと“枝下用水130年史編集委員会”を立ち上げ、事務局長を務めることになった。この仕事で初めて土地改良や用水に関わるようになった。

編集作業を進めていくなかで、枝下用水の魅力、用水の歴史を掘り起こしていくことの面白さに“はまって”しまい、いつのまにかライフワークともいえる仕事となったように思う。地元をはじめ、多くの方々に枝下用水の素晴らしさを知ってもらいたい。

取材者のコメント

取材者(清水)も仕事で土地改良区の方に触れ合う機会があったが、どの土地改良区の方も用水・排水を整備してきた先人の偉業をたたえその苦労を偲び、大切に語り継いでいる様子に感動してきた。

今回の取材で驚いたのは、『枝下用水史』では、編纂をそれまで土地改良区に関わってこなかった人に任せていることだ。そして、残された膨大な文献をひもときつつ、土地改良区の関係者(農業従事者)へのていねいな聞き取り調査を行い、単なる(枝下用水)土地改良事業の歴史だけではなく、“矢作川流域を形成する枝下用水”に関わってきた人々の暮らしをも描いている、農業用水を軸とした、まさしく“流域環境史”といえるものが出来上がったことだ。

取材後、『枝下用水史』を読ませて頂いたが、枝下用水が関係者の並々ならぬ熱意と努力で作られ守られてきた様子を、“モノ”から“コト”、そして“ヒト”へと光を当てていき、まるで物語を読んでいるかのような親しみやすさだった。私のような三河に土地勘のない一般人でも、読みやすくわかりやすいものであった。

このような史誌ができたことは、土地改良区の職員、編集者のご苦労はもちろんのことだが、この土地の人たちの気質がそうさせたに違いないと思うし、その気質をつくる風土:矢作川は、やはり、すごい。



枝下用水の水路にかかる太鼓橋
水路は岩盤を掘削して作られている
橋を渡ると同資料室へ行くことができる



本取材の様子
左から 達室長、近藤氏、安井氏
とても楽しそうに語り合っています

(背景) 枝下用水とは

【企業的用水経営】

枝下用水は矢作川を水源とし、主に菴川の下流地域から名鉄豊田線の西部を下り、豊田市役所から南部の田畑を潤しており、現在は豊田土地改良区が管理運営している。

用水建設は地域の長年の希望であり、明治16年(1883年)にようやく用水開削が始まった。しかしながら、当該地域は矢作川の河床より土地が高く、また水源とする矢作川の地質が岩盤であることから、難工事で予算が膨らみ公共事業として続かず、結局、西澤眞藏(近江商人)らが開削を進め企業的用水経営を行った。企業による用水経営は全国的にも大変に珍しい。

【厳しい自然条件】

その後、干ばつによる明治用水との水争いが裁判に発展、枝下用水側が敗訴したことを契機に、枝下用水の受益地域の人々が明治35年(1902年)に普通水利組合を結成、枝下用水の起業権を買収した。

当初は取水口が今より上流側(西枝下村)にあったが、昭和4年(1929年)越戸ダム建設に伴いダム堰堤での取水に変わったため、旧取水口とそこから矢作川沿いに続く約3kmの導水路がダム湖に水没した。

用水路建設には、人造石工法による樋門、水路護岸、木造掛樋など当時の最新技術が用いられたが、地震や台風、大雨による水路の決壊などに幾度となく見まわされており、厳しい自然条件がより一層、用水経営を困難にしていたようだ。

【地域の用水への想い】

なお、現在、用水区域内では西澤眞藏に関する顕彰碑や祭礼が各地にあり、建設の祖として西澤眞藏をたたえ感謝する様子から、地域の人々の枝下用水への想いが伝わってくる。



豊田市初代森林課長 故原田裕保さんを思んで

【経歴】

1956年愛知県生まれ。筑波大学第一学群社会学類卒業。1979年豊田市役所入庁。総務部、理財部、秘書室等を経て、1998年より環境部環境政策課で豊田市水道水源保全事業の立案、環境政策を担当し、その後産業部農林課に異動し林務行政等を担当。2005年4月（広域合併；上流6町村との合併）から産業部森林課長、2015年4月から産業部長を務めた。定年退職後は、藤岡南交流館館長として、子育てコーナー新設等に関わった。

【実績】

1994年4月から水道使用量1m³あたり1円を水道の水源となる上流の森林保全に充てるため、全国初の事例となる「豊田市水道水源保全基金」を設立した。そのほか、豊田市の森林行政の骨格となる「豊田市森づくり条例」「豊田市100年の森づくり構想」、施策である「地域森づくり会議」「とよた森林学校」など、我が国をリードする政策を次々と打ち出した。2013年以降、中核製材工場の誘致に尽力した（2018本格稼働）。

【親交のあった方々からのお別れの言葉】



平成の合併よりはるかに前から、稲武とか足助などの上流の森林が豊田市にとって大切であることを意識されていて、水道水源保全基金をつくられ、その後の東海豪雨で皆がその必要性に気付くことになりました。東海豪雨後には森林ボランティアを始められて、矢森協の発足にも関わられました。また、近年の製材工場の誘致に対しては先頭に立って活動をされていました。間もなく稼働する日を見届けられず、心残りだったと思います。本当に大切な方を失いました。

蔵治 光一郎氏（山部会座長）



原田さんとの最初の出会いは、流域の山主1000人調査で市役所を訪ねた時、最初は衝突しましたね。それが、豊田オイスカ森林塾と矢森協、森の健康診断の立ち上げではかけがえのない同志となりました。森林課職員が彼の元で一丸となって健康診断や間伐ボランティアと共働したのは感動的でした。あなたと息子さんと発明した「尺蔵」は今も全国の森で活躍していますよ。

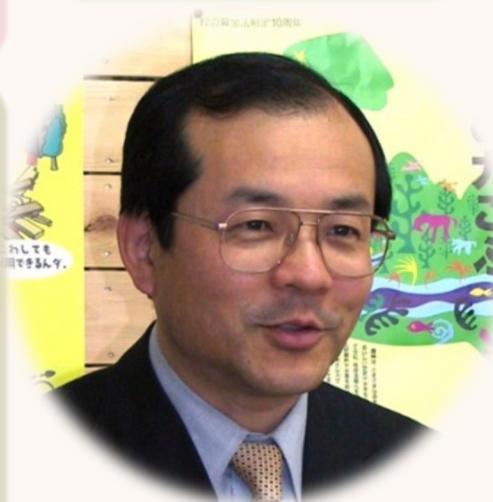
丹羽 健司氏（山部会副座長）



3月の講演会ではお元気な姿を見ていただけに、とても信じられない、寂しい気持ちでいっぱいです。今日の豊田の森林行政は、原田さんの知性と情熱なくしては絶対に生まれませんでした。凄と思うのは、行政マンとしてだけではなく、自らも森づくりの技術を学び、森林ボランティアをはじめとする市民とも強い人間関係を築き、豊田の森づくり・木づかい推進に貢献されたことです。屈託のない人柄で、美人だの大酒飲みだのとよくからかわれたことも懐かしく思い出されます。心よりご冥福をお祈り申し上げます
洲崎 燈子氏（矢作1研究所 主任研究員）



豊田市の広域合併とともに森林課が誕生して、森づくり委員会ができ、森の健康診断が始まり、本当に理想的な行政マンだと全面的に支持してきました。とりわけ初期の森づくり委員会の自治的な運営、森林政策へのボトムアップは、もっともすぐれた歴史的なものだったと思います。その偉業が豊田市の歴史、自治の歴史にきざまれることを念願します。これからの森林をめぐるあり方について、もっともっとと議論したかっただけに、残念でなりません
山本 薫久氏（都市と農山村交流スローライフセンター 代表）



原田さんとは、愛知県職員であった2002年からの付き合いでした。2005年4月の豊田市森林課設立から10年以上、二人三脚で活動してこられたのは、本当に良い思い出です。原田さんは政策面で引っ張り、私は技術面でサポートしました。性格も好みも全く異なるが故に、とても良い関係が保て、一度も口論することなく、森林施策を進めることができました。本当に、本当に、ありがとうございました。

北岡 明彦氏（豊田市森林課 副主幹）



これまでの森林行政の成功は、森林管理のプロである北岡さんとのマッチングによるものだと思います。原田さんは、地方創生の中で、地域を一番に考えてくださり、私もその考えに賛同しました。彼の情熱は、部下である鈴木さんに受け継がれていると思います。自然の恩恵を理解し、今を生きる私たちが何をなすべきか、素晴らしい道しるべを示してくれて、ありがとう。

林 富造氏（豊田森林組合 元専務）



原田さんの名前は、全国の森林関係者に広く知られていました。入庁後は時には厳しく、時には優しく接していただきました。市の方針の「森づくり構想」を見直したいと発案した時は、どこか腑に落ちない様子でしたが、3年がかりのプロジェクトが始まってからは、ずっと背中を押してくれました。なんとかまとまった「新・森づくり構想」の冊子を、まさに届けようとした矢先の訃報に、呆然としてしまいました。残念でなりませんが、豊田市の森の行く末を、天国から見守ってくれていると思っています。

鈴木 春彦氏（豊田市森林課 担当長）



原田さんは、林業施策の根幹をなす豊田市独自の森づくり構想の策定、森づくり委員会の設置、木造公共施設建築における建築材料の分離発注方式の研究、中核製材工場の誘致と精力的に実践されてこられました。まさに稀代の真の林業政策マンであったと言っても過言ではありません。私は矢作川流域圏懇談会を通して、原田さんに勉強させていただきまし。あまりに若く、そして早く逝かれてしまいました。原田さんの願っていた森づくりや木づかいの推進に向けたその熱い魂をしっかりと受け止めたいと思います。そして、原田さんだったらこうするだろうなあーと原田さんの魂を感じながら、矢作川流域のよりよい森林づくり、あらゆる場面での多様な木づかい、そして流域に住む多くの市民がそんな森や木の恩恵によって幸せになれるような流域社会の構築に向けて、精力的に熱く活動し続けたいと思います。

今村 豊氏（根羽村森林組合 参事）



平成25年1月12日第会山部会WG（足助）にて



平成26年10月26日第10回森の健診報告会懇親会にて



平成27年10月18日とよた森林学校10周年記念にて



平成27年11月17日森づくり構想リニューアルシンポにて



平成29年旭木の駅定例会にて



平成29年5月3日矢森協安全講習会夜の会にて

写真提供: 矢作新報社 新見 克也 様
 旭高原山楽会 鈴木 敏治 様
 浜口美穂 様
 豊田市産業部農林振興室森林課 鈴木 春彦 様

自然の恩恵を理解し、今を生きる私たちが何をすべきか、
 素晴らしい道しるべを示してくれて、ありがとう。

元豊田森林組合 林富造



一般社団法人 奏林舎

調査団体名 : 一般社団法人 奏林舎
 設立年 : 2018年3月1日
 団体URL : <http://sourinsha.org/>
 活動拠点 : 愛知県岡崎市千万町町字寺沢52
 取材日 : 2018年12月11日
 団体代表者名 : 唐沢 晋平
 対応してくれた人の名前 : 唐沢 晋平
 調査員 : 手塚透吾、筒井信之、太田修
 レポート作成者 : 太田修

① 活動内容 奏林舎のサイトを参考にしました

- (1) 森林整備 (2) 森林管理 (3) 森林経営の支援 (4) 森林調査 (5) 素材生産、徳用林産物生産
 (6) 木製品、薪等の製造販売 (7) 森林環境教育、人材育成

認定等 : ・2018年4月 次世代林業事業体認定 ・2018年6月 合法木材供給事業者認定

※主に間伐: 良い材は製材所に収める。仕事は山林保有者から頼まれたり、こちらからそろそろどうですかとお願いする

② キャッチフレーズ

「森」を次の世代に献上する

(額田をにぎやかにし、豊かな森づくりを成し遂げたい、流域全体や次の世代に少しでもいい森をつなげたい)

③ 会のモットー(何を大切にしているか) 名前に込めた思い 奏林舎のサイトからコピペ

豊かな森づくりを通じて活気に満ちた地域にしていきたいという思いを、以下のように様々な意味を持つ「奏」の一字に込めています。

演奏する : 自然と調和した森づくりを通じて、山と地域に賑わいを取り戻す

前進させる : 森と地域の直面している課題に取り組み、具体的な解決を目指す

差し上げる : 山主と流域に暮らす地域住民、そして次の世代に豊かな森を届ける

④ 設立から現在に至るまで変化したこと

移住してから2018年2月末までの3年間は、市の嘱託職員と個人事業 : 「フォレスト・アート(初めの屋号)」

2018年3月1日「一般社団法人 奏林舎」設立

・雇用者2名(1ターンの30歳代と地元の50歳代)

・他に、農業や庭師の仕事を掛け持ちで、空いた時に手伝ってくれる人が2人

・一緒に働く人が増えたので、出来る仕事量が増えた

⑤ 連携している団体・専門家・自治体など

岡崎森林組合、しらい製材、小原木材(地域材: 国産材の利用)、額田木の駅プロジェクト、額田林業クラブ、経済振興部林務課、岡崎市環境部森林企画係(2018年2月末までは環境部の嘱託職員だった。環境教育など)

⑥ 流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、地域資源の活用など)

岡崎のグループが実行員会をつくって「おかざき森の健康診断」中学から大学まで、学生と先生も参加してくれた

・専門は環境教育 岡崎市がやっている「ホテル学校」で教える

・地元の子供に頼まれて小学校の生徒に環境教育をしているー(街の市民と森の関係がものすごく開いている)

森林環境に関する出前講座やセミナーのほか、ネイチャーガイドや間伐体験、木工体験など、森と木にふれあい、楽しく学ぶ体験の機会を提供します。

経験豊富な自然体験活動指導者が企画・運営を行うため、安全で質の高いプログラムを実施します。

・イベントでのネイチャーガイド・薪わり体験

・間伐と間伐した木材を地元からも集めて保存し用途別に分けて販売「木の駅」: 薪のビジネス

・特殊伐採: 倒木の処理など(地元からの依頼)

・工務店の依頼で間伐体験を指導する

・森林の境界調査: 山の境界がわからない・GPSなどで境界や面積を調査、地域に詳しい人のアドバイスを受ける。

※山の面積・境界調査 来年度、県の予算を活用して三十町歩ほど調査予定。

・林野庁の「新しい森林管理システム」がうまく機能することを期待している

⑦ 現在直面している課題

- ・事業で一番ネックなのは、人手不足。若い人に来てほしい。働いた分しか儲からない事業。田舎で遣り甲斐づくり。
- ・支払う給与をUPしたい、年収300万は目指したい。森林業がビジネスに結びついていない
- ※ 休みは多めで、副業もOK。田舎らしい暮らしのできる職場であることを維持したい

⑧ 今後やってみたいこと

- ・薪の事業(今はBtoC)→需要の拡大をしたい＝化石燃料から木材に転換するなど
- 湯谷温泉(愛知県新城市)のように岡崎でもどこかの施設に薪ボイラーを設置してもらえたら大きな需要が期待できる。
- ・地域に密着した林業、市への森林環境譲与税の使い方の提案 ・ある程度の設備投資と生産性向上
- ・障がい者や引きこもりの人、生きづらさを抱えている人の受け皿になりたい。
- ・また、退職した人の生涯活動の一つとしてもいいかもしれない ※額田に軸足をおいて、額田の活性化をしたい。車で30分圏内で活動する(地域密着型事業)。儲けが大きな目的ではない。

⑨ そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・他業種の企業や団体とのつながり
- ・障がい者支援団体とのつながり
- ・林業に興味を持っている人
- ・「環境学習」の予算増→森林環境譲与税、平成31年度から譲与や、森林環境税(平成36年度)の使い道であるかも?

⑩-1. チームオリジナルの質問

<質問内容> 額田を選んだ動機は？

<答え>

自宅(生まれ)は幸田町だったが、母親が額田の教員で小さいころからよく額田にきて親しんでいた

→ 環境教育をするなら額田でやりたいと思うように。

木の駅アドバイザーの丹羽健司さんが額田の人と通じていたために、地域に入りやすかったのも一つ。

丹羽健司さんの勧め—— 額田は若手で山関係で動ける人がまだ少ないから額田で(豊田市と比べて)

⑩-2. チームオリジナルの質問

<質問内容> 林業を選んだ理由は？

<答え>

環境保全と地域活性化の一石二鳥の手段だから。

昔は田舎で林業が当たり前のように産業となっていた。その林業が深刻な問題を抱えていたため。

⑪ その他、伝えたいこと 次ページにつづく

○これまでの経歴

・個人事業(フォレストアート)(4年4ヶ月)兼(かねる)市の嘱託職員→春から奏林舎

○国民(市民)の意識や文化に影響を与えたい

- ・いくら森林管理のシステムを自治体で作ろうと、その土台となる地域の人々の意識が変わらなければ意味がない。
- ・お盆あけ9月～3月の木が水を吸い上げる前で「伐り旬(キリシュン)」、夏は農業、冬は林業、今は夏場も木を伐る。
- ・10・11・12・1月(9月～3月までが林業のシーズン) 夏場の材は虫が入りやすい。一月末までがハイシーズン(補助金、公共事業の関係など)
- ・今年の夏は暑くてヤッテおれなかった、異常に暑かった。

千万町(ぜまんちょうちょう)という集落はみんなクーラーなど無かったが、さすがに今年はクーラーつけた家がある

○仕事の取り方

- ・提案型 山主に山の管理方法の提案 → 委託される
- ・自治体からの委託 愛知県→森林組合→奏林舎「愛知県の森と緑づくり事業」
- ・特殊伐採 災害時(台風)の倒木の伐採＝危険を伴うから割といい値で可(林業というより造園業に近いが)
- ・国: 森林環境贈与税(仮称) 31年度から譲与で岡崎市に初年度3000万、将来1億が交付される予定と聞いている
当面は環境整備費に使われるといいかな??
- ・愛知県 「森と緑づくり事業」は岡崎森林組合から仕事を請け負って間伐をしている。

①-2 その他伝えたいこと 前ページからの続き

木材は山の状況と木の種類によって品質が異なる、素材によって仕分けて活用

薪というのは、曲がり等の品質の低い間伐材を加工しており、普通はチップ材で(素の材を)そのまま出すが、薪用の材は倉庫を借りていて保存して雨の日に生産する。薪は1パレット1万円。

薪は針葉樹9割、広葉樹1割。広葉樹が好まれるが間伐材の針葉樹の水分含有量を20%以下に乾燥させて出荷するのでストーブの煙突などに支障がなく、利用者から喜ばれている。

写真



奏林舎のロゴ

2018年7月 乙川殿橋下で薪わり体験



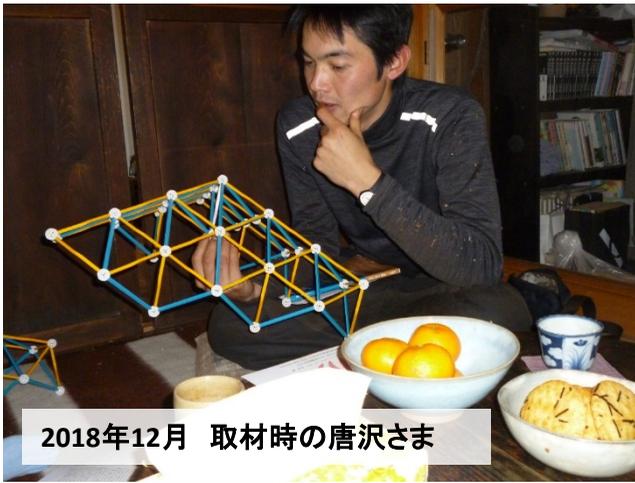
↑ : 2018年11月 あいち朝まで川談義: ↓



石窯パン屋さん・ダーシェンカ様へ薪の納入



2018年12月 取材時の唐沢さま



2018年12月 木下町の作業道開設&間伐





2016年01月13日 中日新聞 朝刊 18頁



樹齢35年のヒノキを切る児童たち＝岡崎市桜形町で

山林守れ 児童が間伐

岡崎市額田地域の森林保護と地域振興を図る「額田木の駅プロジェクト」に十二日、地元の形埜小学校の児童が初めて参加し、学校の裏山の森林調査と間伐を体験した。人の手入れが欠かせない山林保護の大切さを学ぼうと、体験学習に取り入れた。

(帯田祥尚)

木の駅プロジェクトはスギやヒノキの間伐材を地域通貨と交換し、林業と地域経済の活性化を促す取り組みで、県内外で行われている。

面積の六割を山間部が占める岡崎市でも昨年二月、地元の林業者らが実行委員会を立ち上げ、五月に受け付けを始めた。

五年生十一人が山に入り、木の駅のメンバーや森林ボランティアらとヒノキの生育状況を調査。枝の間から見える空の範囲や落ち葉の量から普段の日照量と土の栄養分を推測し、間伐が必要な区画

岡崎・形埜小「木の駅」活動に初参加

を割り出した。さらに、高さ十以上ある樹齢三十五年のヒノキなどの幹に交代でのこぎりを当てて切り倒した。

倉橋知大君(一〇)は「一人じゃとてもできない作業」と間伐の大変さを実感。「立派な木が育つには、このように人の手が入ることが欠かせないんだ」と話した。

木の駅の事務局長を務める唐沢晋平さん(三三)は「山は人が二、三代かけて育てるもの。子どもたちに活動の意義を伝え、この中から将来の林業の担い手が出てくれれば」と期待を込めた。

二十七日には切った木の出荷作業を体験し、一ト当たり六千円相当の地域通貨「森の健康券」と交換する。「森の健康券」は地域の飲食店やガソリンスタンドなど五十店舗で使える。

「木の駅」1年で成果

森林の間伐材を出荷して、地域で使える通貨に交換する事業「木の駅プロジェクト」が、岡崎市の額田地区で成果を上げている。開始から一年余で、他では例を見ないほど大量の間伐材が出荷されたが、財源や人手不足など事業を続ける上での課題も浮かぶ。

(森田真奈子)

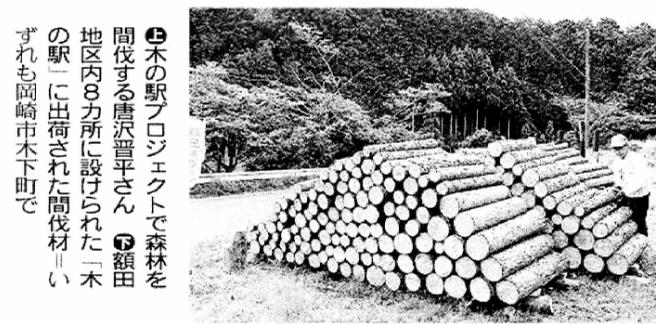
◆地域の底力 付の上限を千トに増やすや、林業に携わる地域の、額田木の駅プロジェクトが一九六四(昭和三十)と、六月までで既に七百底力ではないか」と驚く。唐沢平さん(三三)は「一ト以上の木材の輸入自由が下落してから、山主は額田地区。古くから林業が盛んで、技術向上には「補助金はいつまでも」

◆境界分かれず 六千円は出荷を続ける上で最低限必要な額」と考へる。若手の山主は長年山に取組む「額田林業クラブ」があるなど林業家の立地できる間伐材の売り方入らなかつたことから、プロジェクも考えないと」と声が上が。どこまでが自分の土地なのか境界が分からず、間伐できない事態も起きて

は、市場では高値で売れず山に捨てられていた木材を、出荷量に従ってプロジェクトの実行委員会が買い取る仕組み。額田地区では一トにつき、地元の商店などで使える地域通貨を六千円分受け取れる。原資の半分は間伐材をチップ材用として売った収入、残りは市の補助金で賄う。

同様のプロジェクトは全国約七十カ所を実施。初年度の出荷量は百トに満たない所が多いが、二〇一五年度に始めた額田地区は八百四十トを出荷。一六年度は補助金交

の丹羽健司さん(六三)は「森林への強い思い、山主にとって大きな負担のは七十代以上の人は



④木の駅プロジェクトで森林を間伐する唐沢平さん ⑤額田地区内8カ所に設けられた「木の駅」に出荷された間伐材。いずれも岡崎市木下町で

岡崎・額田地区 事業継続へ財源模索も



□県内で「木の駅プロジェクト」が行われている地域

◆課題解決で自立 一年にプロジェクトを始めた額田市山間部の旭地区では当初、補助金「ず」と期待している。

ち。唐沢さんは「境界線の伝承を急がなければ」と話す。

丹羽さんは「補助金額みだつた地域も、プロジェクトを続ける中で自立の道を探った例は多い。額田地区も課題に直面した時こそ変化が起きるはず」と期待している。

現場から

木の駅プロジェクト「軽トラとチェーンソーで晩酌を」を合言葉に、2009年に岐阜県恵那市で始まった。軽トラックに積める1層程度の短い間伐材を出荷できるため、林業の素人でも参加しやすい。出荷と引き換えにもらえる地域通貨は地域の商店や飲食店、ガソリンスタンドなどで使われる。

「木の駅」は農家が道の駅に野菜を出荷するように、木材も気軽に出荷してほしいとの願いが込められた。

間伐こもれび会

調査団体名 : 間伐こもれび会
 設立年 : 2016年3月
 団体URL : <https://kouboukomorebi.jimdafree.com/>
 活動拠点 : 安城市橋目町茶臼213(事務所) 岡崎市額田地域の山(作業地)
 取材日 : 2018年12月18日

団体代表者名 : 会長 伊藤 浩
 対応してくれた人の名前 : 会長 伊藤 浩
 調査員 : 沖 章枝
 レポート作成者 : 沖 章枝

活動内容

- ①山の環境を守る間伐・除材・植樹の実践活動
- ②伐採作業で出た間伐材の有効活用
 - ・木材やチップの材料として出荷
 - ・積み木に加工し近隣保育施設などに寄贈
- ③県有林「森づくり」に参画、環境教育を実践
- ④親子を対象に自然観察会や間伐体験を実施 青少年育成にも寄与

活動日

- ・定期会:1回/月 間伐活動:3~4回/月(不定期)
- ・積み木作成・寄贈・各種イベントに参加

発足までの経過

20年前伊藤浩さんは倒木や枯れ木が放置されたままの山林に心を痛め豊田市で間伐活動に参加。また、友好団体の「家庭環境を守る会」が木育を目的に積み木を制作して幼稚園・保育園などへ寄贈していることに賛同して積み木の制作を始める。

安城市在住の知人のついでで積み木材料の間伐材を求めて額田地域へやってきて、元額田町長の鈴木啓允氏と出会う。(鈴木氏は町長在任中から山林の状況を憂いて下流の住民に発信し、辞職後は持ち山の間伐を継続している方である)

会の発足

2016年、「額田木の駅プロジェクト」(事例集Ⅲ・P42参照)結成に賛同して間伐を主体とする会を設立。「間伐こもれび積み木セット」も継続制作している。1セット約400ピースを5セットずつ幼稚園や保育園等へ寄贈している。この積み木は多くの園児が同時に遊ぶことができる事や、地元自動車関連事業所で培った技術が生かされて子どもの背丈の高さまで積上げられる精度が高い製品であるため全国各地から要望がある。積み木は大工さんの工具箱をヒントに開発した持ち運び可能な収納箱に収められている。

会員は70代が多いが、30~60代も女性もいる。



寄贈された積み木

2018年9月8日「東海愛知新聞」掲載
 <東海愛知新聞社提供>

キャッチフレーズ

人と水と緑が輝く里
 額田の山を健全な山に育てよう
 子どもたちに夢を与えよう

会のモットー(何を大切にしているか)

元気で楽しく間伐作業。
 人と人の絆。

設立から現在に至るまで変化したこと

ほとんどの会員が地元企業を定年退職後にボランティアとして仲間に加わっていることから、熟練した能力と技術を生かした林業の機械化と作業の省力化が行われるようになってきている。「Forest Good 2018-間伐・間伐材利用コンクール特別賞」を受賞した農耕用管理機を改造した集材ウインチの開発や溝切機の動力でドラムを回すロープウインチの開発により、人手を要していた間伐材の集材やトラック積込みの機械化が進められている。



「林業新知識」2017年7月号より

連携している団体・専門家・自治体など

額田木の駅プロジェクト、額田商工会、岡崎森林組合、JAあいち中央、(株)アイシン精機、(株)デンソー、愛知県、林野庁

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

新しく参加したメンバーによって間伐材を利用したロケットストーブやスウェーデントーチの開発や、積み木を作った時に出るオガクズで作ったヒノキオイル、ヒノキウォーターの抽出実験なども行っている。

ロケットストーブは丸太の中心に穴をあけて丸太自体を調理熱源にできる。防災グッズとして利用もできて商品化の可能性もある。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 作業の安全対策はどのようにしているのですか

<答え> ヘルメット、作業用手袋、チェンソー対応の作業着(会から支給)の着用を徹底している。
定例会や講習会で安全教育もしている。
毎回作業の前に祝詞(のりと)を唱え、作業の安全を心掛けている。

その他、伝えたいこと(取材者が感じたこと)

取材に訪ねた鈴木啓允氏のログハウスは間伐こもれび会の昼食場所として開放されている。

メンバーは朝8時に安城市を出発して、額田地域の間伐作業に従事。昼食時になると元気な声がログハウスを賑やかにする。昼食は、間伐材を「額田木の駅プロジェクト」に出荷して受取る地域通貨「森の健康券」を利用して地元の商店から購入した食材で賄われていると伺った。この日のメニューは初物の牡蠣の炊き込みご飯と具だくさんのお味噌汁だった。他に漬け物やりんご、みかんの差し入れもあって豪華だった。炊事に協力する地元の人も加わって和気あいあいとした雰囲気がいっぱい漂う。取材者も相伴させていただいて感激した。昼食が済むとまた夕方まで間伐作業は続けられる。

もう50年以上前の旧額田町を私は訪ねている。明見町辺りから木の香りが立ち上り、町全体が活気に満ちていた。けれども、この頃既に木材の自由化は始まっていて、設楽町産と海外から運ばれて名古屋港で荷揚げされる木の価格は同額と耳にしている。岡崎市民の約半分の水道水を賄う額田の山が手入れ出来ないで大変なことになっていると知ったのは20数年前で、市民運動型環境団体を立ち上げた頃だった。何をどうすればよいのか分からずただオロオロとしてきた。9年前に国交省豊橋河川事務所が提唱して矢作川流域圏懇談会が設立され、加入し、「矢作川森の健康診断」や額田の自伐山主集団「林業クラブ」の存在を知った。

今回の取材を通して地域の念願とボランティアの良き出会いを知った。山村の高齢化と森林の整備は重い課題であるが明るい気持ちにさせられた。ボランティアと山主・里人の交流が温かかったからと思う。(沖)

写真



Forest Good 2018-間伐・間伐材利用
コンクールにおいて受賞した「間伐実
践・環境教育部門 特別賞」表彰状



伐採材積み込み作業



取材当日の作業メンバー



作業前の祝詞唱和



元町長から休憩所として提供されている
ログハウス



伐採作業



昼食風景

ウッドデザインパーク株式会社

調査団体名	ウッドデザインパーク株式会社	団体代表者名	代表取締役 亀崎雄介
設立年	2018年	対応してくれた人の名前	杉浦寮子・鶴木純平
団体URL	http://wood-designpark.jp/		
活動拠点	岡崎市鍛埜町日面8番地4	調査員	手塚透吾・太田修・筒井信之
取材日	2018年12月11日	レポート作成者	手塚透吾

活動内容

ウッドデザインパーク株式会社は、ニッカブロックの見学やバーベキューや川遊びなどの体験を通して、自然を感じ、満喫できる施設を運営しています！

<レセプション・カフェ>

受付であるレセプションに入ると、まず見えてくるのはきれいな木製の装飾です。この装飾はニッカブロックというもので、ウッドデザインパークの母体となるニッカホーム株式会社が特許を取得している木製商品です。岡崎の森林組合が伐り出した三河スギの間伐材を用いて制作されています。一般的に壁や床に使用される木製タイルから進化しており、天井や装飾品まで幅の広い用途で使用可能です。ブロックの大きさや形は用途に合わせて異なり、壁面を立体的に見せます。このようなニッカブロックの展示を通して、木の素晴らしさと人が手を入れ間伐を行うことの大切さを発信しています。また、カフェではジビエ料理を提供しており、自然を体感しながらゆったりとランチを楽しむことができます。

<ツリーハウス>

施設内を観覧しているときに、特に目を引くのが三河杉の巨木を利用したツリーハウスです。2階部分にはソファが設置されており、宿泊利用者は巨木を目の前にしながら、ゆったりくつろげる空間となっています。元々吹き抜けとなっていた1階部分は、壁が増設され、自然を感じながら飲み物を楽しむことのできるラウンジとなっています。施設内は快適で楽しい環境を提供できるよう、常に進化を続けています。

<バーベキュー・川遊び>

ラウンジから続くテラスには、バーベキューセットが置かれています。「バーベキューセットは持っていないし、食材の調達も面倒！」という方には、器具も食材も用意してくれるバーベキュープランも用意されています。バーベキューの後には、近くを流れる川を感じて楽しむこともできます。

<グランピング>

ツリーハウスの横にはグランピングエリアがあります。グランピングとは、「グラマラス」と「キャンプ」という言葉が合わさって派生した言葉であり、キャンプの経験がほとんどない方でも気軽に、快適にキャンプを体験できる施設です。ウッドデザインパークのグランピング施設はきれいなトイレやお風呂、空調設備などが完備されているだけでなく、部屋の脇を流れる川の音がBGMとして流れており、ゆったり過ごすことができます。通常のグランピングよりも少しカジュアルな雰囲気があり、快適さの中に自然を感じながら宿泊できる空間となっています。

<その他のイベント>

春と秋に1回ずつジビエ(イノシシ・シカ)料理を提供しているお店の方々と一緒に、イベントを開催しています。

キャッチフレーズ

～日本の「木」のコト、遊びながら学ぼう！～ 国産杉を使った、木のテーマパーク

会社のモットー(何を大切にしているか)

お客様に木を感じ、自然を満喫していただくことです。グランピングは気軽に快適に自然を楽しむことができるため、女性グループの予約も増えています。また、岡崎の市街地からもアクセスがしやすい自然のテーマパークであり、これまで自然に触れる経験の少なかった方にも、自然の魅力を発信できる施設となっています。

もう一つとして、新しいことに常に挑戦していくことです。様々な経験を持つ人が集まっている会社であり、それぞれの人が異なる発想を持っています。それらの発想を取り入れ、思いついたらすぐに新しいことに挑戦しています。しかし、新しいことに取り組むと常に反省点はついてくるため、試行錯誤の毎日です。また、新しいアイデアを生み出すために、いろんな活動に参加することを心掛けています。

設立から現在に至るまで変化したこと

[2017年]ウッドデザインパーク(バーベキュー)運営開始→お客様がバーベキューをしながら自然と川遊びを始める→グランピング施設の運営開始→[2018年]知多郡美浜町にウッドデザインパーク野間が誕生！
このように、常に変化し続けています！

連携している団体・専門家・自治体など

ニッカホーム株式会社(ウッドデザインパークの母体となる会社)

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動

グランピングやバーベキュー、川遊びを通して山や自然の良さ、木の良さを伝えています。そして、子どもや若い人に自然の良さを感じてもらい、将来的に自然に関わりたいたいと思っていただけるよう努めています。

現在直面している課題

- ・自然の脅威(川の中州に施設があるため、大雨のときは音がすごい。野間の施設は海沿いにあり風が強い。)災害に関する知識が不足しているため、勉強が必要であると感じています。
- ・周辺地域の山の荒廃
地域で所有している財産区の山を手放すケースが増えています。山を手放すことで山が手入れされず、荒廃が進行しています。自然に関わる会社であること、また社員の一人が地域の寄合に参加していることもあり、危機感を持っています。

今後やってみたいこと

- ・やる気のある人の雇用:やる気を持って仕事に取り組みたいと考える仲間を増やしたいと考えています。
- ・グランピング施設の拡充:夏季になると忙しくなり、予約が取りきれないこともあるため、宿泊施設の拡充を行い、さらに多くの人に楽しんでいただきたいです。
- ・地域の活性化:いろいろな地元のお店や団体と連携して、マルシェなどを開催したいと考えています。
- ・災害時の支援:施設内にはアウトドアの機器が揃っていることもあり、災害時に被災された方の援助の場としてウッドデザインパークを提供したいと考えています。そのため、災害についての知識も深めていきたいです。
- ・木の価値を高めること:ニッカブロックを通して、木の素晴らしさを感じてもらいたいです！そして、様々なところでニッカブロックを使っていただきたいです。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

- ・簡易トイレの作り方など、災害時にウッドデザインパークに避難される方に情報共有をできるような備えをしたいです。(ライフハック等の情報収集)
- ・災害時にウッドデザインパークが使えるよ！と発信するためのツールを知りたいです。
- ・アウトドア業界よりも他の業界とつながりを構築し、新しいものを生み出していきたいです。

チームオリジナルの質問

<質問内容>馴染みのない土地で地域の人と打ち解けられたのはなぜですか？

<答え>ここまで来れたのは、社員の鶴木さんが寄合に参加するなどの小さな努力の積み重ねがあったからこそです！しかし、地域の人にやっと知ってもらえた段階であり、これからさらに関係を築いていきたいです。

<質問内容>情報の発信方法は？

<答え>基本的にはSNSです。最近ではテレビや雑誌の取材も増えています。

<質問内容>客層は？

<答え>家族連れなどもありますが、女子会の場になっており女性のお客様も増えています。男性グループでの利用もあるのでかなり幅が広いです。また、岡崎は関東と関西の間にあるため、各地から集まり宿泊する場にもなっています。

その他、伝えたいこと

○今後の展望

- ・昨年8月にオープンしたウッドデザインパーク野間は、海辺でBBQを楽しめる施設となっています。岡崎の山と川、知多半島の海を楽しむ施設ができており、愛知県の自然の発信に努めていきたいです。
- ・2019年の春に名古屋駅近くに出店を予定しています。里山の居心地の良さを都会でも伝えたいと考えています。
- ・元々旅館であった建物を宿泊施設として再利用していきたいと考えています。

写真



○ニッカブロックを使った照明



○ニッカブロックの壁



○ニッカブロックの壁



○グランピング施設 4棟



○4本の巨木に支えられた
ラウンジ



○BBQ設備も完備！



○グランピング施設内部



○ラウンジの2階でゆったり



○川や山など自然がいっぱい！



○庭には古風な建物



○猫もお待ちしております！

有限会社オフィス・マッチング・モウル

～ 三河・佐久島アートプラン21～

調査団体名	： 有限会社 オフィス・マッチング・モウル(通称 モグラ屋)	団体代表者名	： 内藤美和
設立年	： 1999年(2001年有限会社化)	対応してくれた人の名前	： 内藤美和(代表)、池田ちか(取締役)
団体URL	： http://www.m-mole.com		
活動拠点	： 岡崎市(会社所在地)	調査員	： 近藤朗、高橋伸夫、太田修
取材日	： 2018年12月18日	レポート作成者	： 近藤朗

活動内容・経緯

1999年、アートを通じて知り合った内藤さんと池田さんが、現代美術に関するコーディネート&プランニング事務所として、岡崎市に「オフィス・マッチング・モウル」を設立。

その少し前から幡豆郡一色町(現西尾市)では、人口減少が進む佐久島において離島振興対策を進めるため、活性化ビジョンを策定、推進母体となる島民有志による「島を美しくする会」が1996年に設立された。その柱として始まったのが「アートによる島おこし」である。これには当時の国土庁・離島振興調査委員会「よい風が吹く島が好き女性委員会」(素敵な名前!)が関わっている(島民が気付かない島の魅力を外部から提言、女性の視点による)。

2001年から「マッチングモウル」が本格的にこの佐久島と関わることとなる(受託)。単に島でアートを配置するのではなく、島の魅力も同時に発信すべく「佐久島体験 祭りとおに出会う島」を掲げ、以後リニューアルされたプロジェクトが「三河・佐久島アートプラン21」である。真の意味で、アートと「島を美しくする会」島民とのコラボレーションが始まったといえる。以下のような具体的な取組みを企画・展開したが、これはごく一部であり、様々なプロジェクトが現在も進行中。

- 2001年に島内調査を実施、佐久島体験マップ(2002 宝島の地図!)、佐久島弘法散策地図の作成
- 佐久島空家計画/大葉邸(2001~2008 平田五郎)
- 佐久島弘法巡り+アートピクニック(2002~)
- 「どこかおかしい。」展覧会(2003 松岡徹)
- アート/「おひるねハウス」(2004 南川祐輝)、
- 「カモメの駐車場」(2005 木村崇人)、「イーストハウス」(2010 南川)、他多数
- 太鼓まつり(島の楽団)、弁天まつり、佐久島の雛まつり



おひるねハウス

キャッチフレーズ

エレガント & まごころ(社訓)

内藤美和代表(左)
池田ちか取締役(右)



会のモットー(何を大切にしているか)

- ・ 仕事をする時には、その土地を知り(町誌・市誌などを読み、現場も見て)、地域の声を聞きながら進める
～ 地域の人たちに誇りを持ってもらいたい
- ・ 十分なアフターケア ～ その場限りではない仕事を目指す
- ・ 作品を通じて、あくまでアートの精神を届けるのが仕事

連携している団体・専門家・自治体など

西尾市(旧幡豆郡一色町)、島を美しくする会(佐久島島民)、様々なアーティストたち

【参照】山村再生担い手づくり事例集Ⅱ(2015.3月) Oyaoya Café「もんぺまるけ」神谷芝保さん
山村再生担い手づくり事例集Ⅲ(2016.3月)「島を美しくする会」鈴木喜代司 会長

佐久島アートプラン21開始から現在に至るまで変化したこと

- 「アートによる島おこし」(1996)以前; 島人口の減少
1950年 約1,600人 → 1995年 約400人(2018 現在は約230人)
- 1996年 「島を美しくする会」設立; 「アートによる島おこし」がスタート
- 2001年 「三河・佐久島アートプラン21」として再スタート; オフィス・マッチング・モウルへの年間事業委託開始
「おひるねハウス」が出来たのが2004年、この頃より様々な情報誌が佐久島をアートの島として取り上げるようになり、都会から若い観光客が訪れるようになってきた。
- 2007年 幡豆郡一色町役場に佐久島振興室が設立; 佐久島に関する担当部署一元化される
- 2010年 神谷芝保さんが名古屋から通い(後に佐久島定住)、カフェ「もんべまるけ」を開業、さらに島に嫁いだ加藤麻紀さんが2014年に「café OLEGALE」を、佐久島に魅せられた中村眞由美さんが移住し2016年に「カフェ百一」をオープンさせた。3人は若者たち定住のためにも立ち上がり、マルシェ「39の市」を開催。
- 2011年 4月、西尾市と一色町(幡豆3町共)が合併; 佐久島振興(室)課は継承される
佐久島アートは合併前既に認知されていたが、この時期あたりから観光客が目立って増加。
島の雰囲気も変わってきたという。
- 2012年 島内弘法大師再生完了「佐久島弘法 八十八箇所巡り」完全復活する
- 佐久島への渡船利用者数(観光客)の増加 2008年度まで概ね5万人 → 2015年度 10万人突破
渡船が黒字となり、便数も増やした
- 2018年 SNS映えスポットランキング(投稿数)で全国5位となる

一番大きな変化として、島の若者たちも含め「出身地が佐久島」であることを、誇りを持って言える様になった。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例: 小仕事づくり、地域資源の活用など)

佐久島に関するマッチングモウルの仕事は、まち(島)づくりに十分寄与しているものとして取材に臨んだのであるが、内藤さんは「それは違います。まちづくりが私たちの仕事ではなく、観光事業として捉え、その分野での協力である。」とのこと。その真意については、過去の記録での内藤さんの発言を読んでいて理解できた。

「当時、私たちが一色町から与えられたミッションは、交流人口の拡大であり、その目的は達成できたと思います。この観光客の増加に対し、いかにビジネスを展開し、島の活性化につなげるかは、島民のみなさんにかかっていると思います。私たちは、島おこしのための環境づくりをさせていただいたわけです。」

(2011総務省 定住促進レポート 愛知県一色町佐久島「アートによる島おこし」より)

マッチングモウルが交流人口の拡大、島民が島おこし・定住促進を担うという役割分担を明確に意識されている。

内藤さんは、アートプラン21を「島の豊かさを伝えるプロジェクト」と位置づけ、まず戦略的にターゲットを都会などからの質の良い若者達に絞った。彼らは非常にマナーが良く、その場所にしかないお洒落なものや美味しいものには、お金を惜しまない。さらにSNSによって情報(インスタ映えする写真など)を広く発信し、広告費などのお金をかけずに、佐久島のアートな魅力が全国レベルで拡散されたのである。結果として島の魅力に惹かれた若者達などが「カフェ3人娘」として定住するようなケースも出てきている。

地域の担い手を島の魅力と呼び寄せることがマッチングモウルの使命、担い手づくりはあくまで島民自らが行うという自立的なシステムですね。「地域の方々に誇りを持ってもらいたい」と強く仰られている。

さらに、本当の佐久島を楽しめる島づくりを目指したい。そのためには、一度のイベントに何万人が来るよりも、100人が365日訪れた方が良いとのこと。それを念頭において様々な企画を展開している。「佐久島アートピクニック」にしろ何年も続く通年の企画であり、島内全域に宝物が散りばめられている。

現在直面している課題

島内ではレンタサイクルを借りて島巡りができるようになっており、佐久島の魅力の一つとなっている。ただし最近、自転車でもわる観光客が増えてきて、ちょっと雰囲気(マナー)が悪化していると感じる。本当は、島独自の条例づくりが必要かなとも思っている。

今後やってみたいこと / 佐久島・アートプラン21として

「三河・佐久島アートプラン21」としては、20年ほど続けてきて客も島民も行き過ぎた部分がある。もっと島の本来の自然、魅力を感じながら「歩いてまわる島」を目指そうかな。スタンプも看板もない新しいコースがいい。「佐久島体験マップ」も2002年発行以来、どんどん進化を続けている。(最新版は2018.2月に改訂) まだ知られていない佐久島の自然や地域資源について詳しい方がいたら、紹介して下さい。(内藤) また、木を使った企画、アートについても興味があり、根羽村森林組合の今村豊さんとも話をしてみたい。(池田) (別な企画で、「奏林舎」の唐澤晋平代表とは、既にコラボされているとのこと)

そのためにはどんな情報・人脈が必要か ~ 担い手事例集取材チームからの提案(2018/12/18)

矢作川流域圏懇談会では、今年度2018年4月14~15日、マッチングモウルの内藤さん、池田さんにも来ていただき「流域圏担い手づくり事例集交流会2018」を開催しました。その中で(2日目)、事例集取材チームでもある野田賢司さんの案内で「佐久島エコツアー」を実施しました。野田さんは佐久島をよく訪れ、地形・地質、環境に詳しく、また野鳥の分野では、本取材に同行している西三河野鳥の会の高橋伸夫さんが第一人者であり、何度となく佐久島での探鳥会を実施しています。

今回の事例集刊行後(3月以降)にでも、具体的な打合せをしましょう。

根羽村森林組合の今村豊さんについても、同様に現地(根羽村)にて可能性を探りましょう。

オフィス・マッチング・モウルとして 佐久島以外の事業、これからやってみたいこと、課題など

美術館での展覧会の企画・製作、あいちトリエンナーレ地域展開事業以外にも、歴史の里しだみ古墳群アートプロジェクト(主催:名古屋市/ガイダンス施設「しだみゅー」が2019.3月末オープン)、岡崎三十六地蔵巡り地図、刈谷城今昔物語(刈谷市の歴史・観光ガイドパンフレット)の制作など、地域の魅力を再発見するアートプロジェクト、地図・観光パンフレット制作に関わってきた。

【今後について】

子どもたちとアートを繋げる仕事をしたい by 池田ちか

【課題など】

当社の仕事は、十分な調査と調整、アフターケアをモットーとする手間ひまがかかるもの。これからもこれをしていくためには、もう少し見合った予算(お金)をいただきたいな by 内藤美和(代表)



2018.12.18 岡崎市内オフィス・マッチング・モウルにて取材風景



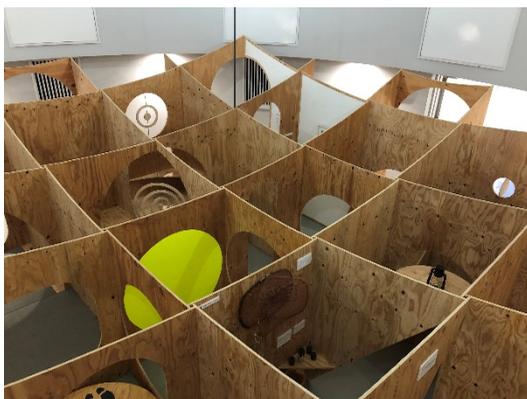
2018.4.15 佐久島「もんぺまるけ」にて

右奥が 神谷芝保さん

2018.4.15 佐久島住宅から三河湾を望む



佐久島ナビステーション「知識の蜂の巣」



佐久島体験マップなどの発信ツール



2019.1.22 佐久島の風景を歩く

▽かもめの駐車場 イーストハウス
大葉邸周辺 黒壁の集落 弁天サロン(内部)



岡崎市ぬかたブランド協議会

調査団体名 : 岡崎市ぬかたブランド協議会
 設立年 : 2018年1月
 活動拠点 : 岡崎市額田地域
 取材日 : 2018年12月27日

団体代表者名 : 眞木宏哉(会長・岡崎森林組合代表理事組合長)
 対応してくれた人の名前 : 眞木宏哉、荻野昌彦(運営委員長・岡崎森林組合代表理事専務)、小林哲夫(事務局・岡崎市農務課)
 調査員 : 沖 章枝、太田 修、浜口美穂
 レポート作成者 : 浜口美穂

活動内容

額田地域において、所得の向上や雇用の増大に向け、地域の眠れる資源・忘れていた資源を再発見・再活用し、商品化や販売促進等の取り組みを実施している。農山漁村振興交付金(山村活性化対策)(2018~2020年度まで3年間、年間1,000万円上限)を活用した事業。

交付金の申請にあたり、行政主導ではなく、地域の人々が中心となって取り組もうと、2018年1月に協議会が発足。その後、次々に額田地域に根を張る主立った人・団体が加わり、以下の7つの部会における活動が急激に膨らんでいる。2018年12月3日現在で、委員8名、運営委員11名、部会員は延べ66名に広がった。事務局は、岡崎市役所の農務課と林務課。

<部会と2018年の主な活動>

- かき氷部会・・・「おかざきかき氷街道」と題し、ぬかたの天然水「神水(かんずい)」と地元で採れた果実、お茶、野菜などをふんだんに使用したかき氷を、複数の飲食店が時期を統一して提供(スタンプラリー期間は7月21日~10月30日)。「神水」は、ぬかたの銘酒「孝の司(こうのつかさ)」の原水であり、額田地域の誇れる資源の一つ。「おかざきかき氷街道」は11月、愛知県知事から「いいともあいち食の街道」に岡崎市内で初めて認定されている。
- 木材部会・・・木を売るためのシステムをみんなで考え、さしあたって薪を売り込むための足湯をつくることになった。薪は三河地域の森林整備で生じる間伐材を活用したもの。木質バイオマス賦存量調査、間伐材を用いた簡易テント・足湯キット(湯は薪ポイラーで沸かす)の試作、岡崎市農林業祭など様々な市内のイベントにおいて足湯体験を実施するとともに、間伐材薪のPRも行った。
- 薬草部会・・・ヨモギ蒸し風呂や入浴の際使用する国産ヨモギを求める声に応じ、良質なヨモギの栽培・製造・販路開拓・ビジネス化に向け検討。試作した乾燥ヨモギは、足湯体験イベントで使用・試験販売を行った。将来は耕作放棄地対策の一つとして期待される。
- 鮎部会・・・天然鮎を漁獲後、飲食店に提供し、来店者による天然鮎の評価検証、天然鮎の保存試験を行い、東海道中膝栗毛の岡崎宿のうまいものとして登場する鮎の肴の名物復活に向けた検討を行った。
- 自然薯部会・・・額田地区特産の自然薯。近年、生産者が徐々に減り、生産量も減少している現状を打破しようと、商品の開発・リニューアル(漬物「とろろじゃん」として改良、切った自然薯を真空包装にして商品化)に取り組み、のぼり旗を作るなどして発信力を高めている。
- 販売戦略部会・・・2019年2月に東京ビッグサイトで開催される「第1回山の恵みマッチング」に出展。それに合わせ、PRする商品を含めた地域を紹介するリーフレットの作成等を行った。
- 山菜部会・・・統一ブランドマークを商品に貼付する等により、PRを行った。
- その他・・・統一ブランドマークの作成、既存商品のリニューアル・商品の新開発、様々なイベントに出展し、ぬかたブランド品をPR・即売、研修(人材育成)などを実施した。

キャッチフレーズ

ひと、水、緑が輝く里 ぬかた

会のモットー(何を大切にしているか)

- ・とにかく楽しく!(みんなでいつも言い合っている)
- ・対話と実践から眠っている地域の力を再起動していく。

連携している団体・専門家・自治体など

岡崎森林組合、岡崎市ぬかた商工会、岡崎市農業委員会、あいち三河農業協同組合額田営農センター、額田木材製材業組合若手会、岡崎市食品衛生協会額田分会、ぬかた観光地化推進協議会、額田林業クラブ、(一社)奏林舎、じさんじよの会、NPO法人アースワーカーエナジー、ぬかた体験村、岡崎女子大学、愛知学泉大学、他多数

現在直面している課題

始まったばかりで団体としては特に課題はないが、ジビエの活用については、地域の最大の課題であり、最大の資源でもあるので、問題は多いが、期待も大きい。12月に行った1回目の関係者の集まりで課題の抽出および意見交換を行ったが、参加者相互が知らないことも多く、このような集まりの重要性を実感した。山間部の地域はどこでも頭を悩ませていることなので、額田で成功例をつくりたい。

今後やってみたいこと

人が集まるような空間・仕掛けをつくっていきたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 短期間でこれだけ広がった理由は？

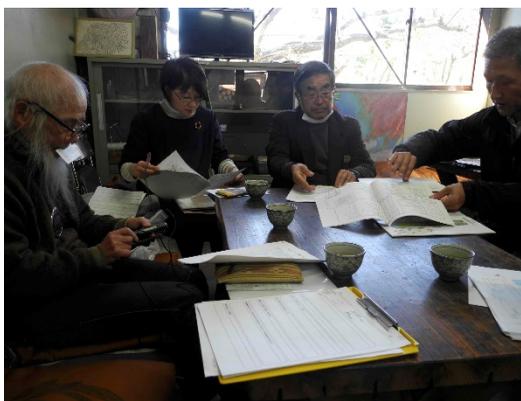
<答え>

額田地域の人口は2018年12月1日現在で約7,900人(岡崎市全体では約387,800人)。2006年の合併から約1,000人減っている。都市の経済対策が先行しがちな市の施策の中で、取り残された額田地域の危機感は高まっていた。しかし、活性化のために何かをやらなくてはという思いはあったが、お金がなく足踏み状態だった。そこに農山漁村振興交付金の話があり、一気に火がついた。ちなみに、交付金の対象地域は、岡崎市の中でも額田地域だけだった。すでに商工会によるかき氷街道の動きがあったので、どうせやるなら地域で手を組んでやろうということになった。交付金の予算が大きく、使い方に制約が少ないことも手伝って、一つが動き出したら、それに絡んでいろいろな動きが派生していった。いい形で地域みんなが絡んで動いている。

その他、伝えたいこと

個人で頑張っている人やお店はあったが、みんなが話せる場所がなかった。隣にいても何をやっているのか分からない状態だった。この協議会ができて、日々の仕事の中でふと思いついたこと、仲間がいたらやりたいとずっと思っていたことなど、それぞれの部会で活発な意見が交わされているのを見て感心する場面が多い。

役所主導の協議会運営は、「やらされている感」が強く働いて続かないケースが多いと思うが、この協議会は皆とても楽しそうに動いている。交付金の対象事業期間は3年間だが、この間に地域で資源を再発見し、コラボで新しいものが生み出せるかもしれない。若いメンバーも多いので、これからは楽しみ。



額田地域にある岡崎森林組合で取材。会長の眞木さんは、同組合長、運営委員長の荻野さんは、同専務。岡崎森林組合は、「山村再生担い手づくり事例集(2014年3月発行)」及び「その後いかがお過ごしですか？プロジェクト(2017年3月発行)」に掲載されている

かき氷部会



かき氷街道のポスター。額田地域で酒づくりにも使われている超軟水「神水」を使ったかき氷。7～12月で6,271杯を販売した



木材部会



薪ボイラー



足湯体験イベント

薬草部会



ヨモギ苗の定植
今後、耕作放棄地対策として期待できる

鮎部会



真空包装およびマイナス60℃保存による劣化状況の検証を行った

自然薯部会



「とろろじゃん」商品化



その他全体



統一ブランドマーク



イベントに出展
ぬかたブランド品をPR

内藤連三氏の人となり

取材先 : 天野博(矢作川沿岸水質保全対策協議会 事務局長)
 取材日 : 2017~2018年度
 調査員及びレポート作成者 : 内田臣一、清水雅子
 資料提供者 : 野田賢司(矢作川環境技術研究会)

清水: 内田先生、今日はどこに行ってきたんですか？

内田: 今日、内藤連三さんの人となりを伺いに、矢水協(矢作川沿岸水質保全対策協議会)の天野事務局長さんのところに行ってきたんだよ。

清水: おおっ！ 内藤連三さんといえば、伝説の方ですよなっ。矢水協をつくって、工場排水を垂れ流していた工場を見つけてはガンガン指導して、自治体にも働きかける、環境活動家なんですよな。メチャクチャ怖い方で、だから水質汚濁防止法ができたって聞きました。

内田: 確かに「鬼の内藤」と言われたようだけど、清水サンはちょっと誤解しているかもね。かくいうわたくしも、内藤連三さんという方がどういう人かはよく知らなかったの、天野さんに会って聞いてきたの。

清水: わあ、私も内藤連三さんのこと、知りたかったんですよ。でも、ネット検索してもあまり詳しくは出てこないんですよ。ウィキペディアにも載ってないし。

内田: じゃあ、まずは、矢水協について、簡単におさらいしましょう。矢作川環境技術研究会の野田賢司さんの書いた文章を引用しちゃおう。



ゴルフ場造成工事現場対策指導(平成5年頃)
 左から二人目が内藤連三さん

矢作川沿岸水質保全対策協議会について

【水質汚濁の激化と清流を取り戻すための矢水協の活動(流域共存の思想へ)】

1950年代後半から矢作川上流域で盛んになった鉱工業の排水や乱開発の濁水は、下流域の農業(水田)や沿岸漁業(漁場)に大きな被害を与えた。流域の土地利用が急速に変化(工場配置・都市化)し、水需要や水の汚れをめぐる上下流の利害が対立するようになった。

1969(昭和44)年、利水地域を含む矢作川水系の全河川および三河湾漁場の水質浄化を目指すため、下流域の農業団体と漁業団体および河川から用水取水する市町村によって「矢作川沿岸水質保全対策協議会」(通称 矢水協)が組織された。関係行政区は14市町村である。

清流を取り戻すための活動(矢作川の水質浄化運動)は、初代事務局長の内藤連三氏が中心となり、監視と調査、厳しい水質基準による事業所の排水処理の指導、造成工事の濁水対策の指導、行政に乱開発防止を働きかけるなど、粘り強く推進した。

現場体験から、お互いの立場を理解し気配りすることが協調を生む鍵であることが会得される。対立関係にあった上下流住民に交流が芽生え、環境教育、啓発活動、矢水協の支援団体づくりが行われた。

その過程から「流域は一つ、運命共同体」が合言葉になり、姉妹町協定・地域づくり・水源の森分収育林等にも発展した。

清水: 内藤連三さんは、明治用水土地改良区や矢水協という立場にあったにしても、矢作川の水質浄化のために事業所の排水処理の指導とか開発事業者の濁水排水を止めさせようと抗議したり、と、行政への働きかけなどを続けたのって、勇気と行動力、そして根気があったんだね。

内田: 内藤連三さんは、現場主義の方で、常に現場に行き、証拠となる写真データや水質試験結果など科学的見地に基づいて、事業所を指導(水質汚濁防止法の排水基準施行前)・要請や抗議(同排水基準施行後)したり、行政に要請したりしたようだよ。

清水: また、鬼の形相で工場に立ち入りしていただけではなく、対立していた矢作川の上下流の利害関係者間の交流機会をつくって、対話と相互理解を促したんだね。なんだか、内藤さんは悪事に対しては修羅になり人間には菩薩になる、本当に人間らしい方だったんですね。

内田：内藤さんは、農漁業者の生活のために、常に現場主義で現場と向き合ってこられたとのこと。だからこそ、農漁業だけではない、その地その地で生活している人々の暮らしともちゃんと向き合う必要を感じたのかもしれないね。

清水：あれっ、“流域は一つ、運命共同体”って、矢作川流域圏懇談会の標語になっているよね。もしかして、この標語は矢水協の合言葉からパクったの？

内田：パクったと人聞きが悪いなあ。もともとこの合言葉は昭和53年に伊藤郷平博士(当時 愛知教育大学長)が「矢作川流域開発研究会」会長として流域全市町村の住民の連帯感をつくるのが水問題の解決の糸口になるとして提唱したもので、矢水協の啓発活動で引き継がれたの。今は矢作川流域の人々の精神的支柱となっているね。

清水：へえーそうなんだ。知らなかったです。私たち矢作川流域圏懇談会のメンバーにとっても、合言葉の裏にある歴史と精神を知り理解することはとても重要なことね。

内田：では、内藤連三さんの生い立ちやその活動についてまとめよう。

内藤連三氏の生い立ちと活動

- ・昭和7年、高浜市で出生。幼いころ母を亡くす。
- ・戦死した長兄の影響で陸軍幼年学校をめざし、旧制刈谷中学校へ入学(当時旧制中学2年で幼年学校受験が一般的であった)。戦後の教育制度の変革により新制中学校を卒業し、吉浜役場(後に高浜町役場に併合)の職員となる。
- ・昭和27年11月、父の友人だった岡田菊次郎氏(元安城市長)の勧めで、明治用水土地改良区の職員になる。
- ・昭和40年代初めのころ、明治用水管理事務所に勤務。矢作川の水が汚染されている実態を見るとともに、農業・漁業に被害が発生している状況を確認し、「苦労して確保した農業用水を守る」との思いでパトロールを始める。
- ・明治用水土地改良区など農業・漁業団体により、昭和44年に矢水協が結成されると同時に矢水協事務局担当係、昭和48年5月1日矢水協に出向、5月14日水質保全課長、昭和52年1月1日矢水協出向を解かれ、2月1日明治用水総務部長兼矢水協事務局長に就任。
- ・乱開発業者への濁水排出への抗議、悪水排出工場への排水処理指導、国・県・市町村への要望・陳情に奔走する。
- ・昭和50年代に入ると、これまでの活動に加えて、対立関係にあった上下流の住民の相互交流、環境教育や啓蒙活動を推進。
- ・また、愛知県が大規模開発の許可条件に矢水協の同意を必要と決め、流域内の「秩序ある開発」のお目付け役となる。
- ・これら民間主導型の流域管理は、「矢作川方式」と言われるようになり、昭和60年代からは「矢作川方式」を国内・海外へも伝える活動を行っていた。
- ・癌との闘病の末、平成13年8月27日に逝去。



山砂利採取現場



宅地やゴルフ場の造成などの乱開発現場



赤土流出防止等対策シンポジウムで講演する内藤氏
(1998.5.16、沖縄県宜野湾市)

◇とても厳しい人◇

- ・紳士的だが怖いというのが、周りにはカリスマ性として映ったのだろう。新聞社は「鬼の内藤」とか「内藤天皇」と書いていた。
- ・とてもこわい人だったので、(天野さんは)早く別の部署に移りたかった。内藤さんの下にいたKaさんは3年、Kiさんは6年しかもたなかった。
- ・ゴルフ場開発が盛んだった頃、内藤さんが上流の地域の役場に行くと、村長がこわがってトイレから外に逃げ出したことがあった。またその村ではタバコを売ってもらえないこともあった。さすがにその経験が堪えたのか、上流と下流が交流するような活動に力を入れるきっかけになったのかもしれない。

◇賢い戦い◇

- ・人を動かすのが上手かった。特に報道機関、新聞の論説委員を上手く使った。
- ・体験を重視していた方なので、周りの人にも、「考えたこと、計画したことをやってみろ。体験してみろ。身で体験したことに自信を持て。」と叱咤激励していた。
- ・警察を動かすために何をしたらよいか。また、会社、大学の先生、行政、マスコミ・報道関係者、それぞれを動かすためには何をすべきか、よく分かっていた。

◇人間らしい一面、行動様式の変化◇

- ・内藤さんは、元々いた明治用水に「帰りたい」と言っていた。
- ・休日には、奥さんを手伝ってよく漬物を作っていた。その漬物は関係者に配っていた。
- ・人と人とのつながりを大切にした人。
- ・趣味は犬の散歩。初めは、乱開発業者を牽制して「ゴルフはやらない」と言っていたが、開発指導が功を奏してきた頃からゴルフを始めた。
- ・上下流の交流事業では、小学生や山の人を海に招待して潮干狩りに行ったり、そのお返しにと山でイワシの朝市を開いたり、山から下流へ雪を持ってくるといった活動をするようになった。この活動には、矢作川をきれいにする会や衣崎漁港等の民間団体、地元自治体の協力があった。



山の子供手作りのトウモロコシを岩月会長(右)に贈る上田教育長(左) —安城市の明治用水会館で

山の子からトウモロコシ届く 海へ招待のお礼です

矢作川の上
下流が縁で
佐久島や碧南市へ

おじさん、おばさんありがとう。海へ招待してもらったお礼です。ウモロコシ三百五十本を贈った。矢作川の水質浄化をめざす同協、安城市大東町、明治用水、矢作川の上流部、最上流部の平谷村とは、協議会事務局を二十八日、長野県立湯田の遠いから過去に幾度か対立する場面があった。しかし、きれいな川を取り戻すには上流と下流が訪れ同村平谷小児童が作った「トウモロコシ」が手を取り合えば、と相互理解

に努め、一昨年から平谷村と根羽村の小、中学生を幡豆郡根羽の海に招待、山の子ら喜ばせている。こどもも七旬に平谷中学生が「色別に平根羽両村の小学生が碧南市へ、れ海やプール遊びを楽しんだ。

S55.8.29中日新聞記事



工場排水調査



山の子供達の潮干狩り招待

清水: 内藤さんって、仕事をしているときはとても怖かったようですが、奥さんを手伝ったり漬物を配ったりと、結構、気配りの人なんですね。厳しいけど、強くて優しく感じる感じで、ステキ。

内田: 農業漁業者のために、矢作川の水質を良くしなければならない、という使命感と真剣さから悪いことに対してはとても厳しくて、怖かったのかもしれないね。

清水: 昭和40年代までの水質浄化闘争を「ハード路線」と形容するならば、昭和50年代の上下流の交流などは「ソフト路線」といえるかもしれませんね。でも、どちらの戦いも一貫して「矢作川の人々の生活を守る戦い」ですね。

内田: 人と人とのつながりを大切にしていた、ということは、とても人間が好きな方だったのかもしれないね。だから、データのみに頼ることなく現場体験を重視し、様々な人たちを理論的にも感情的にも動かす肝を押さえていた。その基本には、様々な人に対する「気配り」があったようだね。

清水: これまでの内藤さん率いる矢水協の活動が、「矢作川方式」を生んだのですよね。でも私、「矢作川方式」というと、開発工事の現場で発生する濁水を仮設沈砂池から竹粗朶柵を通過させて放流する沈殿除去方式:濁水対策のことしか思い浮かばなくて、よく知らないです。

内田: 内藤連三さん曰く、「矢作川における水質保全活動の全体」を指し示している、とのことだよ。では、内藤連三さんの言葉や思いと重ね合わせながら、「矢作川方式」についてまとめてみよう。

内藤連三さんの思いと矢作川方式

■農業者の使う水を守らなくてはいけない

昭和30年代の高度成長期にあって、矢作川流域の水質も工場排水、土砂採取業者などによるヘドロや濁水により非常に悪化。明治用水土地改良区が中心となり、下流の農民を守るため、そして同じく困っていた漁民を守るため、6農業団体、7漁業団体、5市町により1966年9月に矢水協を設立。監視と実態把握のために工場等への立ち入りと水質調査を行い、実効性のある法整備へ向けた行政への陳情を行った。

■母なる川、矢作川の水は自分たちの手で守るしかない

内藤連三さんが語るエピソード。1969年11月に矢水協の代表が経済企画庁国民生活局を訪れた際、当時の担当課長の「日本を担う企業を潰すつもりですか」という発言から、矢作川の水は自分たちの手で守るしかない、と強く胸に誓った。

そこから、矢水協は更に精力的に。足で集めたデータと1972年に施行された水質汚濁防止法を武器に、汚水を垂れ流していた悪質山砂利採取業者を愛知県警に告発。これが、水質汚濁防止法違反で全国初の告発となり、その後の告発・摘発により工場等事業所からの排水の改善がようやく進むことに。

■流域の人々にはそれぞれの生活がある

1974年のオイルショックを契機に開発行為に低迷が見え始めたころ、工場等への立ち入りや水質汚濁防止法の効果もあり、矢作川の水質もよくなり始めた。

そのような中、これまで主に下流域の生活者を守る活動をしてきたが、本当に守るためには上流域での開発により工場などで生きる人たちのこと、開発業者に山を引き渡さざるを得なくなった上流域の人々の生活も考えないと、という思いに至る。

■流域は一つ、運命共同体

前述のそれぞれの生活を守るため、それまで汚染源としての上流域、被害者としての下流域、という対立関係にある地域住民の相互理解を深めるため、交流事業や環境教育に取り組む。

上流の小学生を下流の潮干狩りに招き、三河湾の取れたてイワシを上流山村に産地直送し朝市を開催。また、上流の岐阜県明智町と下流の一色町の「姉妹提携」を手助けした。矢水協の支援団体組織づくりとして、一色町の5漁協の婦人部で「矢作川をきれいにする会」を結成し、工場排水、乱開発現場のパトロールや環境問題などの勉強会を開催。

■秩序ある開発を

現代の人間が生活する上で開発はなくなる。そうであるなら、流域全体を考えた「秩序ある開発」を進めよう。1985年には流域全体から開発順位を決める「秩序ある開発を求めて」という指針をまとめる。①公共事業、②過疎対策、③地域の経済発展につながる事業という順位で、利益追求型開発を牽制。1976年から愛知県の大規模開発の許可条件に矢水協の同意が必要になったという背景が、秩序ある開発の実効性を担保している。

■解決の方法は現場にある～具体的な公害防止のノウハウづくり～

矢水協自らの現場パトロールを通し、現場の人たちと議論する中、開発など流域で行われる工事を出してしまう濁水の対策を、地域に根差しながら誰でもできる独自の具体的な方法を編み出す。大規模開発事業者に開発前の環境アセスメントを実施し報告書を提出するよう求め、また川の濁りを指標とした監視に基づき工事を進める方法を推し進めた。



矢作川方式の調整池(豊田テストコース造成工事現場にて撮影:2014年)

矢作川に生きる

内藤 連三の志

川上から流れてきた桃から生
まれた桃太郎は、自然界の仲間
のサルとモンキーの協力を得
て、みんな困らぬ鬼を退治
に、鬼が逃げた。

自然に生まれた人間の、上
下流の助け合いの伝統や信仰行
事が全国にある。日本の暮らし
の文化は川に沿って生まれ
流域に定着してきた。上下流は
運命共同体だ。

様変わりするのは明治の近代
化からである。汽笛一声、新橋
を汽車が走り、川を、遊川
節を横にぶち切って日本に
鉄道、道網が伸び、川沿
政域を区切る存在となり、流域

園文化は壊れていった。

し、いまどきは、流域を一つ
の単位として、国つきの考え
で「打ち出されたのが一九七
七年、第三次全国総合開発計画
の流域定住圏構想である。
構想を策定した当時の下河辺
淳国土庁事務次官は、「この
構想は矢作川にあり、十年
から始まっている矢作川保全
の研究活動を、積極的に国土
管理のテーマとして流域の考
えで採り入れた」。

矢作川は長野県南部を源流し、
岐阜県を通り、愛知県三河地
方を貫流して、河湾に注ぐ。百

流域は運命共同体



二十丁の大きな
川である。しかし
清流で知られたこ
の川も、戦後の経
済発展の裏側を
のままに欺く、開
発事業によって汚
濁していく。

上流地域で農業
原料の珪砂や山砂
が掘り出されるよ
うになった。この年
代、開闢者によっ

矢作川上流の開闢事業を提する内藤連三
矢水協事務局長の2010年9月、愛知県・山村で

内藤さん先頭に矢
水協の運動は激しく
た。深夜に山を登るフ
クワ隊が上流の山
土れ流し現場を次々
と襲き、告発を受けた
愛知県警は水質汚濁防
止法の直前規定を全国
初めて適用、開闢業者
を摘発した。

しかし、鬼と恐れ
られた内藤さんは、上
流域を歩きながら過激

山村の苦悩を知る。下流は被害
者だが、一方で経済成長の享
受者だ。その陰には山村の若
者流出があった。上流の暮らしが
安定しなければ、下流の環境は
守れない。内藤さんは上流山
村との交流を始めた。

上流の珪砂業者が下流を復
した(七二年)。岐阜・明智町
から三河湾のノリ漁視察(七
三年)。明智町と愛知・一色町
が姉妹提携(七七年)。上流の
自治体が矢水協に続々と加盟す
る(七七年)。そしていま、海
と山を結ぶ産物交流や子どもた
ちの交歓キャンプなど、親戚の
ようになった下流と下流の付き
合いが続いている。

内藤さんは八二年夏、名古屋
の地下街で若者に「おじさん」
と声を掛けられた。矢作川の交
流で瀬戸村にきたこのある
長野県平谷村の子だった。

2001.10.23
東京新聞
夕刊記事

内田: 名前のお通り、矢水協は協議会なんだよね。矢作川の水質をよくしていこう、という思いがある組織・人が集まり、行政のみに頼ることなく、自分たちで理想を実現していくんだ、そのために協議をしてくんだ、ということだよ。

清水: 内藤さんは、「農業者の生活を守りたい」という思いから始まり、そのためには結局、「流域全体の人々の生活」を考えないといけない」という思いに至ったのかな。2010年の生物多様性条約COP10でも学んだけど、私たち地球上の生き物は、みんなつながっているもんね。内藤さん、根っこの目的に真剣、忠実な人だったんだよね。

内田: 行政という枠組みではできないことを、矢水協という組織をもって、集まった人たちが自ら責任をもって遂行していく。内藤連三さんは、こんな言葉も遺しているよ。

内藤連三さんのことば

かつて敵味方に分かれて闘争した問題も、お互いが話し合い、理解していくことによって、最後には協調と協和の中で、解決が図られるようになったのである。

それこそ「矢作川方式」の最大の勝利と言えるのではないか。

清水: うわっ、内藤連三さんのことば、ステキすぎて涙が出そうです！ 私も大好きな矢作川流域の人たちは、矢作川という風土から形成された生き物でもあるね。でも、「矢作川方式」が勝利できたのは、やはり、そこに内藤連三という素直で真剣な方がいた、ということが大きな要因ではないかなって、思いました。あーもつともつと、内藤連三さんや矢水協のこと知りたくなくなりました。

内田: また、天野さんや野田さんにも話を聞きに行きたいね。後に参考文献も記しておくから、読むと良いよ。さあ、我々もぼやぼやしてられないね。お互い、それぞれの場所で、自分の使命を果たしていかないとね。

清水: はいっ、内田先生、私も今いる場所で頑張ります。

<参考文献>

伊藤郷平(1978): 流域定住圏論～矢作川流域開発研究会の歩みとその軌跡～, 地理学報告第47号, pp40-50

岩月鉦一(1977): きれいな水を求めて, 林業あいちNo.272, pp2-3

内藤連三(1999): 水質浄化運動30年の闘い(第1回日本水大賞グランプリ), 河川No.634, pp44-47
http://www.japanriver.or.jp/taisyo/oubo_jyusyou/jyusyou_katudou/no1/no1_pdf/yahagi.pdf

内藤連三(2002): 公開研究発表会閉会のことば, 水は生きている2002, p86

野田賢司(2014): 矢作川における水環境保全の取組の歴史と特徴, 三河湾再生プロジェクト三河湾環境再ワークショップ2014in知多 特別講演要旨

太田隆之(2005): 資源管理における制度構築問題とリーダーシップ-矢作川の水質管理を事例に, 環境経済・政策学会編「環境再生」, 東洋経済新報社.

太田隆之(2007): 流域水管理における主体間の利害調整: 矢作川の水質管理を素材として, 松下和夫編著「環境ガバナンス」, 京都大学学術出版会.

太田隆之・諸富徹(2006): 里川への経済学的アプローチ 矢作川の保全活動から, 鳥越皓之・嘉田由紀子・陣内秀信・沖大幹編「里川の可能性」, 新曜社.

矢作川くだり実行委員会

調査団体名 : 矢作川くだり実行委員会
 設立年 : 2001年
 団体URL : <http://yahagi.link/>
 活動拠点 : 安城市桜井公民館
 取材日 : 平成30年12月14日

団体代表者名 : 深津 修 実行委員長
 対応してくれた人の名前 : 深津 修、大屋 守、野村 佳奈子
 調査員 : 太田 修、清水 雅子
 レポート作成者 : 清水 雅子

活動内容

毎年夏に矢作川においてイカダくだりのイベント(矢作川くだり)を開催。このイベントは競争ではなく全員の完走を目指すもの。ただイカダで下るだけでなく、中州で宝探しなどのゲームを行ったり、イカダの装飾や乗員の衣装で光るものがある艇やチームワークがすばらしい艇には特別賞を設定している。

矢作川くだりは、前実行委員長である当時市議の都築光哉氏が呼びかけ、桜井地区をもりあげよう！と始まったもの。以前、豊田市内で行われていた筏下り※を見習って始めた。

※「矢作川筏下り大会」は1987～2006年まで計20回、豊田市内で行われた。

キャッチフレーズ

母なる川、矢作川

会のモットー(何を大切にしているか)

安城市民にとって母なる川: 矢作川に触れ親しむことで、自然のすばらしさと大切さを学び、矢作川への親しみや愛着を深めることを目的としており、水源地への感謝を次世代へ伝えていきたいとの思いで実施している。

そのため、川下りの前にゴミ拾いを実施したり、イカダの材料も川を汚さないものにするよう呼びかけている。

また、「安全第一」をかかげ、出艇前のイカダ構造チェックや乗船時の禁止事項の取り決めをしっかりと行い、安全対策に十分配慮している。

その上で、参加者が喜んでくれることを考え実施している。

実行委員会では、各部会の信頼関係によるチームワークを大切にしている。

設立から現在に至るまで変化したこと(その1)

・川くだりの参加者は、初期の頃は60艇を超えることもあったが、安全対策を考えて今は40艇までとしている。

・はじめは約2kmの距離を川下りするだけだったが、現在は下る距離も約4.5kmに伸び、参加者に楽しんでもらいたいとの思いから、河岸で音楽演奏やフラダンスをしたり、中州で宝探しゲームを実施するなど、毎回、少しずつ工夫してイベントを変化させている。



開会式の様子



いざ、出艇！

設立から現在に至るまで変化したこと(その2)

- ・はじめはなかったが、チームワーク賞やデコレーション賞などをつくり、参加者には多面的に楽しんでもらっている。
- ・近年、気象条件が変化してきており、この4年間で2度、台風や増水のためイベントを中止せざるを得ない状況となっている。中止になると、参加者や協賛企業のモチベーションが低下してしまう。
- ・ゴール地点(藤井公園東の堰)に砂が溜まって浅くなってきている。

連携している団体・専門家・自治体など

安城市、市教育委員会、市観光協会、(株)キャッチネットワーク、安城産業文化公園デンパーク、安城ホームニュースが後援している。

また、平成30年は地元のスポーツ関連団体や企業など9団体が協力、45社の企業や商店の協賛があった。

流域圏の担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、地域資源の活用など)

矢作川という地域資源を活用した筏下りをとおして、自然を知り親しむことはもちろんのこと、自然の怖さもしっかりと伝えることで、青少年の健全育成を目的としている。

また、安全対策で多くのボランティアスタッフが必要だが、桜井地区の地域住民をはじめ、アイシンAW学園の生徒、地区消防団の方々、桜井ソフトボール協会などがスタッフとして参加しており、地域の団結につながっている。

イカダくだりチームは地元の人たちが多く、それぞれ家族や職場、友人などで参加しており、イカダ作成から出艘までの一連の作業をとおし各コミュニティの団結力が増す一助となっている。

また、参加チームは地元だけでなく矢作川流域の周辺市町や流域外から来る方もいらっしゃる。流域内交流、そして流域間交流にもつながっている。

現在直面している課題

実行委員が高齢化してきたこと。世代交代を進めたい。

今後やってみたいこと

- ・もっと参加者が楽しんでもらえる、喜んでもらえる仕掛けをしていきたい。以前に、キャッチ(ケーブルテレビ局)のパーソナリティが来てくださり、ショッカー軍団がいかだ下りをしてくれたことがあった。毎年、何か目玉をつくっていきたい。
- ・水源町の明治用水頭首工をスタートとした長い距離のいかだ下りをしてみたい。
- ・バーベキューや音楽祭も開催してみたい。

今後、どんな情報・人脈などが必要か

- ・参加者のライフジャケットの準備は必須だが、少ない予算の中でライフジャケットのレンタル代が大きな負担となっているため、国等でライフジャケット貸し出しの制度をつくってもらえるとありがたい。
- ・協賛企業はたくさんあるが、参加企業はあまりないので、CSRや社員教育の一環として多くの企業さんに参加していただけないか。



筏運搬の重労働に消防団の奮闘



アイシンAW学園生も力仕事のお手伝い

チームオリジナルの質問

<質問内容>

なぜ地域活性化で「いかだ下り」を選んだのか？

<答え>

もともと、この地域の方々が青少年健全育成の活動としてお化け屋敷をやったりしていたが、豊田市で行われていた川くだりを見学し、目の前にある矢作川という自然豊かな公共空間を改めて認識し直し、昔、自分たちが川で遊んでいたように今の子供たちにも自然に親しんだり触れて欲しいと思い、矢作川の川くだりをする事となった。

その他、伝えたいこと

- ・どの写真を見ても、参加者は笑顔ばかり。この“笑顔”が実行委員のやりがいになっている。実行委員も40名いるが、多少の入れ替わりがあってもほとんど辞める方がいない。準備は大変だが、楽しんでいる。
- ・参加者もリピーターが多く、毎年、楽しみにしてくださっている。
- ・スタッフとして、地域の方、岡崎のカヌー協会など、多くのボランティアが参加してくださっている。アイシンAW学園や消防団の若いメンバーは、筏を川に下ろしたり川から引き上げたりするのに活躍している。
- ・イベントに向けて、広大な河川敷の草刈りに膨大な労力が必要だが、市や国交省(矢作川の管理者)に加え、ボランティア、地域の農家の方も手伝ってくれるので、ありがたい。

取材者の感想

今回の取材で、桜井地区の方々の結束力の強さがひしひしと伝わってきました。桜井地区では他にもさまざまなイベントを実施しているとのことだが、この矢作川くだりでも、前述したボランティアさん達をはじめ、実行委員として参加するデザインのプロがポスターを作成したり、消防団OBもカヌーで安全監視を行ったり、と、地域の総力を結集していることがよくわかる。

「こどもたちのために」という、人間として一番大切な根本目的を基盤に地域で団結する。参加者のことを考えて創意工夫を重ねる。だから、大変だけど、参加者もスタッフも楽しい。

こんなにステキな地域活動が安城市という都市にあるとは！ 矢作川流域の実力をみせつけられた思いである。



実行委員の面々



矢作川を下る筏



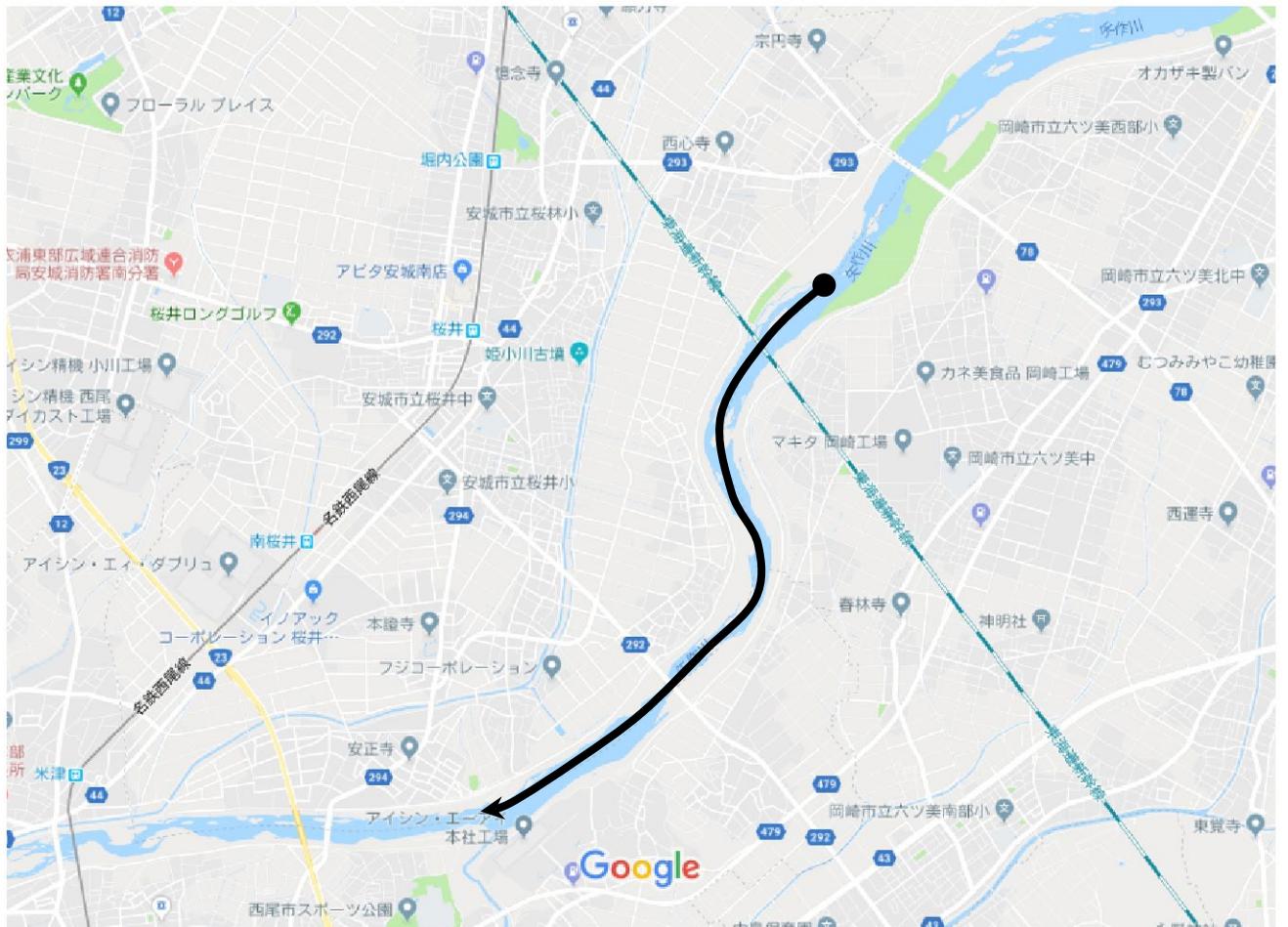
気持ちよさそう！楽しそう！



表彰式の様子



右: 今回の取材の様子
左から、野村さん、深津さん、太田、大屋さん



地図データ ©2019 ZENRIN 500m

【矢作川くだりのルート(取材者作成)】

安城市川島町上堤東(川島河川敷公園)から安城市藤井町阿原の藤井公園東の堰までの約4.5km

取材者名

石原 淳(アジア航測)
今村 豊(根羽村森林組合)
内田臣一(愛知工業大学)
宇野利幸(国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所)
太田 修
沖 章枝(水と緑を守る会・岡崎)
神本 崇(国土交通省中部地方整備局 豊橋河川事務所)
近藤 朗(愛知・川の会)
清水雅子(愛知・川の会)
洲崎燈子(豊田市矢作川研究所)
瀬川貴之(愛知・川の会)
曾我部行子
高橋伸夫(西三河野鳥の会)
筒井信之(基デザイン研究所)
手塚透吾(アジア航測)
丹羽健司(地域再生機構)
野田賢司(矢作川環境技術研究会)
浜口美穂(ライター)
安井雅彦(愛知・川の会)
吉橋久美子(豊田市矢作川研究所)

(五十音順)